

生徒会役員共～if～

ノンキ者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生徒会役員共に、もう一人入れたら…という設定で書き始めました。ちなみに原作に
沿つて話を進めますので、これといってカップリングがあるわけでもありませんし、オ
リキヤラに恋人ができることもありません。

目

次

プロローグ	
各種設定	
生徒会	
生徒会の活動	
日常	
時に君はSかMか	
精神年齢を答えればわかりません	
51	

98 87 73 63 39 29 16 8 5 1

授業しろよ	
怖い話…?	
受けがあるなら攻めがあるだろう	
132	
海へ行こう	
旅館に泊まろう	
新しい桜才のパイオツマニア	
決戦、柔道部	
生徒会新聞	
体育祭	
リアルメイド	
文化祭	
教師との背徳恋愛	

254 239 225 211 200 185 170 158 145 121 105

泥沼現場

クリスマスパーティ

新年一発

293 278 266

プロローグ

いつも通りの朝で、いつも通りじゃない朝。

俺は同じ学校に通う友人を待っていた。今日から俺たちも高校生である。遅れたくないが、まだまだ時間はある。

「タカ兄、早く早く！」

「はいはい」

しばらくすると、中から友人である津田タカトシが出てきた。その妹のコトミも一緒に

である。

「おはよう、ハルカ」

「おはようございます、ハルカ先輩」

「ああ、おはよう」

ちなみにタカトシの妹のコトミは、まだ中学3年生である。

「それじゃあ行つてくるよ」

「じゃあがんばれよー」

タカトシと俺とでコトミに挨拶する。

「あ、二人とも電車の中は気を付けてね！」

コトミが気づいたように大声でいう。でも何を気を付けるのだろうか？

俺たちは雑談しながら駅に向かい、電車を待つ。

（なんだ、何もないじゃないか）

電車がやつてきて、ドアが開く。そこで俺たちは、コトミの言っていた気を付けての意味を理解した。

何しろ、電車の中は女子高校生しか見当たらないからだ。それも俺たちと同じ学校の。電車の中を見ると、数少ない男性は全員両手を上げていてる状態で乗っていた。どこか居づらそうであるが、その気持ちはわかる。

周りに異性しかいないというのは、居心地の悪さを思うのだ。

女子だけの空間を脱出し、俺たちが学校に向かう。まあ中に乗っていた女子高生も全員降りる。

俺たちが入学したのは、もとは女子高であつた桜才学園である。少子化の影響で、今年から共学になつたのだが、やはり女子が多い。聞いた話だと、男子と女子の比率は、28：524だという。

「女の子ばっかりだな」

タカトシが話題を振ってきた。

「確かに。これは3年間大変そうだな」

校門に吸い込まれるようにに入る生徒は女子しか見えず、男子は見当たらない。

「家に近いから選んだけど、こうも多いと、な」

「そうだな。いろいろ気を付けないと」

「こら、そこの男子生徒と女子生徒！」

突然前から、『生徒会』と書かれた腕章をつけた、髪の長い綺麗な女子生徒が大声で俺たちに言う。

「男子生徒のほうは、制服の着方がだらしないぞ。少なくとも、ネクタイはちゃんと締めろ」

現在のタカトシは、ネクタイを緩め、ブレザーのボタンをはずしている。

「君たちは新入生だろう」

「は、はい」

「そうですけど：（生徒会？）」

タカトシの目が腕章に向けられている。おそらくこの女子生徒は生徒会の一員なんだろう。先輩だろうか？

「まつたく、近頃の学生はラフなスタイルが格好いいと思つていてるから困つたものだ。その点、私はちゃんとしめてるぞ」

「締りの悪い女とは思われたくないからな！」

「……は？」

何言つているんだ、この人？

「とりあえず、君は校則違反だ。どれ、私が直してやろう」

生徒会の人気がタカトシのネクタイを握り、それに顔を染めるタカトシ。まあ綺麗な人にここまで近くに来られたら、顔を赤くするだろうな。

「と同時に、校則違反の罰を執行する」

と言いながらタカトシの首をネクタイで絞める。これは苦しそうだ。

「そして君」

「はい？」

俺は別に着方を着崩しているつもりはないのだが……。

「なぜ男子の制服を着ているんだ。女子の制服を着ないか！」

「……応覚悟はしていたけど言われるとグサツと来るよ！」

申し遅れたが、俺の名は御堂ハルカ。

人生一番の悩みは、男に見られたことがないことである。

各種設定

登場人物

・名前

御堂 ハルカ

・読み

みどう はるか

・性別

男

・年齢

15歳（今年16歳）

・容姿

長い黒髪はシノみたいだが、それを後ろで一本にまとめている。三葉ムツミと違うのは、前のほうにたれている髪がないこと。

本小説の主人公。女子のような見た目なので、まともに男と見られたことはない。その上男子にはよくモテるし、よく告白されたりする。女子からは同性の友達という扱い

でモテる。

生まれたときも、出生届けを提出した後に男の子だと気づくほどだった。それまで看護婦も女の子だと思つていたらしい。なので女の子っぽい名前になつてゐる（一応戸籍は男に修正されている）。

本人は見た目と名前にかなりのコンプレックスを持つてゐる。この点は、身長にコンプレックスを持つてゐる萩村スズとは気が合う時もある。

津田兄妹とは家が隣同士なので親交があり、よく一緒にいる。昔はコトミにハル兄と呼ばれていたのだが、最近ではハルカ先輩になつてゐる。ただ最近になつて戻された。一応体は鍛えているので、それなりに体力はある。成績は優秀な方といつたところ。基本はツツコミ役である。コトミのおかげで、色ボケにも対応することができる。だがあまりに重いネタだと引くことも。

実はトリプルブツキングのファンであつたりする。

ほかの人は原作通り

各種設定

- ・ 桜才学園

ハルカ達の通う学校。少子化の影響から、50周年を迎えた今年から共学となつた。共学化初年度の男子と女子の比率は28：524。

生徒会

さきほどすごいショックなことを言われて沈んでいた俺だが、なんとか復活することができた。見るとタカトシも復活したようだ。

生徒会の人（以下生）「なんだ、いきなりショックを受けた顔をして。どうしたんだ」
ハルカ（以下ハ）「俺は男です！」

大声で言いながら身分証を見せると、生徒会の人は驚いた顔をした。

生 「そうか、それはすまなかつたな」

ハ 「わかつていただいてありがとうございます」

どうやら理解してくれたようだ。

生 「とにかく君、制服は正しく着るべきだ。一人一人が正しく制服を着れば、気持ち

よく授業を受けられるだろう」

タカトシ（以下タ）「でもこの手の検査つて、教室に行つてしまえば戻しちゃうから無

駄なんですよえ」

ハ 「おい、バカ…」

生 「ではもつときつく締めてやろう。ほどけないようにな」

ネクタイを握り、さらにきつく締める（締め上げる？）生徒会の人。

タ「死ぬかと思つた…」

ハ「自業自得だ」

さすがに今回はこいつが悪い。

？「まつたく、呆れたものね。私たち生徒会の活動は行動することに意義がある。やつても無駄だというのは理想に向かつて行動できない怠け者の逃げ道」

別の方角から、こんどはツインテールの生徒会の人がやつてきた。ただし…

生2「あんたみたいな小さい人間、嫌いなのよ！」

身長は小学生並みだった。一応制服を着ているから、こここの生徒なんだろうけど…

タ「あの、こちらのお子さんは？」

ハ「小さい人間？」

タカトシと俺が思わず口にする。ちなみに俺は指をさす。決してワザとではない。

生2「きさまー、言つてはならないことを言つたな！というよりそつちはもつと失礼だぞ！私を怒らせるはどうなるのか思い知らせてやる!!」

そういうて、俺の顔に向かつてけりを繰り出す…が、身長差のせいで届かない。と思つていたら、靴が脱げてこちらの視界に広がつてくる。仕方がないのでよけることにした。

結果、後ろにいたタカトシに靴が当たる。：悪いとは思いつつも、靴跡が残るタカトシの顔は少々滑稽だ。

生2 「これでも私は16歳よ」

タ・ハ 「「ええーーー!!」」

これには心底驚いた。

生2 「しかもIQ180の帰国子女で、もちろん英語ペラペラ、10ケタの暗算なんて朝飯前！その才能を買われ、現在生徒会の会計を務める!!どお、これでも私を子ども扱いできる!?」

生1 「だが夜9時には眠くなる」

タ・ハ 「「子供だ！」」

生2 「コノヤロー！」

しばらくぽかぽかなぐり続けるが、はつきり言つてあまり痛くない。

？ 「こらこら二人とも。新入生を困らせちゃだめよ」

タ（またなんか来た）

ハ（生徒会つてここ集合なのか）

別のほうから、お嬢様っぽいひとがやつてきた。また生徒会の腕章をつけている。

生3 「ごめんなさい、足止めしちやつて」

タ「いえ、ありがとうございます」

ハ「助けに来てくれたんですか？」

生3「うんうん。面白かつたからそこの陰でずっと見てたわ」

タ・ハ「助かんね！」

思わず言つてしまふ。

生3「ところで、あなたがたはなんでこの学校に入つたの？」

タ「え、えーっと、家から近かつたからで…」

ハ「同じく」

生3「そうなんだ。共学化が決定したとき、男の人はハーレム目的で入つてくると聞いていたから」

妄想

女子『きやー。待つて〜』

男子『あはは。もう女の子はこりごりだぜ！』

タ・ハ「ないない」

思わず変な妄想をしてしまつた。

生3「でも無駄なのにな。うちの学校の娘たちは、女の子にしか興味はないから」

：冗談だと思いたい。

生1 「彼女は思いジョークが好きなんだ。私はノーマルだぞ」

生2 「私も同じく
よかつた、冗談で…。」

キーンコーンカーンコーン

生1 「お、仕業の鐘だ」

タ「ちょ、こんなところでぐだぐだしていたから、俺たち遅刻じやないですか！」
ハ「そうですよ！」

生3 「あらあら」

生1 「そうか、それはすまなかつたな」

タ・ハ 「「はあ」」

生1 「お詫びに君たちを生徒会に入れてやろう」

タ・ハ 「「はっ!?」」

超展開乙。じゃなくて！

ハ「どうしてですか？」

生1 「君たちも知つてのとおり、桜才学園は今年から共学になつた。そうなると、これから学園生活も勝手が違つてくる。できれば、男の視点で意見できる人物がいれば助かるんだ」

タ 「でも生徒会なんて、俺には荷が重いですよ」

ハ 「俺を除くな。俺もきついと思ひます」

生1 「何軟弱なことを言つてゐるんだ。私なんて月に一回重い日があるんだぞ」
タ・ハ 「知つたこっちゃないですか？」

またいきなり変なことを言つてきた。本当にこの人大丈夫だろうか？

生2 「会長、こいつらを本当に生徒会に入れる気ですか？」

生1 「不満か？」

生2 「おつしやる意味はよくわかります。でも男つて不衛生だし、由緒ある生徒会室

が汗臭くなりそうで…」

タ 「偏見だよー」

男に対してもう一つイメージを持つてゐるのだろうか？

生2 「まあこいつは女顔ですし、そういうことはなさそうですが」

こいつで俺をさすツインテールの生徒会役員。ガクツ

生3 「まあまあ、この二人、真面目そうだから大丈夫よ」

お嬢様風の生徒会役員がフオローする。

生3 「イ〇臭くなると思うけど」

⋮ フオローにならなかつた。

生1 「まあ君たちが入ってくれれば助かるだろう。正直、君たちにも興味があつてな」
会つたばかりなのに、何か印象に残るものがあつたのだろうか？

生1 「保健体育の授業だけでは物足りなくてな」

俺たちの股のあたりを見ながら言う。

ズササ

少し距離を置く俺とタカトシ。

生1 「なに離れているんだ。まあいい。というわけで、私は2年生徒会長の天草シノ
だ」

生3 「同じく2年、書記の七条アリアよ」

生2 「あんたと同じ1年の会計、萩村スズ

シノ（以下シ）「そして君！」

天草先輩は俺を指差す。

シ 「君は生徒会総務になつて、全体のサポートを頼む。そしてー」

今度はタカトシを指差し。

シ 「君には、生徒会副会長となつて、私の右手を勤め上げてくれ。頼んだぞ」

スズ（以下ス）「右手？」

アリア（以下ア）「右手じゃある意味恋人ね」

タ「ちよ、俺入学したてなのに生徒会役員!?しかも副会長!!」

ハ「仕方がない。諦めよう」

タ「ハルカは総務だからまだいいでしよう。でもこつちは副会長だよ!」

ハ「頑張れ。ちなみに交代は拒否な」

嘆くタカトシを横目に、生徒会役員を見る。最初は危なそうな人たちだと思つたけど、話してみると結構面白い人たちだった。

入学早々生徒会役員は大変だろうけど、それ以上に楽しい学園生活が始まるのかもしれなー

シ「ところで君は、女子の制服のほうがよさそうだな」

ア「着てみる?」

⋮どうやらそれ以上に波乱の学園生活となりそうだ。まずはどういつて拒否しようか。

生徒会の活動

少子化の影響で、今年度から共学になつた桜才学園。

そこに入學し、なりゆきで生徒会役員となつた、總務の俺こと御堂ハルカと、副会長の津田タカトシ。タカトシはとくに大変だろう。なにしろ入学早々副会長を命じられるのだから。

とはいへこの生徒会、なんだかやつていけそうである。なぜなら――

タ・ハ 「「遅れました!!」

ス 「遅ーい」

ア 「あらあら」

シ 「何やつているんだ。今日は大事な会議があるといつただろう」

ハ 「すいません」

タ 「実は道に迷つてしまつて」

シ 「ふむ。君たちは新年生だからな。よし、今日は学園を案内しよう」

ア 「わあー」パチパチ

こんな感じで進んでいくからだ。というより、大事な会議はいいのだろうか?

シ「ここは保健室だ」

場所移動

シ「ここが女子更衣室だ」

場所移動

シ「ここは使われていない無人の教室だ」

場所移動

シ「なんだ。男子が聞いてドキッとしそうな場所を優先的に紹介しているのだが、不満なのか？」

ハ「はい」

タ「うん」

というより、体育倉庫で何をするつもりだ。

場所移動

シ「ここは音楽室。グランドピアノの上が使いどころだ」

タ「続けるんだ…」

ハ「というよりなんの使いどころだ？」

まあこの先輩が紹介するところだからろくでもないことかもしれないが、ピアノ壊れないのだろうか？

ないのだろうか？

2—Bと書かれた教室の前にきた。

ア「ここが、私とシノちゃんの教室だから、困つたことがあれば、なんでも相談してね」

タ「はい」

うん、覚えておこう。でも1年のフロアより居づらい。男子が一人もいないから（1年には男子が各教室に最低でも5人はいる）。

ア「でも、こうしてみると少子化が悪いってこともないわね」

ハ「はい？」

ア「だつて、3年生になつて、P組まであつたら大変じやない」

シ「クラスのイメージカラーはピンクだな」

ア「うんうん」

…突っ込むべきなのだろうか？ちなみにほかの二人は少し下がつている。
女子トイレの前に来た。

シ「ここは女子専用トイレだ。男子は教員用を使うように」

ハ「はい」

シ「そして御堂は、女子トイレを使うように」

ハ「なんですか！？」

小学校からずつと言われていることだが、とても屈辱的だ。

ア「でも、御堂君なら女子トイレに入つても、違和感ないかも」
そんなことはないだろう。何しろ男子の制服を着てているのだから――

タ・ス・シ「[確かに]」

ハ「ちよつ!」

タカトシまで言うか!

シ「そうだ、言い忘れていた」

：何をだらうか?

シ「ここでは用を足す以外に、ナ○○ンを装着したりする」

タ「そんな説明だれも求めていないです」

真面目に聞いた自分がバカだった。

ア「ちよつとシノちゃん!! 私はタ○○ン派よ!!」

ズルツ

思わずこけてしまった。

シ「すまない。自分を基準に語つてしまつた」

タ「これいつも続くの?」

ス「私はもう慣れた」

今俺らは廊下を進んでいる。

「会長、お疲れ様でーす」

歩いていると、いろいろな人が会長に挨拶する。

タ 「挨拶されるなんて、さすが会長、人望ありますね」

シ 「うむ。まあ慕われなければ人の上に立つことなどできないからな。君も副会長として尊敬されるようにがんばれ」

タ 「いや、俺そーゆーの苦手で」

シ 「もしかして、蔑まれた方がいいのか？Mだったのか」

ハ 「発想が極端すぎます」

タ 「ナイスツツコミ」

ス 「ここが屋上よ」

そういうつて萩村はフェンスのほうへと向かつていつた。
ちょうどいい風が吹き抜ける。まだ春の香りがした。

ス 「私、高いところが好き」

ハ 「へえ、そうなんだ」

タ 「なんで？」

ス 「：人を見下ろせるから。笑えばいいじゃない」

タ「いや……」

笑う笑わない以前の問題だと思う。

タ「あれ、会長は来ないんですか？」

ハ「もしかして、会長つて高いところ苦手ですか？」

屋上へ通じる扉にしがみついたまま動こうとしない会長にたずねてみる。

シ「い、いや、そういうわけではない!!」

ハ「でも足が震えますよ」

シ「こ、これはー」

シ「楽しくて膝が笑っているのさ！」

シ「それほどうまいことは言えてない。というより無理がありすぎる。

シ「さて、今日の本題だが」

学校案内が終わり、生徒会室でさきほどの続きをを行う。もともと自分たちがもつと早く学校内を把握していかなかつたから貴重な時間をつぶしてしまつたんだな。そう思うと申し訳ない気持ちになつた。

シ「今年から共学になり、男子生徒が入ってきたわけだが、男子と女子の垣根をなくしていくのが、我々生徒会の役目だろう」

ア「さすがシノちゃん、いいこと言うわね」

自分の気持ちを知つてか知らずか、会長が議長になり（当たり前だが）会議を進めていく。

シ「共学にもなると、我々は様々なものを共有していくことになる」

ア「たとえば？」

シ「プールの水とか」

ア「今年の夏はドキドキね」

前 言 撤 回。

タ（辞任したい）

タカトシは辞任したいと考えたことだろう。

タカトシ s i d e

桜才学園生徒会長の天草シノは、右も左もわからない俺たちに対して、手取り足取り教えてくれる面倒見のいい人だ。

タ「あの会長、これは」

シ「君は私の右腕なのだから、右側に立て!!」

でも変な人である。

シ「そういえば君と御堂は親友なんだな」

タ「ええ。あいつは家が隣なんで、小さいころから遊んだりしたんですよ」

シ「そうか。ギャルゲームみたいにツンデレの女の子だつたらいいのにな」
タ「は？」

シ「最近いじめが社会問題になつていてる!!」

日も変わつて、別の議題の話をしている時だ。

シ「そこで、我が校でも緊急アンケートを行おうと思う」

ア「いじめはいけないこと?」

シ「当然だ」

ア「私の父は、母に毎晩イジメられて喜んでいるけど」

シ「仲睦まじいじやないか」

タ（天然）

この人はどこか天然なところがある。

ザザツ

ちなみに七条先輩の隣に座っていたハルカは、微妙に距離を置き始めた。

ハ「しかし思つたんですが

離れた状態のままハルカが意見をする。

シ「なんだ？」

ハ「アンケートをしたところで、本当に答えてくれますかね？」

シ「ふむ。そうだな、Sな奴なら喜んで書くだろうし」

ハ「いや、いや、そういうことじやないですけど…」

とりあえず、アンケートを行うだけ行ってみるという結論でまとまつた。

タ「ふあ～～～～…」

ハ「ん、眠いのか？」

タ「午後つて眠くなりません?」

ア「そうだねー。お昼の後だし」

ハ「そうだな。お前の隣にも寝てるやつがいるし」

いつの間にか萩村が寝ていた。

ア「ちなみにスズちゃんは、本当に昼寝しないと体が持たないの」

タ「子供だー」

バキツ

萩村に殴られた。

ア「ちなみにスズちゃんは、寝ても周囲の反応にこたえることができるのよ」

タ「：そういうことは、もつと早く言ってください」

ハ「大丈夫かー？」

タカトシ side out

少し（いや、かなり）小柄な同級生にして、桜才学園生徒会会計の萩村スズ。いつも腰に手をあてて、なんだか偉そうだ。

ハ「どうして萩村つて、そんなポーズとつてるの？」

ス「私、こんだからなめられないようにこのポーズにしてるわけ」

ハ「あ、なるほど」

理由はあつたのか。

ス「しかし、このポーズには大きな問題が」

ハ「何？」

ス「こうしていると、前ならえの先頭を彷彿させる。このジレンマどうしたらいいの？」

ハ「知るか」

でも確かに、後ろにランドセル背負った子供が前ならえをしている姿が想像できた。
そして萩村もランドセルを背負った子供に――

ス「なんか失礼なこと考えたよなあ？」

ハ「き、気のせいだよ。アハハ：」

シ「より良い学園生活のために、目安箱を設置しようと思う」

ス「ですが、以前も設置して、あまり効果がなかつたんですね」

シ「うん。だから入れたくなるように工夫してみた」

そして、目安箱の入れ口にマジックで何かを書き足す会長。

シ「できたぞ」

ちなみに表現は自主規制いたします。

タ「これは不信任モノだろ」

放課後、七条先輩が目安箱を持つてきた。

ア「今日はいっぱい投書があつたよ」

ス「やはり、男子が入つたことにより、意見が出るようになつたのでしょうか?」

ハ「逆に、男子がなにか意見しているのかもな」

目安箱を開けると、たくさん出てきた。

タ「へえ、ほんといっぱい来てるな…」

適当に一つ取り出して開いたタカトシが絶句する。何が書いてあるか気になつたので見てみると。

『会長に手を出したら穴ぶち抜きます。』

と書かれていた。

ア「シノちゃんのファンクラブの子からじやないかしら?」

タ「怖いなあ」

シ「これは御堂あてだな」

ハ「どれですか？」

『御堂君が男子のわけがない。女子の制服を着なさい』
：少々いい加減にしてほしかつた。

ア「これもだね」

『バレンタインは君のチョコレートを期待しています』

紙を破らなかつた自分をほめてもらいたかつた。

ス「これもあんたね」

『君は男子なのではない！君は、第三の性別ハルカなのだ!!』

バリバリバリバリ

思わず紙を引き裂いた。

シ「なんだいきなり。紙を破るなんて‥」

会長が何か言つてるようだつたが、黙つてしまつた。まあいい。

シ（な、なあ。なんだか怖いんだが）

タ（あいつ、怒ると怖いんですよ。下手したら流血騒動になります。というより中学

でなりました）

何かひそひそ言つてゐるがまあいい。とりあえず、コンナコト書イタ奴ヲ見ツケ出サ

ナケレバ：

1時間後、ハルカはこれを書いた人間を探し出すことに成功した。そして、その教室からとても人のものとは思えない悲鳴が出たが、それを見たものは全員口を噤んだ。もちろん、生徒会関係者も…。

日常

ある日のこと。

シ「明日、全校生徒の前でスピーチを行う。そこで、君たちにも壇上に立つてもらうぞ」

タ「でも、大勢の人の前に立つのは緊張しますよ」

シ「何を情けない。私は大勢の人の前に立つと興奮するぞ!!」

ハ「それもダメでしょ」

もしかして、それが会長になつた理由なのでは?

そう考えたのだが、怖い答えが返つてくるのは嫌なのでやめた。

今俺は七条先輩とタカトシとで書類を片づけていた。ちなみに萩村はまだいない。

タ「いつも思うんですが、副会長つてどんな仕事をすればいいですか?」

ア「そうねー会長の補佐なんだから、シノちゃんが困つたら手伝つてあげたら」

タ「なるほど」

ア「でも、シノちゃんつて勉強も運動もできるし、礼儀や作法、家事も完璧。とくに
ないわね」

タ「えー」

俺には一つ思いつく仕事があるのだが…。
ガチャ

シ「もう来てたのか。実はここに来る途中で財布を拾つてな。心苦しいのだが、持ち
主を特定できるものがないか探してみよう」

そして財布の中身を見始める会長。

シ「持ち主は女だ」

タ「なぜわかるんです？」

シ「ゴムが入つてなかつた」

タ「：それじゃあ俺も女になりますよ

呆れたように言うタカトシ。

ハ「よかつたじやないか、タカトシ」

タ「何が？」

ハ「仕事があつたぞ。ツツコミ役という」

タ「：なんか疲れるなあ」

ちなみに会長は何がなんだかわからない風だつた。

そして、やつと会議が始まられることになつた。

シ 「ではこれから会議をはじめ…あれ？」

ハ 「萩村、来てませんね」

バン

ス 「こんな体でも、来てるわー！」

ハ 「何がだー!!」

いきなり怒鳴られても困る!!

ハ 「そういえば、ここつて校則で校内恋愛が禁止なんですよね」

ふと思つたことを口にしてみた。

シ 「当然だ。学校とは勉学に励む場であり、それから逸脱する行動は一切認めない」

ス 「しかし、なんでもかんでも規制するのは、生徒の積極性に支障をきたす恐れがあります」

萩村が言うと、会長は少し考える。

シ 「では恋愛はだめだが、○○○は解禁しよう!!」 ↑好きな言葉をいれてください。

ハ 「そんな校則、どこにもないと思います」

そもそもそれは勉学から逸脱していいのだろうか？

タ 「でも覚えること多くて大変ですよね」

タカトシが先輩たちに言つてみる。だが、爪を噛みながらはよくないとと思うぞ。

シ「津田、爪を噛む癖は直した方がいいぞ」

タ「あ、すいません」

ア「癖は一度見に着くとなかなか抜けないからね。私も、お尻いじるの癖になりそ
うだけどなんとか踏みとどまっているわ」

タ「…ほめるべきですか？」

ほめないべきだろう。

「お前ら、生徒会入ったんだってな。すげーじやん」

そう俺たちに話すのは同じクラスになつた柳本ケンジ。この学校に入つてからでき
た友人で、最近クラスでは、この3人でつるんでいる。

タ「まあ、成り行きで」

ハ「同じく」

苦笑いしながら答える。ちなみにタカトシはため息をついていた。

ケンジ（以下ケ）「でも美人揃いじやん。まあひとり子供がいるけど。変わつてほしい
くらいだぜ」

タ「え、じゃあ代わる?」

ケ「え、いや…」

タ「なんだよつやる気がないならやるとかいうな、この鬼畜め!!」

ケ「す、すみません…」

ケンジが俺のところによる。

ケ（生徒会で何があつたんだ？）

ハ（きっと、疲れているんだよ）

真実を語るのは少しあれなので適当に誤魔化す。まあ嘘はついていない。

ハ「あれ？」

視界の隅の方にある自販機に、見覚えのある人物がいた。萩村だ。別にいることは問題ないのだが、なぜかストレッチをしていた。

ハ「何やつているんだ？」

気になつたので、近くによつて聞いてみた。

ス「見てわからない？ストレッチよ」

ハ「いや、それはわかるけど、なんで？」

ス「うん？」

ストレッチを終わらせたのか、立ち上がる萩村。自販機に向くと、背伸びをし始めた。

ス「足攣らないように…」

ハ「ご苦労様です」

その姿勢に、なぜか涙がでそうになつた。

突然の話だが、会長である天草シノは、周りの生徒からよく相談を受ける。

タ「会長つてやつぱり人望ありますね」

シ「まあ会長として当然の責務だ。私は口はかたいしな。ちなみに私は下の口もかた
いぞ。ガードが」

ハ（なんでこの人いつも一言多いんだろう…?）

ス「ちよつと津田、御堂！」

萩村が呼ぶ。

ス「この報告書誤字が3か所、津田のは4か所あつたわ」

タ「マジで？」

ス「あんたらたるんでるわよ。ちよつとそこに座りなさい！」

言われるままに座つたはいいが、目線がどうしても萩村のデコのあたりになつてしま
う。ようは座つても俺たちのほうが高いのだ。

ス「そこにひざまずけー!!」

タ・ハ（面倒くさい人だ…）

別のこと

シ「新聞部からの取材のオファーー？」

ス「はい、そうです」

シ「すると、インタビューとかあるわけだな。練習しなくては」

どうやら会長はインタビューとかが苦手なのだろう。

ア「津田君、インタビューの練習をしてあげたら。詳しいでしよう?」

タ「え、なんで俺が?」

確かに。タカトシは新聞部などにいたこともないし、得意な理由が思いつかない。

ア「AVでよくあるじゃない。インタビューするシーンとか」

シ「よろしく頼む」

タ「え……ちょ……なんでそういう方向で決まっちゃうの?」

：俺の名前が出なかつたのは信頼されているのかそれとも単に男と見てもらえていなかつたのか。

取材当日

〔新聞部の畠です〕

シ「う、うむ。こちらこそ」

ランコ（以下ラ）「あまり緊張なさらずに。楽にしてていいですよ」

シ「そ、そうか」

そして、なぜかテーブルの上で横になる会長。

シ「今日は多い日でな。立つても座つてもつらい」

ラ「そうですか。ではインタビュー始めます」
そういうつてシノにマイクを向ける。なぜか一緒に横になる。
ラ「失礼します」

シ「すまんなあ」

タ・ハ（（慣れろ。慣れろ俺））

こうして、インタビューは（おかしいながらも）順調に進んでいく。
ラ「では次に写真撮影をしまーす」

カメラを構えながら生徒会メンバーに声をかける。

ア「えー、恥ずかしいなあ。ポーズとつた方がいい？」

ス「ノリノリですね」

ハ（つーか、普段の言動は恥ずかしくないのだろうか？）

ハルカはふと疑問に思つてしまつた。

ラ「紹介記事としての写真なので、生徒会室をバツクに皆さんは普通に立つていてください」

紹介記事としては妥当だな。

シ「なるほど。ギャルgee式画面撮りというやつだな」

タ「それ初めて聞いたんですけど

なぜこの人たちは変な言い回しをするのだろうか？

ラ「では最後に、男子代表として副会長の津田君にインタビューを」

ハ「変なこと言うなよー」

タ「言わないよ。そうですね、男女ともに隔たりのない関係を築いていきたいと思つております」

シ「つまり更衣室やシャワー室の壁を取つ払つたりか？」

ア「エロイね」

ス「性欲の塊ね」

ハ「なぜ変に解釈する」

ラ「副会長はエロイと…」メモに書いている。

タ「えー、あんたもそつちの人間」

タカトシ、どんまい。

ラ「じゃあ次に第三の性別代表としてハルカさんに…いえ、なんでもないです」

ハ「そうですか。聞き違いでよかつたです」

さすがに生徒会室を流血に染めたくないからなあ。

【御堂ハルカの前で『第三の性別』と言つてはならない。言つたものは命の保証をしな

い】

これが、
桜才学園の校則に追加された。

時に君はSかMか

タカトシ side

なんだかんだで、俺たちが桜才学園に入学してから、ひと月が立っていた。それは、俺たちが生徒会に入つてからひと月たつたことになる。

生徒会に入るのは初めてのことなのだが、そのなれない環境と、慣れない人たちに翻弄される毎日だつた。

まあ何もない日常をただ過ごすよりは、楽しい高校生活だと――

「ごめーん、だれか○○○○持つてない?」↑お好きな文字を入れてください。

アハハハハ

「ほら、いくよー」

ヒューン

「ありがとー」

ただこの女子だらけの空間に慣れないでいた。というより男がいるのを気にしてないのか?

元女子高だから、男子はあまりいない。男子と女子の比率は28・524といわれる。

ほかの男子は、女子に囲まれることをうれしく思つてゐるみたいだけど、俺からしたら、少し肩身の狭い日常だ。

「あ、ほら、ムツミ」

「ふえつ!?

タ「ん?」

前を見ると、顔を赤くした女子がこつちを見ていた。

「ほらほら」

「今がチャンスだつて」

その周りにいる3人の女子が、その背中をおす。

「「せーつの」「」

「うわつとつとつと」

ムツミと呼ばれた女子が、俺のもとへ押されてくる。よく見れば同じクラスの三葉ムツミであつた。

タ「どうしたの?」

ムツミ(以下ム)「あ、あの:」

ム「あの、津田君、いや、タカトシ君!」

タ「なんで言い換えたの?」

ム「あの、その、話があつて：」

タ「う、うん」

氣が付いてみると、周りがみんな立ち止まつて見ていた。

ム「わ、私！」

タ「うん」

ム「私、作りたいの!! 柔道部を!!」

ズサツ

そんな音が周りからした。それより、意味が分からなかつた。

タ「えつと、なんでそれを俺に？」

ム「え、だつてタカトシ君副会長でしょ。協力してほしいなつて」

タ「あ、そういうことか！」

よかつた、変なことじやなくて。ちなみに周りにいた人たちは（三葉の周りにいた女子を除いて）全員舌打ちをしていた。何を期待したのだろうか？

タカトシ side out

現在、生徒会会长である天草シノは、手元の雑誌に見入つていた。なんでも、今度行く修学旅行に關することらしい。

シ「いかん、会長たる私が、こんなに浮ついては、生徒に示しがつかん」

まあ浮ついているのはあまりよくないだろう。とはいっても、自分も小学生や中学生のころは修学旅行が近づくとこんな風になっていたと思う。

シ「金閣寺、楽しみだな。こう日の光を受けて緊縛がきらきらと」

ア「緊縛じゃなくて、金箔」

シ「おう、私としたことが楽しみすぎて間違えてしまった」
いつも通りじやないか。

タ「会長」

タカトシが生徒会室ドアを開けて入ってきた。

ハ「どうしたんだ？」

タ「実は、会つてほしい人が」

今度は、元気そうな娘が：つて、同じクラスの三葉だつた。

シ「結婚でもするのか？」

タ「あんた俺のなんなんだよ」

というより高1で結婚はないだろう。

ム「私、タカトシ君やハルカ君と同じクラスの、三葉ムツミです。じつは、新しい部

活を作りたいんです！」

どうやらそのために来たようだ。

ア「それで、何の部を？」

ム「柔道部です！」

そういうえば三葉はそういうのが好きだつて言つていたな。

ア「ああ、知つてる。寝技が48個あるやつよね」

ハ「全然知つてませんね」

この人もいつも通りだつた。

ム「本当はムエタイ部とかがよかつたんだけどね。ま、メジャーなところで柔道を」

タ「三葉つて、自己紹介でも言つてたけど、格闘技が好きなんだな」

ム「うん！　己の技を磨いた、体と体のぶつかり合いが熱いじやん!!」

よっぽど好きなのだろう。とても楽しそうに話している。

シ「うん、確かに！」

タ「会長、全然違うこと考えてませんか？」

絶対別のこと想像したのだろうな。タカトシも同意見だつたようだ。

ス「新しい部を設立するには、部員が5人以上必要ね。それ以下は同好会という扱い
だけど」

ム「なんでこんなところに子供が？」

ス「なつ！　津田、ちょっと肩貸しなさい!!」

そして、肩車になつた。でも余計子供に見える。

ス「私の名前は萩村スズ。あんたと同じ16歳よ！ IQ180の一（これ以下はこの間とかぶるので省略します）——どお、これでも子ども扱いする？」

ム「へー、すごいね」

でも絶対10ヶタの暗算で絶対簡単な式になつてゐるはずだ。三葉の中では。ス「もつと複雑な計算にしろー！」

ご愁傷様です。

ム「とりあえず、部員5人のところを、4人にはすることはできませんか？ すでに3人はキープしてゐるので」

シ「却下だ」

ム「ちゃんと理由はあるんですよ。ストレッヂするときつて、2人1組になるじやないですか。でもそれだと、1人余つちやつて嫌な感じしません？」

シ「ふむ、確かに」

三葉、喜んではいるが、それだと理由にならない気がするぞ。

シ「ならば、必要定員を、6人にしよう。頑張つて探してこい」

ム「あれー。ハードル上がつちやつた」

当然だろう！

結局、あと1人探すことになった柔道部。それまでは同好会という形で作られることになり、柔道場の使用許可を下した。

ア「そういえば、津田君と御堂君は以前部活とかやつてたの?」

タ「ええ。小学生の時は野球、中学生の時はサッカーを」

ハ「俺は、小学生の時はバスケ、中学生の時はバレーですね」

シ「ほー」

ア「男の子ね」

シ「三人とも玉遊びが好きなのか」

ア「男の子だもの」

タ・ハ「なんか引っかかる言い方だな」

というより顔を赤くするな。

シ「さて、本題に入ろう」

やつと入るのか。

シ「来週から、中間考査が行われる」

そういうえばそんな時期か。

シ「知つてのとおり、我が校では試験結果が張り出される。そこで、生徒会役員は学

年20位以内に入ることがノルマにだつていて。各自しつかり勉強するように」

シ「Mならビシビシやると逆効果だから。というより悦ばすだけだから」
 タ「じゃあMでいいです」

何話しているんだか。とりあえず、タカトシと会長を残して帰ることにした。
 タカトシ side

会長に教わりながら、勉強していく。会長おかげで、勉強ははかどっている。これなら
 らばとくに心配しなさそうだ。

シ「津田は電子辞書を持つているのか」

自分が使っている電子辞書に、会長の興味が向く。

タ「ええ。便利ですよ」

シ「そうなのか。しかし私はこういうのはあまり好きじゃないな」

タ「アナログ派ですか?」

シ「人に貸しにくいだろう。検索履歴が残るから…」

タ「わかりやすい思春期ですね」

顔を赤くしているし。

別の日。

数学でわからないところがあつた。なので一番できる人に聞いてみた。
 タ「IQ180の帰国子女の萩村、数学教えてください」

萩村に聞けばわかるだろう。

ス「べ、別にいいけど。ただ、やるなら一人つきりになれる場所で…」

タ「え…」

ス「こうでもしないと、私が教えられているとみられるのよ」

タ「大変だね」

ス「こらそこ。どんな計算30秒でやりなさいよ」

また別の日

数学でまたわからないところがあつた。でも会長や萩村は怖いので、七条先輩に聞くことにした。

ア「よーし。お姉さんがやさしく教えてあ・げ・る」

……

タ（あれ？ 思つたよりドキドキしない）

もしかして自分はMなのだろうか？

ア「そういえば、御堂君は何やつてるの？」

タ「あいつは自分で勉強できますから」

タカトシ s i d e o u t

ハ「よし、こんなもんか」

御堂ハルカは一人で勉強を進めていた。

ハ「これなら、ノルマは達成できそうだな」

特に問題はなさそうだった。

中間試験が終わった。生徒会室に役員が集まり、雑談していた。

シ「どうだつた?」

ハ「問題なさそうです」

ス「同じく」

ア「私もできたよ」

タ「俺、書いているときに解答欄ずらして書いていたら、焦りましたよ」

ス「アホね」

ア「あらあら」

ハ「大丈夫かよ」

シ「そそつかしいやつだな。ずらすのはスク水の○○だけにしろ」

……は?

ア「旧スク水つて、もうないわよ」

シ「そうか。すまなかつたな」

タ「いや、謝られても…」

よく臆面なくいえるなあ。そう感心してしまつた俺だつた。

結果発表当日。壁に結果が張り出されていた。

ちなみに俺は14位。なんとかノルマ達成した。タカトシは19位でギリギリ。萩村は言うまでもなくトップだ。

ちなみに3年生は。

1位、天草シノ。2位、七条アリアと続いていた。

シ「まあこんなものか」

ア「あーあ。またシノちゃんにトップ取られちゃつた。こつちのトップは勝つているのに」

そういうつて自身の胸を見る七条先輩。

シ「ははは…。アリアは面白いことを言うなあ」

答えられないフリがやつてきた。…どうこたえるべきか、それとも答えないべきか。

精神年齢を答えればわかりません

休み時間、タカトシ、ケンジ、俺とで談笑していた。

ピンポンパンポン

【1年A組の、津田タカトシ君。至急、生徒会室までお越しください。繰り返し…】

ム「呼ばれてるよー」

タ「はあ」

タカトシはとぼとぼと歩いて行つた。

ケ「何の呼び出しだろうな？」

ハ「さあ？」

見当もつかなかつた。

しばらくして、タカトシが沈んだ顔で帰つてきた。

タ「昼休みに会議をするから、授業終わつたら弁当持つて生徒会室に集合だつて」

ハ「それはいいんだが、なんでお前は沈んでいるんだ？」

タ「携帯没収されてな」

こここの校則では、携帯電話の持ち込みは禁止となつてゐる。

ケ「自己責任じやね?」

ケンジの一言が、タカトシの胸に突き刺さつた。

昼休み、弁当を持つて生徒会室に集まる。

シ「来週は高総体か。行事があると忙しくなるから気が滅入るな」

ハ「俺はイベント好きですけど。会長は学園のイベントは好きなのないんですか?」

シ「ふむ」

少し考え込む会長。

シ「学校を遅刻しないように走っていると、曲がり角でごつんこ」

タ「ギャルゲーのイベントは聞いてないと思いますよ」

ア「パンを咥えて、が抜けてるわ」

突つ込むところはそこなのか。

タ「そういえばそのお弁当って、会長の手作りなんですね」

シ「ああ。口だけの安い女になりたくないからな」

ハ「へえ…」

シ「でも、お高くとまつても鼻について嫌な感じだな。というわけで、手ごろな女を

目指している」

ハ「結局安くなつてません?」

タ「でもいいですよね。俺なんて昨日の残り物ですし」

ス「学校に持ってくる弁当なんてそんなもんでしょう」

それもそうだろう。現に俺の弁当も昨日の夕飯に出されたものだし。

ア「そうね。私のお弁当も残り物だしね」

残り物つて。その厚さ2cmはありそうなステーキがあまりものなのかな?

弁当を食い終わつて一息ついたころ。

シ「実はみんなに、2階の倉庫にあるものを運んでもらいたくてな。今日から3日にわけて作業を行う。大変だと思うがよろしく頼む」

「「「はい」」」

そしてその場所まで向かう。

タ「関係ない話ですけど、高校じや動物飼つてないですよね」

ハ「小学校じやないんだぞ」

ス「私としては助かるわね。動物嫌いだから」

ア「もう。スズちゃんはツンデレなんだから」

ス「なんですか、急に」

ア「だつて、よく動物がプリントされたパンツをはいているじゃない」

ス「ツ!! その口閉じろ!!!」

タ・ハ 「…子供だ」

そして倉庫についた。

ハ 「結構ありますね」

タ 「力仕事は任せてください」

シ 「ならば、その君の力を、試させてもらおう」

そしてお姫様抱っこになつた。

シ 「今日の私は重い日でな」

タ 「あれから1ヶ月立ちましたから、来るとは思つてましたよ」「あれ」新聞部の取材だろう。そういえばもう1ヶ月がたつのか。

ハ 「でも会長って、なんでも物事を完璧にこなしそうですよね」

シ 「何言つているんだ。私だつて失敗談はあるぞ。あれは中学生のころ…」

会長の話では、鉛筆を英語にしなさいという問題があり、書いていたシャープ・ペンシルにそのつづりが書いてあつたそうだ。

シ 「カンニングの戒めとして、無回答で提出してやつた」

タ・ハ 「面倒な生き方…」

とりあえず、生徒会関係の荷物を生徒会室に持つていく。すると、生徒会室に見知らぬ女性がいた。

「うい」

いきなり声をかけてきた。私服であることから教師だろうか？

？「誰？　ここは関係者以外立ち入り禁止よ」

ハ「あの、あなたは？」

？「私は生徒会担当顧問よ」

ガチャ

今度は会長が入ってきた。

？「よお、天草」

シ「？　ここは関係者以外立ち入り禁止ですが」

？「あれー！？」

本当に顧問なのか？

ナルコ（以下ナ）「では改めて、生徒会担当顧問の横島ナルコよ」

ス「そういえば横島先生がうちの顧問でしたね」

ア「全然来ないからすっかり忘れていました」

ナ「お前らな…。つで、こいつらが新しい生徒会役員？」

タ・ハ「はい」

横島先生はまず俺をじ一つとみると、次にタカトシをじ一つと見始めた。そして舌な

めずりをする。

ズササ

タカトシは少し後ろの下がる。

ナ「おいおい。私は何もしないって。とりあえず質問があつたら、なんでもしていいわよ。親睦ふかめよーぜ」

タカトシに近づきながら、横島先生が言う。でもその言葉にあまり信用ができないのはなぜだろう。

タ「えっと、じやあ横島先生つていくつなんですか？」

ナ「おいおい。女性にいきなり年齢を聞くなんて失礼だろう

タ「なんでも聞けって…」

ア「大丈夫ですよ、先生。そういう時は、精神年齢を答えればばれません」

ナ「ほおー。私の精神年齢は25に達していないと」

いきなりばれているし。あと七条先輩怖いところあるなあ。

タ「じゃあ先生はなんで（そんなん）教師になつたんですか？」

心の中で（そんなん）の部分を言つたな。：素早く。

ナ「ドラマの影響よ。問題児ばかりのクラスに赴任して、そんな生徒たちを更生させていくのにはまつてね」

そんなタカトシの心情を知つてか知らずか、理由を話し始める横島先生。でも理由は單純だった。

ナ「でもこの学校の連中優秀すぎるから、問題なんて起こらないし、共学化で私が問題おこしそうだし」

ズササササツ×2

俺とタカトシはすばやく下がる。

ナ「おいおい。そつちの津田はともかく、御堂には手を出さないって。女っぽいし」

ハ「…なあ、これは喜ぶべきなのか？」

タ「…さあ」

翌日の昼休み。

また生徒会室でお弁当を食べていた。

ハ「七条先輩の家のごはんって、とっても豪華そうですよね」

ア「うふふ。でも私、高級料理より庶民的なもののほうが好きよ。とくにアワビは苦手だし」

ハ「へえ」

ア「だつて、共食いしているみたいじやない？」

…「こはスルーするべきなのだろうか？」

タ「そういえばハルカ、知っているか。俺たちの通っていた小学校、廃校になるらしいぞ」

ハ「え、マジで?」

ア「私の通っていたところも、入学してきたのが2組分しかないらしいわ」
改めて少子化を実感するわね、と七条先輩。確かに、少子化が社会問題になってきて
いる。

シ「この少子化問題、生徒会としてできる限りのことをしようじゃないか」

なんだ。まさか、校内恋愛禁止の校則を撤廃するのか??

シ「将来性行為をする際は、常に○○○だ!」

シ「毎度思うけどよく臆面もなくいえるな。」

ア「そういうえば、昨日夜の道を歩いていたら、後ろからの足音にドキドキしちゃって」

タ「そうですね」

タ「俺も、○○○しているときに足音がすると、ドキドキします」

シ「とか言わないのか?」

タ「言わない言わない」

それは会長の経験上の話だろうか?

翌日、つまり荷物整理最終日。

シ「今日で最後だ。みんな頑張つてくれ」

会長の掛け声で現場に向かう俺たち。

ハ「そういえば、コトミもここ入るんだよな」

タ「ああ。だから頑張つているよ」

シ「だれだ、それ」

タ「俺の妹ですよ。来年ここを受けます」

シ「ほー」

荷物整理中

シ「一応確認するが、脳内の妹じゃないよな」

ハ「実際にいますよ」

というか、タカトシの妹だ。

荷物の運び出しも終わって、今清掃をしている。

ア「シノちゃん、昨日のドラマ見た?」

シ「うん。主人公の親が実は義理の親だつたことには衝撃だつた。ああいう出生の秘密は、実際に会つたらさぞかしつらいだろう」

俺は生まれたとき女の子だと間違われて出生届けを出されたことにつらかつた（一応戸籍は男に直されている）。

ア「あら、私は実際に出生に秘密、聞かされたわよ。私が○○○されたときって、○○だつたんだつて」

シ「アウトドア派なんだな」

タ「会長、ツツコミがなつちやいないよ」

というより誰が聞いているかわからない状態でそういうことを口にしないでほしい。

ア「あら、一つおいてかれているわ」
確かに荷物が一つ、残っていた。

ア「よつこいしょ。ふう、重たいわね」

ハ「あ、じゃあ俺が持ちますよ」

ア「ええ！　御堂君、セクハラだよ!!」

ハ「ええ!?」

何を持つてもらうと思つたの!?

すべてが終わり、生徒会室でお茶を飲む。

シ「ふう。最近ドライアイに悩まされて困つてing」

タ「なんですか、それ?」

シ「知らないのか。まあ、問題を交えて説明した方が憶えるだろう」

そしてホワイトボードに書きだす会長。

そこには、『（自主規制）が濡れにくい』と書かれていた。

シ「あてはまる文字は？」

タ「うーん」

ちなみにこれは喰りです。

ハ「つーか、普通に眼でいいじゃん」

なぜ眼^{まなこ}なんだよ。

ハ「あれ？」

前を見ると、萩村が勉強をしていた。参考書には、『フランス語実習』と書かれていた。

タ「萩村、フランス語を勉強しているんだ」

ス「まあね。高校卒業したら留学しようと思つて。ほかにも、英語はもちろん、イタ

リア語やスペイン語と、五か国語を話せるわ」

すごいな。萩村の脳はどれだけの容量を詰め込めるのだろうか？

ナ「ま、国際化の時代、これくらいできないとだめよ。私も二ヶ国語話せるし」

まあ先生は英語の教師だし、話すことはできるのだろう。というよりいついたんだ。

ナ「はう〜〜ご主人様あ。ごめんなさいです〜〜。はう〜〜」

ハ「国じやなくて次元を超えていたよ」

誰が喜ぶんだ。その話し方。

シ「私たちは明日から修学旅行だ。その間、生徒会は君たち1年生に任せる」

ハ・タ・ス「〔はい〕」

シ「生徒会長の私が学校を離れるのは不本意なのだが、行事の参加となれば仕方がない」

仕方がない、ねえ。

カレンダーには、たくさんの×と、修学旅行初日の日付に書かれた花丸がある。

タ「仕方がないことなんですよね」

シ「そうだ」

帰り道、俺とタカトシと萩村で帰っていた。会長と七条先輩は明日の準備すでに帰っている。

タ「会長つて子供っぽいところあるよね」

ハ「まあ、それが会長らしさのような気もするけどね」

ス「でもいつも私は疑問に思うのよ。なんで大人っぽい人が子供っぽいと愛らしく見えるのに、子供っぽい人が大人っぽくしていると生意気に見えるのは、なんでだろうね」

タ「そんなこと思ってないよ。今は昔は思つてたのかよ。今は」

もう満腹かー

会長たちが修学旅行に旅立つていった。その間、俺たち1年生が生徒会を運営していく
かなければいけない。

ケ「お前らも大変だな。先輩たちがいなくなつて」
ケンジが笑いながらねぎらいの言葉をかける。

タ「笑い事じやないよ」

まあその分自分への負担が増えるわけだしな。

ハ「そういえば、先輩方は今頃京都駅かな」

そのころ

シ「やはり、大人の遊びは外せないな」

ア「よいではないかゝつて言うやつね」

シ「私としてはやつてみたいが、もちろん、回される方な。ただ目が回りそうだ」

ア「私は、一枚一枚脱いでいくほうを やつてみたいわ」

シ「おお、おれもあつたか！」

ラ「：ツツコミ役の津田君と御堂君がいないと、どうも盛り上がりがかけるわね。

まあ萌えるけど」

ハ（やつぱり今頃は色ボケのエンドレスかな）

その考えは、はずれではない。

その日の放課後、タカトシとともに生徒会室に向かうと、萩村が苦戦していた。

ハ「何やつてているんだ？」

ス「鍵が違うのよ。七条先輩から預かっているんだけど」

タ「え、貸して」

タカトシが挑戦するが、あかない。というより。

ハ「鍵穴が合わないな。これ」

タ「何の鍵？」

ハ「さあ」

そのころ

旅館に着いた桜才学園の2年生は、思い思いにくつろいでいた。

ア「シノちゃん、私の鍵知らない？」

シ「何の鍵だ？」

ア「貞操帯。探しても見つかなくて。代わりに生徒会室の鍵が出てきたの」

ス「仕方がないわね。今日は各自の家で仕事ね」

タ「そうだな」

ハ「言つておくが、さぼるなよ、タカトシ」

タ「ハハ。アハハハ…」

ス「：明日私が全部チェックするわ」

ということで、各自の家で仕事を片づけることになつた生徒会。だが、翌日…。

タカトシはうなだれていた。目の前には、大量の紙の束と、般若の顔の萩村。

ス「全然終わつてないじやない！というかやつてすらないじやない!!」

そう、タカトシはほとんど真つ白な紙を持つてきたのだ。ちなみに萩村はケンジの椅子に座ることでなんとか顔が隠れずに済んでいる。

ハ「仕方がない。今日は教室でやるか？」

ス「私の家に来なさいよ。家なら生徒会の資料もそろつてゐるし、3人でやれば早く片付くでしよう」

タ「ごめんなさい…」

というわけで、萩村の家でやることになつたのだ。

ハ「つーか、なんでできなかつたんだ？ もしかして、コトミにいろいろやらされたか？」

タ「なんだよ。実は…」

聞いた話だと、妹のコトミに頼まれて、夕飯の支度や風呂掃除、部屋の片づけをやつていたという。

ス「何やつているのよ。まあいいわ。次はこんなことにならないようにな」

タ「…はい」

ス「あ、コンビニでレポート用紙買つてくるわ」

ハ「ああ、わかつた」

そしてしばらく待つていたのだが。

「Excuse Me?」

いきなり英語で話しかけられ、びっくりしていると、外国人の男の人があちらに話しかけていた。

「~~~~~st at i on~~~~~」

タ「えっと、わかる、ハルカ」

ハ「さつぱり」

ステーションだけはわかつた。

ス「何やつているのよ」

コンビニからでてきた萩村が、俺たちを呆れた目で見上げていた。

ハ「あ、萩村。この人、駄がどうとか言つてるんだけど、こたえられる?」

ス「…はあ。Mr」

このあと、萩村が英語でその人に対応することによって、なんとか事態は収束した。ただし。

「Thank you little girl」

この言葉に、萩村が激情した。気持ちはよくわかるが、少し落ち着け。あと「F——k you」

はないだろう。（一部自主規制させていただきました）

ス「ただいま」

萩村の家に着いた。思っていたより大きい家だつた。もしかして意外とお金持ちなのかもしれない。

「お帰りなさい」

奥から女人が出てきた。萩村のお母さんだろう。

タ「お邪魔します」

ハ「お邪魔しまーす」

ス母「あら、娘がいつもお世話になつていてます。そちらは…もしかして二股?」

ス「どつちもタメだよ!!」

タカトシを見て挨拶した後、ちらつと俺を見てタカトシに再び向き直る萩村母。…俺

が女扱いされたことは気のせいだと思いたい。

それにもしても萩村、そこまでムキになるなよ。ちなみに俺に対する誤解は後程解かれました。

ス「着替えてくるからちよつとまつてて」

リビングでお茶をごちそうになつてている間に、萩村が着替えに行く。その間、周りを見るタカトシ。

タ「お、柱で身長測つてているのか。結構容姿相応なことしているんだなあ。ねえ、ハルカ」

ハ「それより一番上の傷を見たら?」

タ「一番上?」

一番上方の傷には、目標という文字が彫られていた。ちなみに高さは俺たちと同じくらい。

タ「…泣けるな」

ハ「…うん」

その後、着替えから戻ってきた萩村に案内されて、萩村の部屋に通された。

現在俺たちは書類を片づけている。手元の紙にサインをしたり、はんこを押すのがほとんどで、たまに文章を書いたり、計算をしたりという具合である。

結構簡単に見えるが、字が雑だとだめなので結構気を使つて書くし、おまけに昨日タカトシがやらなかつた分のみならず、今日追加された分もやつてているのだ。
しかしさきほどからタカトシが萩村のほうを見ているのがわかる。

ス「何よ、さつきからじろじろと見て」

萩村も気が付いたようである。

タ「いや、私服姿の萩村つて、新鮮だなあつて」

まあ確かに学校でしか会わないから私服姿は雰囲気が違つて見える。

ス「そうね。普段は学校で会うから、制服じやないとそう思うかもしれないわね。ちなみにこの服は、ただの服じやないわよ」

ハ「ブランドものか?」

ス「すべてオーダーメイド」

タ・ハ「「…え?」」

ス「断じて子供服じやないわ」

⋮とりあえず書類を片づけよう。

俺たちは黙々と作業を進める。サインをしたり、はんこを押したり、文章を書いてたり、計算をしたりと。そう、黙々と作業を――

ハ・タ・ス((ボケる人がいないと、なんか調子狂う))

そのころ、そのボケる人は…

シ「明日は奈良か」

バスの中で、シノがしおりを見ながらわくわくした声を出す。その隣で、アリアがバナナを取り出していた。

シ「ア、アリア!!」

ア「え？ あ、シノちゃんもどうぞ」

シ「いや、そういうわけではなく！」

ア「え？」

シ「バナナはおかげ（・・・）に入らないぞ！」

.....

シ「間違えた!! おやつに入らないぞ」

.....

ラ「やっぱりツツコミ役がいないと、いまいち面白くないわねえ」

「なんで別のクラスの人がここにいるの!?」

書類を書き進める俺たち。

ス「あ、これあのファイルがいるわね」

そいつて立ち上がる萩村。棚にはたくさんのファイルが並べてある。

萩村はキヤスター付きの回転いすを持つてくると、それを台にしてファイルを撮ろうとする。だが：

ス「うーん…」

ちょっと届かないようだ。

タ「萩村…」

ス「余計な手出しは無用!!」

タ「そうじやなくて、一回降りなよ。椅子の高さ合わせるから。俺が変わりに取るなんて野暮なことはしないけど、これくらいならいいだろう」

ス「…うん」

少し顔を赤く染める萩村。

ス「あ、ありー」

その時、椅子が倒れた。ちょっとバランスを崩したのだ。そして—

ス母「二人とも、何か食べたいもの…」

タイミング悪く、萩村母が入ってきた。

今の状況。タカトシが俺の上に倒れる。その上に萩村が、押し倒しているような形でタカトシの上に馬乗りになっていた。

ス母「もう満腹かーつ!!」

：ああ、そうきたか。うん、そういうツツコミできたか。でも、一つだけ言わせても
らいたい。

ハ・タ・ス 「「もつと突っ込むべき反応があるだろ————!!!!」」
この叫びが、萩村家に広がった。なんだかいつもより疲れたような気もする。

それは有料よ

先輩たちが修学旅行から帰ってきた。これで生徒会のメンバーは全員そろつたことになる。

放課後、先輩たちに呼び出されて、生徒会室にいた。

シ「これは萩村へのお土産だ」

ス「ありがとうございます」

何かと思ったら修学旅行のお土産を渡すためだつたそうだ。

シ「それで、その、津田へのお土産なのだが、異性に何かを渡すというのがはじめてなものだから、君の好みに合うかどうか…」

タ「別に気を使わなくともいいですよ。心がこもつていればなんでもいいですよ」

シ「そうか。ではこの『舞妓の白粉は白〇液』という小説をやろう」

タ「悪意がこもつてますね」

シ「これだと、俺のお土産もかなり不安になつてくる。」

シ「それで御堂のものなのだが」
來た。俺は少し構える。

シ「君はその見た目が女子だと思われる原因だ。だから——」

そういうて、会長はあるものをとりだした。

シ「明日からこれをもつて学校に来なさい。そうすれば少しは男らしく見られるだろ
う」

取り出したのは、模造刀である。

シ「これを腰にぶら下げれば、女に見られないさ！」

ハ「：いや、気持ちはありがたいですが、持ち歩くのはどうかと思います」

そもそも模造刀を持つて学校にいく勇気がない。というより、下手すれば毎日職質されそうだ。

ア「ところで、私たちがいない間、何もなかつた？」

：あつたな。萩村家の事件が。

ス「べ、別に、何も」

大丈夫だつたと言いたいのだろうが、頬を染めている時点でアウトだ。

ア「!! 津田君、私たちがいない間にスズちゃんと何があつたの!?」
タ「え？ まあ萩村の家に行きましたけど」

ア「な、ナニをしたの!? は、まさか、御堂君と3〇!?!」

タ「は？」

何を言つてるんだ、この人は？

シ「ちなみに何があつたんだ？」

会長も興味津々といった感じにたずねてくる。

ハ「別に、萩村の家で生徒会の仕事をしただけですよ」

シ「そういうえば、生徒会室の鍵はアリアが持つて行つちやつたんだつけか」「…どうやら誤魔化せたようだ。」

ラ「突然ですが新聞部の畠です。記事用の写真が余つたので献上にきました」
畠さんがいきなり乱入してきた。本当に突然だな。

ア「見せて、見せて」

ハ「俺もー」

結構いろんな写真があつた。部屋で同級生と写つてゐる写真、金閣寺をバックに写つてゐる写真、鹿と一緒に写つてゐる写真など。どれも会長が笑つてー

タ「会長はどこにいるんです？」

シ「ここだ」

タ「どこ？」

シ「ここ」

：もしかして本当にわからないのか？ 確かにどれも普段見せいない表情だが。

タ「あれ、会長が寝ている」

それは、会長が浴衣で布団に入っている写真だつた。おそらく旅館だろう。
シ「こら、人の寝姿を勝手に見るな！」

ラ「そうよ。それは有料よ」

シ「それ、金を払えば見せるのかよ。

シ「しかし、清水寺に行けなかつたのは残念だつたな」

ア「シノちゃん、高いところ苦手だからね」

ス「そんなにダメなんですか？」

シ「うむ。高いところに来ると、まるで絶頂しているみたいに、体の力が抜け、震え
が止まらなくなつてしまふのだ！」

タ「全然ピンとこない」

というかなぜたとえがそれ。

タカトシ side

シ「萩村、生八つ橋どうだつた？」

ス「おいしかつたですよ」

ナ「お土産の木刀？ よかつたわよ。プレイの幅が広がつたし」

シ「どんなプレイですか？」

タ（俺も感想求められるのだろうか？）

タカトシ side out

シノ side

シ「アリア、津田を呼んでくれ」

次の会議について、副会長の津田から意見を求めるために呼び出した。

ガチャ

シ「ああ、津田。実は聞きたいことがー」

タ「お土産の本ですか？ よかつたですよ。とくに○○が○○を○○するところが」
シ「いきなりなんだ、セクハラか!? 次の会議の話をしようとしたのに!!」

タ「ちくしょうめつ!!」

とはいえ、少しうれしかった。あのお土産、読んでくれたのだな。律儀な奴だ。こういうところが、こいつのいいところだ。

シノ side out

ハ「アツハハハハハハハ。何、お前あれ読んだの!? アツハハハハハハハ!!」

タ「笑うなよ。あれはかなり恥ずかしかつたんだから」

俺はタカトシが会長からお土産の感想を求められていると思つて言つたら次の会議の話だつたという話を聞いていた。さすがに笑つてしまつた。

ハ「でもお前、よくあれ読もうと思つたよな。ブツ、ハハハハハ」
階段を下りていると、七条先輩がいた。なぜかぼーっとしている。

ハ「…先輩、何呆けているんですか？」

ア「…そうか。学校はエスカレータじやなかつたね」

…天然だ。それとも金持ちゆえか？

現在会長とタカトシとで廊下を進んでいる。ちなみに俺もタカトシも着崩していた。

タ「暑い…」

ハ「あちー」

シ「こら、二人とも。だらしがないぞ」

ハ「そういう会長は暑くないんですか？」

シ「暑いは暑いが、私は校則に反するような着崩しはしないんだ。だから見えないと
ころで着崩している。ちょっとスースーする」

ハ「…暑すぎてボケてません？」

なんだか、頭から湯気が上がっているように見える。

生徒会室

生徒会室には俺とタカトシと萩村しかいない。タカトシと萩村が会話している横で
ぼーっとこの二人を見ている。ちなみに萩村はさつきから牛乳を飲んでいる。

シ「うわあ!!」

外から入ってきた会長が、二人を見て驚きの声を上げる。

シ「なんだ、驚かすな…」

ハ・タ・ス「[?]」

また会話を始める二人。なんだか会長は生温かい目で見ている。

ア「きやつ!!」

こんどは七条先輩が驚いていた。

このとき、俺は知らなかつたが、萩村の頭の位置がタカトシの股のあたりにあるように見えたらしい。なので、タカトシの○○○を吸つているように見えたそうだ。

ア「こんな昼間から○○○○○なんだろう!!」

シ「いや、きっと○○○○○なんだろう!!」

：知らなければよかつた。

シ「しかし萩村は牛乳が好きだな」

ス「：ええ、まあ」

シ「牛乳は成長を促すから、いいことだ」

すると萩村は視線をやや下げる。

ス「会長は牛乳嫌いですか？」

シ「よくも視線を下にしてくれたな」

昼休み

シ「ん？　ない…」

あれうとか言いながらなにかを探す会長。清掃用具入れや。

シ「ないな」

ア「きやー!!」

七条先輩の胸のあたりを触つて探す会長。

ハ「興味ないです、何を探しているんですか？」

シ「購買でかつたメロンパンがないんだ。君たち知らないか？」

ハ「さあ？」

タ「知りません」

ス「見てないです」

ア「こんなところに隠さないよ」

シ「うむ。確かに当時、ここには鍵がかかっていた。つまり、内部の者による犯行。す

なわち」

シ「横島先生。私のメロンパン返してください」

ナ「真っ先にこつちきた」

信用ないな。

ナ「まあ私なんだけどさ」

本当にかよ。

シ「何生徒のものを勝手にとっているんですか」

ナ「いや、辛い物食べると、甘いもの食べたくなるじゃない!?」

ハ「何か、辛い物食べたんですか?」

ナ「いや、私の場合は苦いものなんだけど
ちよー

シ「まあこれからは気を付けてくださいね」

タ「一生氣を付けないとと思う」

ハ「それ以上に大事なこと見逃していない!?」

まあ事件解決してよかつた。とりあえず、会長は横島先生からお詫びと弁償を兼ねて
お金をもらい、新しいメロンパンを買いに行つた。

タ「それにしても、よく一発で犯人わかりましたね」

シ「君たちが知らないというのであれば、それは真実なんだろう。私は、君たちは嘘
をつかないと信じている」

タ「会長:」

ア「シノちゃん…」

ハ「さすが生徒会長…」

ス「…一応言つておきますが、年齢偽つていませんよ
…どうやらいまだ萩村に関しては半信半疑だつたようだ。まあそれは俺もだが（いま
だに飛び級してきたんじやないかと思つていてる）。
そんな萩村にはとてもすごいと思う能カがある。
それはいつか前の会議のこと。

タ「萩村、寝てますね」

シ「疲れているのだろう。休ませてやれ」

そして会議終了後。

シ「では、本日の会議は終了」

ス「では部費の予算の割り当ては私がしておきます」
いきなりガバッと起き上つてはつきりそう言つた。

ハ「睡眠聴取!?」

タ「さすが天才!!」

これには本当に驚いた。

今日も、天草シノ会長に相談に来た人がいた。

タ「おれ、無事にここ卒業できるか、不安になつてきました」
 それは今日返された成績をみて思つたのだろう。まあタカトシの成績はそれほどい
 いわけでもないしな。

シ「そうか。だが焦つてはいけないぞ。ここは女子が多いが、最終的にはお互いの気
 持ちだからな。校則のこともあるし」

タ（相談する相手間違えたー）

相談する相手は、しつかり考えて選びましょう。

次の人が入つてきた。

ム「こんにちは」

ハ「あれ、三葉？」

入つてきたのは同じクラスの三葉ムツミだつた。

ム「うん、実は、会長に相談があつて」

シ「どんな相談だ？」

ム「先日、同好会に2年の先輩が入つてきて、ようやく部に昇格したのですが、やつ

ぱり、部長の座を譲るべきでしようか？」

シ「そんなことはないぞ。年功序列に縛られず、経験は君が多いのだから君が引つ
 張つてもいいだろう。未経験のチエリ一が、百戦錬磨のお姉さんを相手にしても様にな

らないしな」

：何言つているんだ、この人。

ム（なんだかよくわからないけど、会長だからすぐ）いこと言つてはいるんだろうな（）
その尊敬するような眼は、今の言葉の意味を知つてか知らないでか（せめて後者であ
ると信じたい）。

ハ「おや？」

廊下を歩いていると、会長と七条先輩が話しているのが見えた。

ア「さつき枝毛見つけちゃつて。ショツクだよ」

シ「キューティクルが痛んでるのかもな」

ハ「人間の紙は10万本以上あるんだし、一本ぐらいいいんじやないんですか？」

ア「もう、御堂君。女の子のプライベートな話に割り込んじやだめだよ」

ハ「そういうもんですかね」

ア「そうだよ。だつて今○○の話をしているんだから」

ハ「ほんとすいません」

その後、職員室に用があると言う会長と別れ、七条先輩と生徒会室へと向かった。

タ「あちく」

中には、タカトシが上着を脱いで、ネクタイを緩ませ、下敷きをうちわにしてあおい

でいた。

ア「津田君、だらしない格好をしていると、シノちゃんにまた怒られるぞ」

タ「でも最近クールビズとかあるし、無理して熱中症になつたら元も子もないですよ」

ア「そつかー！」

タカトシは勝つたつて顔をしている。だが、次の言葉は予想外であった。

ア「じゃあ私も」

ハ「え？」

そういうて、ブレザー？を脱ぎ、タイをほどき、ブラウスのボタンを第2までははずす

七条先輩。

ア「なんかいかがわしい感じになつちやつたよー！」

タ「えー!?」

いや、まあ確かに。いろんな意味で色っぽくなつた。ただその言い方は誤解を受けそ

う。あ、タイが床に落ちた。

ア「うわーん」

泣きながら生徒会室を出る七条先輩。つて、普段の言動はどうなんだと言いたい。で

もそれ以上に、この状況を誰かに見つかつたら—

シ「あ…」

タイミング悪く会長が入ってきた。

俺は何ともないが、タカトシは七条先輩のタイを持つてはいる状況だ。心なしかすごく引いているようにも見える。
さて、どうやつて誤解を解こうか。

私の誕生日

今日から夏服。我々生徒会は校門になつて服装チェックをしている。

「おはよー」「ざいまーす」

ア 「おはよう」

シ 「そこ、シャツはズボンの中に入れなさい」

「あ、すいません」

ス 「あんた、服装正なさい」

「なんで子供に…」

ス 「誰が子供だー!!」

萩村は相変わらずのようだ。

タ 「朝早くから大変だね」

ハ 「…それ、お前が言うか？」

ム 「やータカトシ君、ハルカ君。生徒会は朝早くから精がでるねー」

俺たちに挨拶しながら登校してきたのは三葉だ。

ム 「ん？ そういうわけでもないみたいだね」

タカトシの足元にある鞄を見ながらそういった。

タ「てへ」

ハ「こいつ、ついさつきになつてようやく来たんだよ」

家の前で待つても来なかつたので置いて行つたのであつた。

朝の会議

シ「校則で禁止されていた携帯電話の持ち込みだが、生徒の要望により、今日付けで解禁された」

そうか。それはよかつたな。

タ「そのほうがいいですよ。何が起ころるかわかりませんし」

ス「持つていれば、自宅や学校への連絡も容易ですしね」

最近は公衆電話なんて見なくなつたから、あつたほうが便利だ。

シ「しかし、私は風紀が乱れないか心配だ。授業中の使用や、ハメ撮りの横行などがおこらないか」

ハ「会長の頭のほうが乱れている気がします」

そもそもハメ撮りってなんだ?」

ア「御堂君、DVDの持ち込みは違反だぞ」

俺が友達から借りたDVDを見て、七条先輩が注意する。

ハ 「あ、すいません」

ア 「今日は見逃すけど、今度はだめだよ。ところで、それって話題の最新作?」

ハ 「ええ」

ア 「どうだつたの?」

ハ 「感動しましたよ。ティッシュが手放せなくなるほどで」

ア 「え…。そんなにいかがわしいー」

ハ 「あ、すいません。その時、ハンカチなかつたので」

ちなみに関係ないが、タカトシは柔道部に行つてゐる。用事らしい。

タカトシ side

タ 「おーい、三葉」

柔道部に用があつたので三葉を探してゐると、水道のほうにいると言われたので行つてみた。案の定、水道の水を頭から被つていた。

ム 「あれ、タカトシ君どうしたの?」

タ 「生徒会に、あとでこれ出しといてつて会長に言われて」

預かつた書類を見せて説明する。

ム 「うん、わかつた」

タ 「そういうえば、柔道部はどう?」

ふと気になつたことをたずねてみた。

ム「うん、タカトシ君たちのおかげで、何とかなつているよ。でも部長つて大変だね。備品をそろえるために、部費のやりくりしたりするし…」

タ「あれ？ でも柔道部になにか備品がいるのか？」

道着ぐらいしか必要なものなさそうだと思うけど…。

ム「紐パン。下着の線を隠すために必要だつて、七条先輩が言つてたから」

タ「奴か!!」

あの人は何を言つているんだか。

タカトシ side out

別の日

ハ「あれ、この日はなんですか？」

6月のカレンダーのなかで、花丸が書かれている日を指差して聞いてみる。

シ「：私の誕生日」

その場にいた会長が答えてくれた。へえ、この日なのか。

タ「やりますか、誕生会？」

ハ「お、いいね」

シ「ベ、別に催促はしてないからな!!」

いや、生徒会室のカレンダーに書いている時点で祝つてほしいうつて言つていると思
う。

そして、誕生会当日
パンパンパン

タ「会長、お誕生日、おめでとうございます」
ア・ハ・ス「「おめでとうございまーす」「

シ「ありがとうございます」

そういうつて、みんなと乾杯する会長。ちなみに萩村は会長の持つコップの位置まで、
頑張つて腕を伸ばしていた。

現在生徒会室はティッシュの花や紙のテープで飾られ、テーブルの上には、ジュース
とお菓子、そして誕生日ケーキと、ありきたりながらも心を込めた誕生日会を行つてい
るつもりだ。

ア「さて、早速だけど、プレゼント交換と行きましょうか」

タ「あ、それなら俺から」

ハ「いや、俺から」

ス「いやいや、私から」

最初に会長へ渡そうと必死になる俺たち。

理由は簡単だ。

ハ・タ・ス（（この人の後には出せない!!））
のほほんと笑っている七条先輩の後ろには、大きな包装紙に包まれたプレゼントがあつた。

結局萩村、タカトシ、俺の順番になつた。ちなみにプレゼントの中身は、萩村が貯金箱。タカトシがCD。俺が実用性のある小物だ。

シ「では、津田からもらつたCDの曲でも聞きながら、のこりのプレゼント…って、誰のだ、これ？」

会長の手には、誰のかわからぬプレゼントがあつた。

ア「あ、それは横島先生から。預かっていたの」

困った顔で話す七条先輩。

ハ・タ・ス「「横島先生か：」」

きつとろくでもないものだろう。

シ「何だ、君たちは。あんなでも教師なんだから、大丈夫だろう」
フォローしているつもりだろうが、会長、さりげなくひどいですよ。

ちなみに中身は○○○○だった。というより教師がこんなもの送つていいのか!?
シ「では、アリアのプレゼントを開けてみよう」

包装紙をはがし、箱を開けると、クマのぬいぐるみがでてきた。

それはいいのだが、問題はなぜか亀甲縛りをされていてことだつた。

ア「力作よ。いい練習にもなつたし」

シ「これは素晴らしい。芸術だ！」

ただ、会長が喜んでいるから、いいのかなあ‥。

シ「そういえば、津田の誕生日はいつだ？」

タ「来月です」

シ「そうか、それはおめでとう」

ア「おめでとう」

タ「いやー‥」

照れるタカトシ。

シ「御堂は?」

ハ「12月です」

シ「おめでとー」

ア「おめでとう」

ハ「どうもく」

俺も照れてしまう。

シ 「萩村はいつだ?」

ス 「4月です。もう過ぎました」

シ 「おめでたー」

ア 「おめでたー」

⋮え?

しばらく談笑していたのだが、そうもいかなくなってしまった。

ハ 「あ、雨だ」

外を見ると、雨が降り始めていた。しかも本降りだ。

ア 「今日は降らないって、天気予報で言つてたのに」

今日の天気予報だと、晴れ時々曇りで、降水確率は10%だと言つていた。

⋮なぜそ

ス 「私、置き傘ありますよ」

タ 「俺も」

ハ 「お前の場合は忘れ傘だろう」

タ 「うつ!」

ア 「さすが幼馴染ね」

こいつの行動はなんとなくわかる。

シ「ちなみに御堂は?」

ハ「いつも鞄に折り畳み傘をいれてます」

だから問題はない。

ア「じゃあ、私はスズちゃんの傘で一緒に帰るから、シノちゃんは津田君の傘で帰りなよ。方向一緒でしよう」

シ「そうだな。御堂の傘は折り畳みだから、一人しか入れないだろうし、津田のは置き忘れだから大きいだろう」

タ「そうですね。そうしましようか」

そして、校門の前で別れる。

ア「それじゃあ、また明日」

ス「さようなら」

挨拶をして、二人と別れる。でも、本来の傘の持ち主ではなく、入れてもらっている

方が傘を持っているのに、少々涙する光景だつた。

ハ「じゃあ俺も。コンビニよるんで」

シ「そうか。それじゃあな」

タ「お疲れー」

会長＆タカトシと別れ、俺はコンビニまで歩いて行つた。

タカトシ side

俺は会長を傘に入れて歩いている。

シ「こうしてみると、これって相合傘だな」

タ「あ、そうですね」

しばらく歩き進める。

シ「他人から見ると、私たちはそういう関係なのだろうか?」

タ「気を付けないといけませんね。会長、人気者ですし」

これで見られたら、本当に穴をぶち抜かれない。

タカトシ side out

ラ「本当に気を付けないといけないわね」

ハ「何やっているんですか、畠さん」

コンビニから帰る途中、電柱に隠れている畠さんを見つけてしまった。手にはカメラを持つているが、何を撮っていたのだろうか?

シノ side

相合傘をしたまま、学校からの帰り道を歩いていく。これはこれで少し恥ずかしいものだな。

しばらく歩き進めると、分かれ道まで来た。

シ「それじゃあ、私はこれで。今日はありがとうな」

タ「それなら、俺の傘を貸しますよ」

シ「え？」

ここから走つて帰ればそれほどぬれずに帰れるから、ここで別れようと思つたのだが、まさか傘を貸してこようとは。

トイエ、これはこれで悪い。

シ「そんな、それは悪い？」

タ「俺は平気ですよ。それに、誕生日の主役を濡らして返すわけにもいかないじやないですか」

そういうつて、私に傘を持たせる。男性用の無骨で大きい傘を。

タ「それじゃあ」

シ「あ、ちょっとー」

その先の信号が、タイミング悪く赤になつた。

シ「…とりあえず、信号変わるまで入つているか？」

タ「…うん」

シノ side out

お見舞いに行こう

会長の誕生会の翌日。俺は生徒会の仕事があるので、タカトシを連れに来た。もしかして、まだ寝ているのだろうか？

コトミ（以下コ）「うわー！・タカ兄!?」

なんだ、どうしたんだ？

俺は津田家から預かっている鍵を開けて、中へ入る。声はタカトシの妹のコトミのものだ。そして場所はタカトシの部屋。もしかしてタカトシに何かあつたのだろうか？

ハ「おい、どうした!?」

階段を駆け上がって、部屋をのぞいてみる。中にはタカトシが床に倒れていて、そのままにコトミが心配そうにそばにいた。

コ「あ、ハルカ先輩…。タカ兄が起きた途端に倒れて…」

コトミから事情を聴いた後、タカトシの様子を見る。顔が赤くなっていた。おでこを触ると、結構熱い。

ハ「熱が出てるな。おじさんたちは？」

コ「また出張でいなくて…」

ハ「わかった。じゃあタカトシをベッドに入れよう。そのあと、俺は軽くご飯を作るから、コトミは冷却シートをタカトシのおでこに張り付けて」

コ「わかりました！」

卵とご飯があれば、卵粥でも作るのだが。そうだ、それからもう一つ。学校に連絡しなくては…。

シ「何!?」

結構遅刻して学校に登校し、遅刻理由を説明して、教室に入り授業を受けた後、昼休みに生徒会室に向かつた。

そこで、タカトシがいないことを聞かれて、朝の顛末を話したのだ。

シ「津田が熱を出したなんて…」

ハ「一応、おかゆを食べさせて、寝かせていますからもう大丈夫だと思いますけど」

ス「あれ、あんたもかかわっているの？」

ハ「あそこの両親、今出張に出ていてな。だからいろいろやつてな」

シ「しかし、私のせいで、こんなことに…」

どうやら、タカトシは会長に傘を貸して帰つたらしい。ズぶぬれで帰つたのか…。

ア「別にシノちゃんのせいじゃないよ」

ス「そうです。津田の自己責任です」

ハ「それに、それほど重いわけでもないですから。明日にはよくなりますよ」
みんなでフォローするが、会長はまだ気が重いようだ。

ア「やつぱり、心配よね。みんなでお見舞いに行く？」

ス「いや、みんなでいくのはあれだと思いますし、代表一人が行くべきでは」

ハ「それだと、俺は行くこと確定しているから俺だけになるけど」

シ「じゃあ私も行こう。御堂、道案内を頼む」

ハ「わかりました」

そして放課後、津田家

ピンポーン

津田家のチャイムを押す。この時間ならば、コトミは帰っているはずだが。
ガチャ

コ「あれ、ハルカ先輩」

ハ「よ。タカトシはどうだ？」

コ「だいぶ良くなつたみたいです。あれ、そちらの方は？」

シ「ここにちは。天草シノと申します。タカトシ君のお見舞いに参りました」
コトミはなぜか会長をじ一つと見ていて。

コ「…ああ。出〇〇〇スの方ですか。お見〇〇プ〇イとは斬新ですか」

シ「は？」

ハ「無視してください」

そもそも制服で分かれよ。少なくとも同じような制服を着て いるだろう。

シノ side

ハ「タカトシー。具合はどうだ？」

部屋に入ると、津田はベットで横になつていた。

タ「来てくれたのか。あれ、会長も」

シ「ああ。お見舞いにやつてきたぞ」

タ「そうですか。それはすみません」

シ「いや、私のせいでこうなつたのだ。申し訳ない」

タ「いえ。疲れて熱が出ただけみたいなんで。会長のせいじゃないですよ」

シ「しかし、君にそこまで重責を負わして いたなんて…」

タ（疲れたのは生徒会じゃなくてツツコミのほうなんだけどね…）

彼の仕事を少し考えなくてはいけないな。

シノ side out

コンコン

コ「お茶入れましたー。ハルカ先輩が」

コトミが、俺が入れたお茶とお菓子をもつて入る。それに続いて俺も入る。というか余計なことを言わなくていい。

コ 「さつきはどうも」

タ 「こいつは妹のコトミです」

シ 「へえ……」

コ 「津田コトミです。どうぞごゆつくり。あ、いや、ゆつくりって、兄が遅〇というわけでは——」

タ 「無視してください」

：さつきも思つたが、今日もコトミは全力全開のようだ。

シ「しかし、思つたより大丈夫そうでよかつた。本当は、アリアと萩村も来る予定だつたのだが、大勢で来るのもあれだうと思つてな」

タ 「別に、そこまで気を使わなくとも」

ハ 「でも七条先輩、かかりつけの医者を10人連れてくるつもりだつたぞ」

タ 「気を使つていただきありがとうございます」

さすがにそんな連れて来たら余計悪化しそうだ。

シ 「そういえば、コトミだつたか？ 御堂のことを先輩と呼んでいるようだが、それほど付き合いなかつたのか？」

ハ「いや、タカトシと同じくらいですけどね。その時はハル兄と呼んでいたんですけど」

タ「なんでか、俺たちが中学を卒業するあたりからそう呼び始めたんですよね」
コ「いやう、いろいろありますて：」

ハ「思い出した。お前がふざけてハル姉と呼んだら俺がお仕置きして、それから呼ばなくなつたんだ」

コ「そんなこともありましたね」

なぜか冷や汗を流すコトミ。そんなにひどかつたかな？

コ「あ、私、ちよつとおトイレ行つてきますね」

コトミは立ち上がり、部屋を出て行つた。

ハ「じゃあ俺、お茶のおかわり入れますね」

そういうと、カップをもつて台所へ向かう。

お茶をいれ終わり、部屋の前まで来ると、コトミが耳を扉に近づけていた。まるで中の音を聞いているようである。

タ『会長、もつとやさしく：』

シ『君が動くからだ。私はこれに自信があるのだぞ』

コ「こ、こ、ここれつて、ああああのー」

ハ「コトミ、囁みまくっている。まあとりあえず入るぞ」
コ「あ、ダメー」

中では、会長がタカトシの耳掃除をしていた。

コ「あれ、お〇いじっていたんじやないの？」

タ「本当に妹が思春期過ぎて困る」

結局この日は、いろいろ雑談して帰った。もつとも俺は、家事能力があまりない兄妹のご飯を作つたりしたのだが。

授業しろよ

タカトシはなんとか回復し、通常通りの仕事に入っていた。

シ「津田、このポスターを押さえてくれ。御堂は画びようをくれ」

そうして手伝っていると、廊下を歩く一人の女子生徒に、タカトシの視線が釘付けだつた。正式には、その女子生徒の胸だろうが。：結構揺れているし。
シ「津田、何じろじろ見ている」

そしてその（不潔な）視線は、会長にばれていた。

シ「そうか。津田はショートカットが好みか」

タ「別に、そういうわけでは：」

確かに見ていたのは違うな。

シ「ま、ショートカットのほうが、ブラ透け見放題だが」
タ「何わからんきれ方しているんですか」

：この漫才、いつまで続くのだろうか？

ポスターを貼り終え、生徒会室まで戻ると、七条先輩が呆けていた。

ハ「どうしたんです、先輩」

ア「…あ、そうか。学校のドアは自動ドアじゃないんだ」

…そこまで天然っぷりを見せなくていいです。

翌日・授業中

現在横島先生の英語の授業を受けているところである。この人が教師で大丈夫かと思つたけど、今のところ問題も起こしていないし、意外とこの人の授業は普通だつた。

ただ…。

タ「zzz…」

横にいるタカトシが寝ている。

ナ「ん？」

今まで教科書に書かれていた英文を読んでいた先生が、タカトシに気が付いて読むのをやめる。

教科書を丸めたので、それで頭をたたくと思つたら、予想外の行動に出た。

その教科書を耳元へもつていく。

ナ「あつはくん。うつふくん。あ、そこダメ…」

何を思つたか、喘ぎ声を出し始めた。

ケ「…先生は、何をしているんですか？」

タカトシの前にいたケンジが、横島先生にたずねる。よく勇気あるな。

ナ「いや、無〇するかなつて」

それが目的かよ!!

ナ「オウ、あん」

ハ「授業しろよ!!」

思わず丸めた教科書で先生を叩いていた。

ム「ねえねえ。スズちゃんのクラスつてどこ?」

授業の後、三葉が萩村のクラスをたずねてきた。

ハ「え? 確かC組じやなかつたかな」

うん、そだつたはず。

ム「ありがとー」

そう言つて、教室を飛び出していく。

放課後、萩村に三葉が何しに来たかと聞いてみたら。

ス「私に問題出してきたわよ。でも答えをわかつていなかつたりしたけどね

‥それでよく問題をだそうと思つたな。

この日の生徒会の仕事は書類仕事だけなので、俺たちは目の前にある紙の束に何かを

書いたりしていく。

タ「すみません、ちょっとトイレに行つてきます‥」

シ「ああ」

タカトシが腹を押さえながら生徒会室を出る。

ハ「腹でもこわしたかな?」

シ「はたしてそうかな」

ア「どういうこと?」

シ「巨〇だつたら、手がある位置にあってもおかしくない」

ア「たまつていたのね」

ス「ありえねーよ」

関係ない話だが、萩村が会長たちに突っ込むのをはじめてみたような気がする。

翌日

タ「いやー。弁当に入つていた魚が当たつたようだ…」

ハ「それじやあ腹下すな。というか熱をよく通せよ」

生徒会室に向かつて歩いている俺とタカトシ。

中に入ると、会長が、自身の胸を触っていた。というよりもんでいた。

タ・ハ「……………」

シ「ハツ!!」

会長も俺たちに気が付いたようだ。

シ「こ、これは…」

さあなんて言うのか?

シ「欲求不満なだけだ!!」

タ「その言い訳ダメだろ」

というより、逆効果な気がする。

ハ「おや?」

ふと窓際にぶら下がる異物を発見してみる。それはテルテル坊主だった。

シ「明日はプール開きなんだ。最近暑いからちようどいいが、明日の降水確率は40%と聞いて不安でな」

ハ「水泳、楽しみなんですか?」

シ「い、いや、みんながな!!」

あわてて否定しても否定しきれない気がする。

コンコン

ラ「失礼します、畠です」

入つてきたのは畠さんだつた。

ラ「約束通り、明日の水泳の授業は撮影行いますので」
シ「えつ!」

タ・ハ 「撮影?」

ラ 「まさかお忘れじやないですよね」

シ 「い、いや、あの時は寝ぼけていて…!!」

ラ 「もう準備と告知はしておりますので。ではまた明日」
パタン

ピュー。ごそごそ

見るとテルテル坊主がさかさまになっていた。

ちなみに翌日の天気は快晴。絶好の水泳日和になつた。

ム「あれ、会長じやない?」

休み時間に、プールのほうを見てみると会長がスタート台に立つて飛び込み姿勢になつていた。

タ「会長、大丈夫かな?」

ハ「いや、大丈夫じやないと思う」

ム「え? 会長つて泳げないの?」

三葉が疑問に思う。そうか、知らないからそう思つちやうよな。

タ「いや、会長つて、高いところダメなんだよ」

ム「ああ。あそこつて結構高く見えるよね」

よく見ればぶるぶる体が震えていた。

放課後、生徒会室に畠さんが来た。ちなみに会長と七条先輩はぐつたりしている。
 ラ「男子の写真もほしいから、今度はあなたの方の授業にもお邪魔するわね」

タ「はい」

ス「あの、私は?」

萩村が自分を指差しながら畠さんに聞く。

ラ「最近世間の風当たりが強くてね」

ス「ガーン」

⋮どんまい。

ラ「ちなみに同様の理由で、御堂君も写真に収めないから。無修正ってクレームが来るから」

ハ「なつ!?!」

⋮これには落ち込む。

タ「どんまい」

ある日のこと。

タ「寝過ぎたー!!」

ここは津田家。タカトシは寝坊していて今着替えている。というか、俺が起こしに来

なかつたら遅刻していただろう。

コ「まだ時間あるよ」

タ「生徒会の仕事があるんだよ！」

ハ「お前が早く起きればいいだけの話だろう」

というより、俺はあと何回こいつの目覚ましを務めればいいのだろうか？

タ「朝はパンだけでいいや」

コ「待つてタカ兄!!」

いきなり大声を上げるコトミに、動きを止めてしまう。

コ「男がパンを咥えて登校つて邪道じやない」

タ「いや、急いでいるんだけど」

とりあえず、コトミの言うことは無視して学校へ行こう。

ちなみになんとか遅れずに済むことができたが、会長以下3名はすでに集合しており、冷たい目で見られた。：タカトシのせいだ。

そして放課後。

シ「アリア、相談とはなんだ、改まつて」

七条先輩が、俺たちに相談したいことがあると言つてきた。ちなみに萩村は寝ている。

ア「実は…この学園に、気になる子がいるの」
これは衝撃だった。

シ「待て、アリア！校則でも、校内恋愛は禁止だと…！」

タ「会長、校内恋愛は禁止ですけど、場所をわきまえれば問題にはならないのでは…」
タカトシが会長に耳打ちをする。ナイスフォローだ。

シ「津田よ」

今のに何か問題があつたのか？

シ「私は耳が性感帯なのだ。耳元で話さないでくれ」

⋮そつちか。

タカトシは教科書を丸めて会長の耳元へ持つて行つて話し始めた。それを見た七条先輩に疑問視されていたが。

ア「でも、なかなか私の気持ちに気づいてくれないの」

シ「それならば、攻め方を変えてみたらどうだ。押してダメなら押し倒せということ
わざもあるし」

ハ「会長、それを言うなら引いてみろです」

思わず口にだしてしまった。

シ「おう、私としたことがうつかり間違えてしまった」

：本当にうつかりなのか？

タ「とりあえず、名前とクラスは？」

ア「名前は知らない。クラスも、所属していないし」

シ「? どんな奴だ」

ア「毛深いよ」

シ・ハ・タ「「何が!?」」

結局、それは学園に紛れ込んできた野良猫だつた。

シ「ありがとう、津田、御堂」

タ「何がですか？」

シ「私はこの通り石頭だからな。私一人では、アリアにダメだというしかできなかつただろう」

会長にこうしてほめられるとうれしく思う。やつぱりその組織の長にほめられると
いうのは今後の自信にもつながるのだ。

シ「これからも、その柔軟な○頭を使つて支えてほしい！」

ハ「その言葉がなければきれいにまとまつたのに…」
つーか○頭つてなんだ？」

翌日

コ「寝過ごしたー!!」

また津田家では寝過ごしが起っていた。ただし今度はコトミである。

タ「まだ時間あるぞ」

確かにこの時間ならば中学校はまだ間に合うだろう。

コ「今日は日直なんだよ!!」

そういうことか。

コ「よし、こうなつたら、私もパンを咥えて登校しよう!」

：それはいいのだが、コツペパンを咥えていくのか？

タカトシ s i d e

今日は、期末試験 1週間前である。

タ「テスト勉強、どう?」

ケ「俺全然やつてないよー。困った」

ケンジと来週からの試験の話をしていた。しかし、この会話をすると落ち着く自分がいる。

もし生徒会室なら。

シ『来週からの試験はどうだ?』

ス『余裕です』

ア『ばつちりよ』
ハ『問題ないです』
だつただろうし。

タカトシ side out

スズ side

ス「あ、御堂」

廊下で御堂と会つた。

ハ「どうしたの？」

ス「いや、生徒会慣れたかなって」

ハ「おかげさまでな。ただタカトシをのぞいて女の子ばかりだから、会話についていけなかつたりするけど」

ス「ふーん。外見は女子っぽいのに」

ハ「…お前、そんなこと言うのか」

まあ男子からしたらあの空気は慣れないのかもしれない。ただ…。

ア「夏になると、ブラ暑苦しいよね」

シ「そうだな」

ス（この会話に私はついていけない…）

スズ side out

廊下を歩いていると、資料室から横島先生の助けを呼ぶ声がした。タカトシに資料室の整理を頼んでいたはずだが、どうしたのだろうか？

ハ「どうしたんですか、横島先生？」

ナ「いや、津田に資料室の整理を頼んだら、ここに私を閉じ込めやがって」

忌々しげに語る横島先生。

ハ「なんで閉じ込められたんですか？」

ナ「悪ふざけして、資料室の鍵を閉めただけじゃん。雰囲気出そうと思つてさ。」

ハアハア」

当時のことを思い出してか、息を荒げ始める。

ガラガラガラ、ピシャツ

カツカツカツ

ナ「つてちよつと！また私を閉じ込めるなんて何するのさ！…というよりここから出してー！」

聞こえない聞こえない…。

ア「あ、御堂君」。悪いんだけど、これ運んでくれる？」

七条先輩が、持っていたものを俺に頼んできた。断る理由もないのに請け負う。

ア「そういえばこんな伝説知ってる? 中庭に生えている木の下で告白すると、恋が叶うって」

ハ「へー」

ロマンチックな伝説だな。でも現実的な考察をすると、あの木の下に呼び出した時点で、もう告白しますって言つてるようなもんだよな——うん?

もう一つ、現実的な問題がでてきた。

ハ「ここって、去年まで女子高でしたよね」

ア「そうだよ」

ハ「…まあいいや」

ちなみにどうでもいいことだが、横島先生はあとで助けられたらしい。横島先生は俺たちが悪いということをわめいていたそ.udが、理由を聞いた途端に横島先生が悪いと判断したらしく、同情するものは一人もいなかつたとか。

生徒会室に戻ると、会長が俺たちに本日の議題を話し始めた。

シ「桜才学園のホームページに、生徒会コーナーを設けることになつたのだが、それを生徒会がつくることになつた」

タ「へー」

まあ生徒会の内容を生徒会が作るのは妥当かもしない。

シ「今日ほど信頼という言葉を重く感じた日はない…」

ハ「もしかしなくとも、パソコン初心者ですか？」

会長の意外な弱点がわかつた。

とりあえず、タカトシと俺と萩村がレイアウトなどの準備をして、文字を打つのは会長ということになつた。

シ「触った途端爆発とかしないか!?」

ハ「そんなパソコンありますせん」

爆弾じやないんだから。あと爆発するものもないし。

タ「星つて打つて、変換すると☆が出てきますよ」

シ「どれどれ」

タ「あ、このボタンです」

シ「おー!!これはすごい。ならば…」

初めてパソコンを触った子供のような反応をする会長。

シ「津田」

タ「はい?」

シ「〇〇〇と打つても、米印が出ない」

タ「出るわけないだろう」

出たらすごい。：一応単語登録すればできるかもしないが。

翌日

シ「これを見ろ!!」

と言つてできたホームページを見せてくれたのだが。

ア「頑張っちゃった」

あんたが元凶か!?

そのホームページはまるでアダルトサイトのようになつていた。

タ「これはダメだろ!!」

ハ「生徒会コーナー、閉鎖されるな」

この数時間後、生徒会コーナーは閉鎖されてしまった。

怖い話…?

『きやー!!』

テレビ画面の中で悲鳴を上げるアイドル。

俺は津田家で夏になると蚊と同じように湧き出す心霊物の番組を見ていた。

タ「お前も好きだなあ」

ハ「別にいいだろ」

こういうの見ていたつて。

タ「いや、俺が言っているのはテレビに出ているアイドルの話」

そう言つて、タカトシはテレビ番組の中のアイドルを指差す。実を言うと、俺こと御

堂ハルカはトリプルブツキングのファンだつたりする。

ハ「俺がアイドル好きになっちゃいけないっていうのはないだろー」

口をとがらせながらタカトシに反論する。

タ「いや、いいんだけどさ。結構周りからは意外という反応が多いからさ」

ハ「へー、そなんだ」

そんなに以外かなあ。

コ「意外だと思われてもしようがないですよ」

コトミが口を挿む。

ハ「どうして?」

コ「だつてハル兄って、アイドルが好きそうな顔してませんもん」

ハ「顔かよ!あとアイドル好きって言つてもトリップルブツキングぐらいだぞ!!」

ほかはとくに好きとかそういうのはない。

ちなみにコトミはまた昔の呼び方であるハル兄に戻している。コトミに先輩呼ばわりわりされていて、さすがに小さいころから親しい中であるコトミに先輩呼ばわりされるのはなんとなく抵抗があつたのだ。

え、なんで今まで直さなかつたんだつて?…そんなことはどうでもいいじやん!!

コ「でも最近トリツキングも歌番とかあまりでませんよね。こういうバラエティだけでできたりとか」

ハ「それ、言つちやダメ」

翌日

シ「最近、1階のトイレに自殺した女子生徒の幽霊が出るという噂がたつてきた」

ア「夏の定番ねえ。でも、女子トイレに入るときは気を付けないとね」

ハ「それでなぜ俺を見るんですか」

想像がつくが、それは自分が悲しくなるので言わないでおく。ちなみに1階は1年生、2階は2年生、3階は3年生が使っている。
ス「非常にバカバカしい話ですね。高校生になつて、そんな作り話で盛り上がるなんてくだらないです」

萩村が意見を述べた。確かにそれは一般論かもしない。だが。

シ「最近なぜか萩村を2階のトイレでよく見かけるんだよな。なぜか」
：言つていた本人がこれではどうしようもないのでは？

俺とタカトシと萩村で、校舎の外を歩いていた時だつた。

タ「あれ、畠さん」

ラ「あ、どうも」

畠さんが校舎を写真に収めていた。

ハ「何やつているんですか？」

ラ「実は今度の桜才新聞で学校の怪談を企画することになりました、その取材」
タ「へえ…。どんな話ですか？」

ラ「それはね…ん？」

畠さんが萩村のほうを見る。見ると、萩村が耳を指でふさいでいるように見えた。
ス「耳がかゆいだけです。どうぞ」

：そういうことにしておこう。

ラ「これはね。実際にあつた話。ある女子生徒が、気分が悪くなつて保健室で寝ていたそうなの。でも、ふと目を覚ました時、そのシーツは血で染まつていたそうよ」

ハ「うわ…」

それは実際にあつたら怖い。

ラ「なんでも、その日が○○だつたことを忘れてあててなかつたみたい」
：あれ？

タ「怖い話は？」

ラ「大丈夫よ。怖くなるようねつ造：脚色するから」

ハ「言い換えても結局はねつ造でしようが」

ラ「まあまあ。まだほかにもあるのよ。保健室で夜な夜な女の泣き声が—」

タ「喘ぎ声つていうオチじゃないですよね」

少しむくれる畠さん。つていうか真実かよ。

タ「萩村つて、怖いの苦手？」

ス「…：そうよ。どうせ子供っぽいとか思うんでしょ」

：実は思つた。

タ「まあ少しほ」

絶対嘘だ。

タ「でも、萩村のことを知れてよかつたとおもうよ」
シ「こいつはたまにこんなことを口にするからすごいと思う。ちなみに萩村の頬が少し染まっていた。

シ「最近、生徒の間で、3階の廊下で不気味な笑い声がするという話が広まっている」
ス「つ、作り話じゃないんですか?」
シ「いや、本当の話だ。現にその声を聞いたという話は3年生の間で広まっている」
ス「きっと、イタズラですよ!だからこの件はほつといても—」
シ「何を言つている!!」

突然会長が怒鳴った。

シ「生徒会として、生徒の安全を考え調べる必要がある。何より、イタズラだとしたら、これは生徒会としては放つておけない話だ!」
このとき、会長がまぶしく見えてしまった。

シ「では、さつそく調査だ!」

そう言つて、お守りやらなんやらを取り出す会長。ひよつとして…。

ハ「会長、怪談とか好きですか?」
シ「うん」

タ 「どうりで調査に乗り気なんだ…」

ア 「まあまあ。楽しそうじやない」

楽しいのか？

ちなみに萩村は全く乗り気ではなさそうだ。

放課後

外ではヒグラシが鳴き始めている。

俺たち生徒会は、噂の3階の廊下にやつてきていた。

タ 「放課後の学校つて、不気味ですね」

ア 「この時間は、校舎に生徒はほとんど残っていないからね」

残っている教師とかも、職員室とかにこもつているので、この時間にここにいる人はほとんどいないだろう。

シ 「よし、行くぞ」

会長を先頭に、俺、萩村、七条先輩、タカトシの順番である。

ちなみにこの配置なのは、男子が先頭付近と後ろにいた方がいいからという意見があつたからである。

しばらく進むがとくに何もおこらない。萩村は怖がっているが。

だが突然、それは起こつた。

どこからともなく廊下に響き渡る、不気味な笑い声。

ス「ギャ————ツ」

萩村がさつそく錯乱を起こしかけている。

ハ「落ち着け、萩村！」

シ「いつたいどこから聞こえているんだ!?」

あたりを見回すと、会長があるところで視線をとめた。そこには、『英語準備室』と書かれたプレートがある。

ハ「もしかして」

『英語準備室』に入る俺たち。中では横島先生が雑誌をよんでも不気味な笑い（？）を出していた。

ナ「つてなんだ、生徒会役員共か。びっくりした」

タ「そう言いますが、不気味な声をだして生徒たちを不安がらせないでください」
そう言いながらタカトシが雑誌を没収する。それは女性向けのエロ本だった。

ナ「か、返して、私の放課後の楽しみ。それは、生徒から没収したものだから私のじやないし、別に読んでいたつて誰も文句言わないだろうからさ」
泣きながら哀願する横島先生。だが、ばつたり倒れてしまつた。

ス「ふう……」

ちなみに萩村は、これが人間の仕業であると知つてホツとしているようだ。

ア「あら。この人、汗かいてるわね」

シ「あれの後なのだろう。ほら、ブリーフの先に○○が」

ちなみに会長たちは通常運転だつた。

ナ「学校にこんなもの持ち込んでる男子生徒がいやがつた」

次の日、横島先生が生徒会室にきて愚痴りに来ている。仕事はいいのだろうか?

ナ「だから没収ししてやつた」

またこつそり読む気か?

シ「確かに、いかがわしい雑誌ですね」

ハ「なぜ中身を見るんですか?」

別に中身を確認しなくてもいいと思うのだが。

ナ「だから放課後呼び出してやつた」

ハ「説教ですか?」

ナ「生身の良さを教えてやる」

：俺は横島先生から少し離れる。

ナ「なに離れているんだ。冗談に決まっているだろう。アハハハハ。：ハアハア」

：それならば息を荒げないでほしい。俺はさらに離れる。

シ 「津田、御堂！ 読むんじやないぞ!!」

タ 「読みませんよ」

ハ 「そうですよ」

ア 「そうよね。だつて2人は使うんだもんね」

ハ 「ちょっと待て！」

どう使うつもりだ。

翌日

ハ 「毎度思いますが、七条先輩のお弁当つて豪華ですよね」

ア 「そうかしら？」

生徒会室で昼食をとっていると、七条先輩も昼食をとりにやつてきた。ちなみに俺がここで昼食をとる理由は、書類仕事が少したまつていてるので、それを片づけようと思つたからである。これは七条先輩も一緒だ。

ア 「よかつたら一口いかが？」

ハ 「いいんですか？」

ア 「いいわよ。あーん」

ハ 「あーん」

手皿をしながら箸でつかんだおかずをこつちに持つてくる七条先輩。

その時、タイミング悪く会長が入ってきた。

シ「こ、校内恋愛は禁止だと！」

ハ「違います」

俺はそれまでの経緯を説明した。ちなみにおかげは弁当箱に入れてもらつた。うま
い。

シ「そういうことだったのか。しかしアリア。手皿は感心しないぞ」

ア「どうして？」

シ「実は手皿はマナー違反なのだ」

ア「でも○○の場合だと妖艶さが増すと思うけど」

シ「：論破されてしまった」

ハ「いや、まだ反撃できるから」

その時、今度は萩村が入ってきた。

ハ「どうしたの？」

ス「いや、この棚からある備品をね」

そういうつて、棚の上から2番目にある箱を取り出そうとする。

ア「スズちゃん、手伝おうか？」

ス「いえ、大丈夫でーうわっ！」

爪先立ちしていたら、バランスを崩して、手に持っていた箱の上にあつた箱が、萩村の頭の上を通過して七条先輩の胸にあたる。と思ったらバウンドして萩村の頭にあたつた。

ハ「だ、大丈夫か?」

ス「：平氣」

ちなみに今の光景をみて、会長が七条先輩（の胸）をうらやましそうに見ていた。

タ「遅れましたー」

今日は食堂で昼食をとつていたタカトシがやつてきた。

ハ「おう津田。：どうしたんだ、疲れた顔して」

タ「いやね。さつき、三葉と会つたときに、握り飯を食べながら俺を見るから、何かと思つたら、男の子をおかずになると体が満たされるつて聞いて、実際にやつてみたつていうから」

ア「あ、それ私」

ハ「やつぱりあんたか」

今日もいつも通りな生徒会だった。

受けがあるなら攻めがあるだろう

会長とタカトシとで校内を歩いていると、『せい!!』という声や『やあ!!』という声が聞こえてきた。場所は柔道場からだつた。

シ「何部だろうか？」

ハ「柔道部ですね」

シ「そうか…」

タ「気になるんですか？」

シ「うん。寝技が48もあるんだろう？」

ハ「それ、まだ引きずつっていたんだ」というか寝技違いだと思う。

ム「あれ、タカトシ君？」

声がしたので見てみると、三葉がいた。

ム「あ、ハルカ君に会長も」

タ「練習中だつたの？」

ム「うん。ちょっと水飲みに来たんだ」

シ「のぞいてもいいか?」

ム「もちろんですよ」

というわけで、柔道部の練習風景を見学することになった。

「せい!!」

「どう!!」

柔道部の部員（といつても三葉を除けば4人だが）が、練習に打ち込んでいた。

シ「みんな精が出るな」

ム「はい！」

確かに、みんな頑張って練習に打ち込んでいる。

ハ「大会とか出るの?」

ム「もちろん!!」

それはいいことだな。大会出場という目標を持つことでさらに積極的になるれるだろ

う。

ム「大会に出て優勝して名をあげて、皆でオリンピックにて金を取ろうと誓い合つています」

⋮それはスケールでかくないか?

シ「すばらしい団結力だな」

ム「それほどでもないですよ」

まあその団結力はいい。ただ一つ思うところがあつた。

ハ（みんな同じ階級だよなあ）

みんなで金を取るというより、金を取りあうになりそだと思った。

部員がほふく前進みたいなことを行つていた。

ム「これは腹這いつて言つて、腹を地につけて手足で移動するトレーニングです」

：見たところ足を使つているようには見えないのだが、実は使つているのだろうか？

ハ「結構きつそうですね」

見た感じ普通にやつてゐるが、実際きついのだろう。汗を流している。

シ「ああ。津田や御堂がやつたら、摩擦の刺激によつてイッてしまふな」

：どう反応すればいいんだ？

タ「そういうことは言つてない」

：タカトシの額に米印が浮かんでいた。

今度はでんぐり返しのようなことを行つていた。ただし背中を思いつきり打ち付けていた。

ム「これは受け身の練習です」

ハ「痛くないのか？」

ム「別に痛くないよ」

考えてみたら、投げられたときに衝撃を少なくするために受け身を取るんだつたな。

シ「攻めは？」

ハ・タ・ム「「は?」」

シ「受けがあるなら攻めがあるだろう!」

シ「何言っているんだ、この人。」

今度は地面で組み合っていた。

ム「これは寝技の練習です」

シ「違うな」

タ「え?」

シ「寝技とは、こうだ!」

シ「あまり変わらないような気がする。ただ角度が違うか。」

シ「そして、耳元に息を吹きかけると、効果抜群だぞ」

ム「なるほど!」

ハ「感銘受けるなよ!!」

シ「何言っているんだ、この人。」

柔道部員（以下柔）「ところで、津田君って君?」

さきほどまで会長の寝技？をかけられていた柔道部員（柔道着に中里という名前が書いてある）が、タカトシを指差して聞いてきた。

タ「う、うん」

柔「ムツミがことあることに君の話するからさ」

ム「ツ！い、いやだなあ。タカトシ君は、部設立に協力してくれたから、感謝しているだけだよ。気にしないでね」

いや、プロレス技をかけられているのに気にしないでは無理だと思う。というか離してあげようよ。

翌日

生徒会室には、横島先生がいた。

ナ「この間、妹の息子に九九を教えてあげたの」

シ「先生の甥っ子さんしていくつですか？」

ナ「今年小学校に入学したの。だからちょうどいいと思つてさ」

ハ「へえ…」

ナ「いんいちが1、いんにが2…」

おお。この人が普通に教えていた——ちょっと待て。この人が普通に教えるはずがな

い！

ナ「いんしちが7、いんはちが8…」

あ、オチが読めた。

ナ「いくくーが9つて言つたら張り倒されちゃつて。なんでだろう？」
シ「答える価値がありません」

ハ「というより帰つてください」

タカトシと廊下を歩いているときだつた。

ラ「今日は、生徒会所属ということで、学校で一番話題になつてゐる男子生徒、津田タカトシ君と御堂ハルカ君にインタビューしたいと思ひます」

いきなり畠さんが現れた。

ラ「『ずばり、あなたたちの好みの女性は？』

いきなりその質問かい。

タ「俺は、笑顔の素敵な女性がいいですね」

ラ「なるほど。アヘ顔が素敵な娘ですね」

タ「わざとだろ」

ラ「ちなみに御堂君はどうですか？」

ハ「俺は：頑張る娘ですかね」

ラ「なるほど。夜の営みを頑張る娘ですね」

ハ「深読みするな。つーかそんなこと考えたこともないわ」

畑さんを振り切り、生徒会室に戻つてくると、会長がパソコンをカタカタやつていた。

タ「会長、パソコンの勉強ですか？」

シ「うん。だがパソコンは目が疲れるな」

長時間やつているとそうなつてくる。結構勉強しているのだろう。努力家な人だ。

ス「それなら、いい方法がありますよ」

萩村が口を挿んできた。はたしてIQ180の天才少女が語る目が疲れない方法とは？

カタカタカタカタ→アイマスクしてパソコンを打つ萩村

ス「お貸ししますか？」

ハ「それで素人にどうしろと言うんだ？」

キーの位置がわかる人じやなければダメだろう、これ。

終業式

シ「ヒクツ…ヒクツ…」

さつきから会長がしやつくりしていた。

シ「これから全校集会のスピーチがあるので、どうしよう

ハ「何か飲み物があればいいんですけど…」

ア「これはどう?」↑いつか前に没収した工口雑誌
 シ「ゞくり」

ハ「…まだあつたのか」

結局しゃつくりは止まらなかつた。

タ「息止めはどうですか?」

シ「うむ…ヒクツ…苦しいのはヒクツ…苦手だな…ヒクツ」

すると七条先輩が靴を脱ぎ始めた。

ア「死ぬ気で頑張りましよう」

ハ「この人笑顔ですごいことするな」

するとどこから声が聞こえてきた。

「しゃつくりを止める方法はありません」

タカトシの股のあたりからくぐもつた声がする。

「自然に止まるのを待つしかないですが、長時間続く場合は器質的疾患の可能性があります」

え、嘘…。

ス「あんた邪魔」

タカトシが萩村にどかされていた。どうやらタカトシの後ろで牛乳を飲みながら話

して いた よう で ある。 ビツクリ し た。

シ 「あ、 止まつた」

ア 「今のは ビツクリ だつたね」

と りあえず、 これ で 問題 は 解決 した。

体 育 館 に て

タ 「毎度 ステージ に 立つと、 緊張 し ます ね」

シ 「そ うい う 時 は、 人 と い う 字 を 書 い て 飲み込 めば いい んじ や ない か?」

タ 「いや、 そ れ は あ ま り:」

シ 「な ら ば、 妹 は ど う だ ろ う か?」

ア 「津田 君 は 姉 の ほ う が い い んじ や ない?」

タ 「俺 が なん で も 突 つ 込 む と 思 う な よ」

耐 え ろ、 タカトシ。

ムツミ side

生徒会長の話になつたとき、 ふと タカトシ君の ほ う を 見て みた。 ハルカ君 は 涼しい 顔をして立つて いるけど、 タカトシ君 は 緊張 のせいか 顔 が 赤くなつて いた。

ム (かわいい なあ)

そ し て 今 度 は 会 長 を 見 て み る。

ム（あれ、会長も赤くなっているけど、なんで楽しそうなんだろ？…？）

ムツミ s i d e o u t

ハ（会長、ここで変なことしないで下さいよ…！）

会長の顔が赤くなっていることに気が付いていた。

内心、変な声を出したりしないかすごい気になつていたのだつた。

いろいろあつたけどなんとか始業式は終わつた。

シ「うん、なんとかスピーチを無事に終わらせることができた」

思いつきり胸を開いて伸びをする会長。

ア「よかつたねー」

七条先輩も同じように伸びをする。すると。

チ
チ

ア「あら、いやだ。ホツク外れちやつた。このブラもうダメだなあ」

：見れば会長はやけくそ気味に伸びをしていた。

ハ（あきらめましよう）

口の出すのも野暮だと思い、あえて出さなかつた。

ア「それにも暑いなあ。早く帰つて体洗いたい」

ス「七条先輩つて潔癖ですね」

タ「でも、きれい好きはいいことだと思いますよ」
うん。それにこれだけ暑いと、汗もかなりかくし。
ア「そうだよね。○○○洗浄は素敵だよね」
…………。

タ「それについても、夏休みの宿題多いですよね」

ハ「別に1週間あればいいだろう」

タ「え？」

シ「これくらいなら、5日あれば十分だ」

タ「え！」

ア「私はおかげで1週間ぐらいかな?」

タ「…ちなみに萩村はどのくらい?」

萩村なら1日とか答えそうだ。

ス「もう終わらせた」

シ「想像以上だった。というより速い。」

シ「それで夏休み中のだが」

そういうわけで、手元にある渡されたプリントを見る。

シ「夏休み中も、生徒会関係で登校してもらう日があるから注意してくれ。帰省など

による欠席等は、前もつて連絡してくれ」

ハ「持ち物なんかは?」

シ「特にないな」

ス「じゃあ手ぶらでいいんですね」

シ「：いや、服は着てこい」

：何を考えたんだ?

シ「それと、海水浴があるからその日は空けといてくれ」

ハ「海水浴?」

シ「親睦を深めるための生徒会恒例イベントだ。まあ事務的なものだし、気楽に参加してくれ」

事務的、ねえ。

手元にはプリントのほかに、『海のしおり』と書かれた小冊子がある。とても楽しみなのだろう。

海水浴前日

コ「いいなあ、タカ兄とハル兄は」

コトミがうらやましそうに言う。

ハ「まあ、お前は受験生だしなあ。仕方がないよ」

ちなみに俺は明日タカトシが寝過ぎないよう、起こす係として今日津田家に泊まる。明日は桜才学園の校門に6時集合なのだ。

タ「しつかり勉強しろよ」

コ「もう、タカ兄はだめだなあ。やろうとしている人にやれっていうのは逆効果だよ」
やる気に水をさすんだよなあ、あれ。

コ「○○○○のときだつて自分がやろうとしているとき向こうからやつてて言われる
と萎えるでしよう」

⋮そのたとえはだめだろう。

タ「恥じらいは重要だね」

海水浴は明日。楽しみにしておこう。

海へ行こう

夏といえども、早朝はそれほど暑くもない。

午前6時前、俺とタカトシは桜才学園を目指していた。

ハ「たく。二度寝するなよ」

タ「ご、ごめん」

今日は生徒会のメンバーで海水浴に出かける日である。

タ「でも、いくらなんでも6時集合って早すぎない？」

集合は朝6時に桜才学園校門前である。

ハ「まあ遠い場所らしいからな」

横島先生が車を借りて俺たちがそれに乗る形である。

本当は横島先生も車を持つているのだが、軽自動車で、6人はさすがに乗れないらし
い。

ハ「お、七条先輩と萩村だ」

タ「あ、本当だ」

ア「あ、二人とも来たのね」

ス「遅刻するかと思つたわ」

タ「眠いけど、なんとか」

ハ「二度寝したくせに」

ス「あ、やつぱり」

萩村がタカトシを呆れたように見る。

タ「と、ところで、会長は?」

ア「まだ来てないみたいだけど…」

シ「待たせたな!!」

噂をすれば何とやらというべきか、会長が現れた。ただ、その恰好は、海で遊ぶぞ、という様を全身で表現している。

シ「みんなこのイルカがいいのか?まあ頼めば乗せてやるぞ。ただし、私が先だが」いや、別に乗りたいとかではありません。

プツプ

ナ「やあ、皆お待たせ。さあ乗った、乗った。ん?」

横島先生は会長のイルカが気になつたようだ。

ナ「悪いけど、それ空気抜いてもらえる?」

こうして、車で目的地まで向かう。移動は高速を使うが、すいていれば2時間ほどで

着くようだ。

ちなみに座席は、前から運転手の横島先生と、助手席の七条先輩。その後ろに、会長と萩村。さらに後ろに、俺とタカトシといつた席順である。

タ「それにしても、どういうところなんだろう?」

ハ「楽しみだなあ」

やがて、いくつかのトンネルを抜けると、そこはきれいな青い海が広がっていた。

全員「[[[[[おおゝ…]]]]」

その美しさに、しばし見とれていた生徒会役員一同であつた。というか、運転手さん、前見て!!

タカトシ side

車から荷物をおろし、更衣室で水着に着替えると、さつそく砂浜に出る。

穴場なのか、人はいるものの、有名海水浴場にあるような、パラソルを立てる場所もないというほど的人はいなかつた。

タ「うん、いい景色だ…」

青い空と白い雲。青い海と白い砂浜。それは見るものを感動させるだけの何かを持つているのか、俺は声に出してしまった。

ハ「そうだな。それにしても会長たち、遅いな」

タ「まあ女の子だし、着替えに時間がかかるんでしょう」

ハ「まあいいや。とりあえず場所だけでも—」

「こら、そここのあなた!!」

声をかけられ、振り向くと、監視員らしき人がいた。

タ「なんですか?」

監視員（以下監）「そこの女性はなんで水着の上を着てないで、しかも男物の水着を着ているんですか!!」

：どうやらハルカを女性だと思つてやつてきたようだ。

ハ「いや、俺は男で…」

監「とりあえず、水着を貸すのでこちらに来てください!!」

ハ「いや、だからこっちの話も…」

監「いいからこっち来なさい!!」

：とりあえず、どうしよう。

結局、男だとわかつてもらえたものの（どうやつてとは聞かない）、上にTシャツを一枚羽織ることになつてしまつたハルカだつた。

タカトシ side out

ハ「屈辱だ…」

俺はそうとしか言いようがなかつた。どうして正しい性別の水着を着て怒られなければいけないんだ…。あと真実がわかつたときの監視員の反応が、信じられないものを見たという顔をしていた。…どうやつて真実がわかつたかは言わない。言いたくない。

ス「御堂はどうしたの?」

ア「なんか暗いよ?」

シ「なにかあつたのだろうか?」

ハ「…聞かないでください。これ以上こころをえぐるのはやめてください…」

今になつてやつてきた女性3人が集まつた。

ス「まあいや」

ア「それについてもシノちゃん、赤い水着似合つているね」

ちなみに萩村がワンピースタイプ、会長と七条先輩がビキニタイプの水着を着ていた。ちなみに今言つた通り、会長の水着は赤色である。

シ「ふつ、まあな。この日のために用意しただけのことはある」

どうやらその水着は新しく買つたようだ。

シ「あの日が近いから」

ア「いつも来ても大丈夫だね」

…無視しよう。

俺たちは横島先生のところへいつたん集まる。

シ「とりあえず、教師として何か一言お願ひします」

ナ「そうね。羽目を外しすぎないようにかしら。ハメるのはいいけど
タ「どつちもダメだろ！」

シ「とりあえず、海で遊ぶ俺たち。

シ「沖まで競争しようか？」

ア「いいわよ」

タ「やりましょう」

二人は乗り気のようだ。

ハ「もちろんやりますよ」

俺も当然受けて立つ。

ス「私、足がつかない場所では泳がない主義ですので遠慮します」

：ふと、なぜか小さい子が遊ぶビー

ス「誰だあ!! ビニールプールを連想した奴は!!」

そして全員が沖まで競争することになった。結局全員か。

戻つて陸に上がる俺たち。

ス「何か飲む? 私がおごるわ」

タ「ヂーちです」

ハ「サンキュー」

そして海の家で飲み物を注文する。その時、なぜか店員がタカトシを見ていた。

店員「450円です」

⋮どうやら、萩村はどこ行つても子供扱いされるらしい。

ス「ま、まあこのくらいで腹を立てるほど子供ではないわ⋮」

ハ「そうだね」

このくらいで腹を立てては世の中やつていけない。現に俺がそうちから⋮。

ハ「ただ萩村。強く握ると容器壊れるよ」

とりあえず注意する。あ、ふたが外れた。

ふと前を見る。すると七条先輩がナンパさせていた。

ア「あ、タカくくん」

七条先輩が、俺たち、というよりタカトシに向かうと、腕に抱きつく。

ア「この人が、私の彼氏⋮」

ふと七条先輩が萩村と俺に向けられる。

ア「夫です！」

ハ・タ・ス「「ええ!!」」

仰天発言だつた。

ア「そしてこの人は——」

今度は俺を指差す。

ア「夫の愛人です!!」

ハ・タ・ス「「えええっ!!!」

もつといい言い訳思いつかなかつたの!?

ア「ごめんなさいね。ナンパがしつこくて」

タ「いえ。俺でよければ相手役になりますよ」

ア「ありがとう」

ス「私はごめんなんだが」

ハ「同じく」

今俺はタカトシと手をつなぎ、タカトシは七条先輩との間に萩村を挟んで手をつない
でいた。家族に見せかけるためらしいが、あきらかにおかしいだろ!

その後、波打ち際で遊ぶ俺たち。

タ「ふと思つたんだけど

ハ「何を?」

タ「波で水着がさらわれるシチュつてあるよな」

ハ 「あれはさすがにこの場所じやないだろう」
ス 「：男つてみんなそんなこと考えるの？」

萩村にドン引きされていた。

ア 「キヤ！」

七条先輩の軽い悲鳴にそちらを向く。

ア 「今の波はすごかつたね。水が○に入っちゃつたよ」

：妄想を絶した。

「ギヤ————!!」

男の悲鳴に、何事かと沖を見る。

さきほど七条先輩にナンパしていた男が、沖で何かに襲われていた。

ア 「な、何？」

ハ 「ひよつとして、サメ？」

ス 「に、逃げなきや！」

ナンパ男 「た、助けて！」

顔を水上に出し助けを求めるナンパ男。しかしまたサメ：ではなく、横島先生に襲われ、水中へと消えていった。

「「「……」」」

思わず黙ってしまう俺たち。

ハ「他人のふりしよう」

「「うん」」

そして俺たちは陸地に上がつて行つた。

シ「おお、来たか」

やはりというべきか、横島先生はいなかつた。代わりに会長が、いくつかの飲み物が入つた容器を手にしていた。

シ「とりあえず休憩しようと思つてな。ついでにみんなの分の飲み物も買つてきたぞ。ただし全部スポーツドリンクだがな」

タ「ありがとうございます」

ア「さすがシノちゃん。気が利くわね」

みんなパークーやシャツを羽織る。ちなみに俺はそれ用のTシャツを水着として使つてるので、それができない。

ス「あれ、津田。シャツが裏返しよ」

タ「え、マジ。ありがとうございます」

シ「うつかりさんだな。まあ、私も○○○○を裏返して大変な思いをしたがな」
タ「気持ちを共有できません」

そして休憩ついでに昼食をとることになった。

シ「あ！」

会長が驚きの声を上げる。

シ「しまった。飲み物をこぼしてしまった。水着にたれてしまつたし、シミになつてしまふ」

タ「でもスポーツドリンクですし、大丈夫じゃないですか？」

シ「本当に、そう思うか？」

見てみると、濡れたのは股のあたりで、しかもスポーツドリンクだから白い。なので

ハ「とりあえずタオル貸しますから隠してください」

その後、生徒会でビーチバレーをやつたり（5人なので一人は審判を務める）、浜辺をのんびり泳いでいたりしているうちに、夕方になつていた。

シ「楽しかったな、海」

タ「そうですね」

久しぶりに海で遊んだが、結構楽しめるものだつた。

シ「そういえば海に来るたびに思うのだが」

ハ「なんですか？」

シ 「巨大なサメが人を襲うシーンがあるだろう」

ハ 「ありますね」

ジヨ○ズとかだろうか。

シ 「あれがもし巨大なタコやイカだったら、18禁映画になつてしまふなど」
⋮ それ来るたびに考えているのだろうか？

タ 「今の俺ならあなたなら説教できそうです！」

しかしそういうがタカトシ。さつき似たようなものがあつただろう。
うところが。

あれを思い出すとサメが怖くなくなつてきたぞ。

ア 「スズちゃん、眠いの？」

ス 「⋮平気です」

そういうが、かなり眠そうだ。

シ 「まあ私もクタクタだ。早く帰ろう」

ハ 「それはいいのですが⋮」

今になつて大問題に気が付いた。

シ 「どうした？」

ハ 「横島先生が⋮」

横島先生
サメが人を襲

パラソルの下で寝て いるのだ。

シ「寝ちゃつたのか。なら早く起こそー」

問題は、その上に散らばつたビールの缶である。

シ「：宿、探すか」

タ「：そうですね」

旅館に泊まろう

引率の大失態により、俺たち生徒会メンバーは近くの旅館に泊まることになった。幸いにして今日はすいており、飛び入りの俺たちも快く迎えてくれた。

ア「お姉ちゃん、お風呂24時間使えるつて」

シ「そうか」

ちなみに体裁等もあるので、ここでは家族という設定である。

タ「なあ、代わってくれよ」

ハ「いやだ。頑張れ」

ちなみに醉っぱらって寝てしまつた横島先生は、タカトシに背負われている。

ス「それにもしても一部屋とはいえ部屋が取れてよかつたわねえ。お・ね・え・ちや・ん」

ハ「…：そうだな、い・も・う・と」

ちなみに萩村は一番下の妹。俺はその上の姉でタカトシの妹という設定である。

ハ・ス「「なんか屈辱的だ…」」

案内されたのは部屋に荷物をおろす。

シ「しまつた。ケータイの充電が切れかかっている。家に連絡しようと思つていたの

だが

タ「あ、ケータイの充電器なら、俺持つてますよ」

ハ「へー。用意がいいな」

タ「妹が気を利かしてくれてね。歯ブラシとかも持たせてくれたし。つと、これかな

？」

そういうつて取り出したのは、：コ○○○ム。

シ「ほ、本当にいろいろ用意してきただな！」

ハ「コトミの奴、何を期待したんだ？」

タ「いらん気も回してくれた妹には明日説教だ」

そしてタカトシが怒られた。

いつもなら弁解するのだろうが、タカトシも疲れているのだろう。

ア「シノちゃん、ゴムを持つことはいいことだよ。生で○○○○○○○は危険だもの」

タ「そーゆー道具じやねー!!」

ハ「あ、突っ込んだ」

しかし家に連絡していくだく前にひとつ気になることが。

ハ「ところで。男と外泊つて、何か言われませんかね」

ア「そうだね。津田君も御堂君も安全な人だけど」

シ「問題はそれをどうやつて説明するかだな」

ス「うちの母親だつたら変なこと考えるだろうし……」

この間のこと（萩村の家に行つた日のこと）を考えると、それはあり得るかも知れな
い。

ア「あ、そうだ。津田君と御堂君は二次コンつていうのは？」

ハ「できればほかの案で」

シ「そうだ。津田と御堂はボーアズラブで、お互に愛し合つてているというのは——」

ハ「却下…………!!」

タ「できればもつと違う案でお願いします!!」

結局、それぞれ頑張つて説明するという形で落ち着いた。その際、それぞれの家人
から話がしたいということを言われ、ケータイ越しに話をしたのだが、それでかなり話
が長くなつてしまつた。疲れた……。

タ「で、風呂なんだけど……」

ハ「なんだ？」

タカトシが言いにくそうにしているが、決断したように話し始めた。

タ「お前は個室の風呂ね」

ハ「なんでー!?」

タ「お前が入ると、いろいろ問題が起こりそうで：」

ハ「いや、俺はお前と入るぞ！」

知らない人から見たらどんでもない発言だろうが、これはハルカにとつて大事なことである。

いつも周りから女とみられるハルカにとつて、男との入浴が落ち着くのだ。決してそつちの道に入っているわけではない。

ス「大変なのね、あんたも：」

萩村が同情したように言うが、これは問題なことである。

男湯に入れればなんで女がいる、と大騒ぎになるし、女湯に入れればなんで男が、と大騒ぎになる。これほど割に合わない状況はない。

シ「まあここは混浴湯もあるようだし、そこに入ればいいじゃないか」

タ「それしかないな」

ハ「：なんか納得いかない」

しかしそれを受け入れざるを得なくなってしまった。

タカトシ side

タ「それじゃあ先に上がるぞー」

いまだ落ち込んでいるハルカを置いて、俺は先に風呂から出る。

暖簾をくぐると、会長と出くわした。

シ「おう」

タ「ああ」

そして部屋まで一緒に行くことになった。

タ「いい湯でしたね、会長」

シ「こら、ここでの我々の立場を忘れたのか?」

タ「あ、すいません。では改めて。いい湯だつたね、姉ちゃん」

シ「そうだな、今度一緒に混浴するか」

アハハハハと笑いあう俺たち。だが、それは後ろに見知った顔が現れるまでのことであつた。

「「.....」「」

なぜ、なぜここに畠さんがいる!!

タ「えっと、どうして?」

ラ「我々は新聞部の合宿で来ているのですが、まさかあなたたちがそこまで進んでいたとは」

シ「ちなみに、そこまでつて…?」

ラ「だつて、今の姉萌えプレイでしよう」

シ・タ「いや、これは…」

どうしよう。いい言い訳が思いつかない！

ラ「安心してください。私、記事にするまで口は堅いですから」

タ「結局バラすのか!!」

シ「こ、これにはいろいろ事情があるのだ。ここは黙つていてくれないか？」

そうだ。俺たちは事情があつて仕方がなくここに泊まつているのだ。そのあたりを

察してくれたら、きっとこの人も…！」

ラ「さて、どうしようかしら」

シ・タ「「ぐつ…」」

ラ「なんだか風呂上がりだからコーヒー牛乳が飲みたくなつたなあ…」

結局、コーヒー牛乳で手を打つことになつた。これで一安心したが、この後、2学期になつてそれが甘かつたことを思い知らされた。

タカトシ side out

風呂から上がり、皆でトランプ大会をしていた。

シ「よし、そろそろ床に就くか」

ア「そうだねー」

タ「じゃあ俺、離れて寝ますね」

ハ 「俺も」

シ 「何を言つてゐる。君たちのことは信頼してゐるぞ」

ア 「そうだよ」

ハ 「ありがとうございます。でもそれじゃなくてですね…」

シ 「なんだ?」

タ「いや、俺たちはいつの間にか隣を陣取つてゐるこの人を全く信用できませんので」
ハ「なんだか服脱いでいますし」

ビクツ

⋮反応した。

シ「横島先生。そこは私が」

横島先生は簀巻きにし、俺たちは布団に入ることにした。

ちなみに俺はタカトシの隣。そのまた隣に会長という形で寝た。

タカトシ side

なんだか変な夢をみた。会長や七条先輩や萩村の水着を俺が持つて、海岸を走つていた、それを追いかける3人はなんだか妙に笑つっていた。そんな夢をみた。俺、生徒会に入つて思考が変になつたのだろうか？

なんだか右腕に違和感がある。何かが乗つてゐるような、そんな感覚だ。

タ「あれ？」

なぜか会長が俺の布団に入り、俺の腕を枕にして寝ていたのだ。

タ「あ、あの、会長」

呼びかけると会長は目を覚ました。

シ「ツ!!!わ、私たちは姉弟だ!!近親相姦はいけないぞ!!」

タ「その設定、まだ生きていたんですか…」

というより顔を赤くしている。どうしたのだろうか？

タ「会長、顔赤いですよ」

シ「い、いや、これは…」

その時。

ガバッ

シ・タ「!!!!」

ハ「あー…うるさい…zzz」

なぜかいつたん跳ね起きると、また寝てしまつたハルカ。

シ・タ「…………」

シ「とりあえず、お休み」

タ「あ、おやすみなさい」

会長も自分の布団に入つたので、自分も寝ることにした。

それにもしても今2時か。あと何時間は寝られるか：ｚｚｚ。
タカトシ side out

昨日の疲れが嘘のように消え、気持ちのいい朝を迎えた。
朝することは、髪をまとめることがある。そうでもしないと、リ○グの○子みたいだと言われるのだ。

見ると周りの女子はみんな起きており、寝ているのはタカトシだけとなつた。

ス「あー、もう。寝癖がなおらない」

萩村は髪の手入れが大変そうである。

シ「私もだ」

みると会長の髪型は、いつも横にぴょこんとはみ出している毛がない。

シ「バランスがとれん」

ハ・ス（あれつて通常モードだつたんだ）

というより髪でバランスを取つていたのか。

ハ「俺も寝癖がひどいなあ」

後ろでまとめるだけなのだが、髪がぼさぼさ過ぎてうまくまとまらない。仕方がないので櫛を通すことにしたのだが。

ス「

ハ「あれ、萩村？」

ア「気絶しているね」

：もしかして、俺のせいか？

いろいろトラブル？もあつたが、女子+1は着替え終わつたので、タカトシを起こすことにする。

ハ「おいタカトシ、起きろ!!」

タ「うん、あと5分…」

シ「何言つている。あと5分で何ができる」

ア「朝〇〇の処理とか？」

シ「ならば仕方がない」

ハ「仕方がなくない!!」

タ「そろそろ起きちゃおつかなー」

やつと起きたか。

というわけで朝食。

タ「旅館の朝食つておいしいですよね」

ハ「まあその道のプロが作つてあるんだもんがあ」

ア「うちは普段洋食だから、和食の朝ごはんって新鮮ね」

七条家の朝ごはんか。豪華なんだろうなあ。

ナ「ねえ」

昨晚簀巻きにされていた横島先生が自分たちを呼ぶ。

シ「なんですか？」

ナ「なんで私たち、旅館で朝食食べているの？」

「「「あなたのせいだろ」」」」」」

俺たち4人の叫び声が響き渡つた。ちなみに七条先輩は笑つてゐるだけだつた。

帰り

シノ side

ア「ハプニングもあつたけど、楽しかつたねえ」

シ「そうだな」

泊りになるなんて初めてのことだが、これはこれでいい思い出だ。

ナ「私は疲れたよ」

シ「それはこつちのセリフです」

誰のせいでこうなつたことやら。

ちなみに今回の席は、萩村が助手席。私と津田がその後ろ。その後ろに、アリアと御

堂という感じだ。

シ「初めて参加した津田はどうだ?」

津田に、今回の感想を聞くが、こたえる前に寝てしまつた。そして私に寄りかかつてくる。

ア「疲れたんだねえ。御堂君もスズちゃんも寝ちゃつてゐるし」

シ「しょ、しようがない奴だな…」

とはいへ、これはこれで昨日津田の布団に入つてしまつた時のことを思い出してしまふ。顔を赤くしないように必死だ。

ビクン

シ「え?」

なんかはねたぞ!ま、まさか…。

ア「今のはジャーキングつて言つて、体に負担のかかる寝方とかをするとなるらしい

ね」

シ「なんだ、そうだったのか。てつくり夢○したのかと思つたぞ」

タ「イツてねー!!」

シ「あ、起きた」

私たちの街へと帰つていく。

新しい桜才のパイオツマニア

2学期が始まった。今日は生徒会の会議が行われる。

シ「今日は、来月行われる体育祭について、議論を行いたい」

ア「やっぱり男子が入ってきたから、考えなきやいけないかな?」

シ「そうだ。新しい何かはないだろうか?」

ア「男と女がいるんですもの。○○○○とか○○○とか」

シ「ほう、ならば○○○○もいいかもな」

ハ「すべて却下でお願いします」

：会長たちはいつも通りのようだつた。

ス「津田、何かない?」

タ「うん、思いつくものは、リレー、借り物競争、大縄跳び、玉入れ⋮」

シ「何を言っているんだ、君は?」

タ「え、玉入れ知りません?」

シ「だつて入れるのは竿だろう。どうやつて玉をいれるんだ?」

⋮この人は玉入れを知らないのだろうか、それともワザとなんだろうか?

ハ「とりあえず、去年までやつてきたものを書いてみては?」

シ「そうだな。アリア、よろしく頼む」

ア「はいはい」

ホワイトボードには、去年までやつてきた内容が書かれる。

シ「アリア、誤字があるぞ」

ア「え? …ああ、そうね」

『女子校生だらけの騎馬戦』→『女子高生だらけの騎馬戦』

ア「公的にはこっちだつたね」

シ「まつたく。アリアはうつかり屋だなあ」

アハハハと笑いあう会長と七条先輩。だが、この人が間違えると、裏がありそうに思えるのはなぜだろうか…?

シ「あとパン食い競争のパンの種類を増やしてみるのはどうだ? メロンパンとか」

これは好きだからだろう。

タ「カレーパンもいいと思いますよ」

これも好きだからだろう。

ス「極長のフランスパンがいいです」

⋮届かないからだろう。泣ける。

ナ「よお、生徒会役員共。調子はどうだ?」

横島先生が入ってきた。

シ「順調に進んでいます」

ナ「そうか。……ん?」

なぜか横島先生がホワイトボードによる。

『女子○生だらけの騎馬戦』

そして磁石でこんな悪戯をした。

タ「何やつているんですか?」

ナ「じゃ、がんばってね」

ハ「何しに来たんですか?」

ス「ところで、今思つたのですが、男子の多いクラスと少ないクラスで、戦力にばらつきが生じませんかね?」

確かに少ないところは5人くらいだが、多いところは7人ぐらいいたりする。

シ「そうだな」

ア「力を使う競技は、とくにその差が出るよね」

綱引きとかは、女子より男子のほうが、腕力がある分有利だもんなあ。

シ「ハンデをつけよう」

ハ「どんなハンデですか？」

シ「男子は前日までに限界まで自家発電を行うこと!!」

タ「こつちで考えますからいいです」

というか、翌日には回復しているんじや…。

ハ「どうするか？」

タ「男子は競技の出場回数に制限を設けるとかは?」

ア「それはいい案だね」

ス「あんたが楽したいだけでしょう」

ハ「ならば、競技ごとに男子の出場人数を制限したりとか、男子限定の競技とかは?」

シ「なるほど。新しい観点を得るために君たちをスカウトしたのは正解だったよう

だ」

結構照れるな…。

シ「今後も、新しい桜才のパイオツマニアとして、期待しているぞ!」

タ・ハ「パイオツマニア?」

シ「すまん、パイオニアを噛んでしまった」

ハ「器用に噛みましたね」

ワザとなんじやないだろうか…。

その後も会議が続けられ、一部を除いて大体議論が終わった。

ハ「結構長引きましたね」

もう空が赤く染まっていた。

ア「そうだね。もう9月だけど、結構遅くまでいたんだね」
ちなみに現在は途中まで全員で帰っているところである。

シ「ふあー…」

ス「寝不足ですか？」

会長があくびするなんて、結構忙しいのだろうか？

シ「まあな。秋は体育祭や文化祭があつてな」

タ「生徒会って大変なんですね」

ア「でもシノちゃんの場合、楽しみで眠れないんじゃない？遠足の前日は眠れない性

質だから」

ハ「もう！」

まだ1カ月以上はあるのに！

シ「そ、そんなわけないだろう。もう高校生にもなつて…」

でもあまり言い訳できていらないような気がする。そして会長の新たに子供っぽい一面が見られた。

ある日

ピンポーン

ハ「はーい」

俺がチャイムに反応して玄関に向かうと、萩村が立っていた。

ス「あれ、なんでここにいるの?」

ハ「…あいつ、なかなか起きないからさ」

ス「…ああ、なるほど」

ちなみにここは俺の家ではなく、隣の家で勝手知つたる津田家だ。

タ「ハルカ、誰だつたの…て、萩村?」

ス「あんたいつか前に服装チエック遅れたでしょ。今日服装チエックがあるから迎えに来てやつたわ」

タ「ごめん、ごめん」

ハ「これからは萩村に任せようかな」

ス「いやだ」

ハ「だよねー」

コ「あれ?」

コトミが玄関にやつてきた。萩村を見て首をかしげる。まあ見たこともない人がい

れば当然ー

コ「タカ兄つて、ペド?」

「「!?!」」

その反応は予想外だつたよ!!

ス「せめて口りつて言え!!」

ハ「ええ!?」

それはいいの?!

ス「私の名前は（以下省略）。どお、これでも私を子ども扱いする!?」

コ「そういう夢をみたの?」

ス「現実だー!!」

：かわいそうに。

朝にいろいろトラブルがあつたものの、なんとか間に合つた俺たち。

シ「シャツは中に入れなさい！」

「すいませーん」

こうしてみると、服装を正さない人つて何人かいるんだな。

シ「まつたく。相変わらず服装の乱れが目立つ。今度の全校集会で注意せねばならな

いな」

ハ「ちなみにどう言うつもりです？」

シ「外に出すのは、○○○の時だけにしろ!!これはどうだろう?」

タ「全力で阻止させていただきます」

なんとか止めてくれ。本当に言いかねないから…。

服装チエックの後、柔道場にお邪魔した。

ム「今度、他校と練習試合することが決まりました。よかつたら、応援に来てください

い」

ハ「へえ。それはすごい」

ス「部設立以降初めてのことね」

というより、部設立半年でそこまで行くのがすごいと思うのだが。

タ「緊張するだろう」

ム「大丈夫。私、本番に強いから」

シ「それはいいことだ。前戯も怠らないようにな」

ム「ぜんぎ?準備はしてますよ?」

ボケとピュアはかみ合わないな。

そして三葉はペタンと座ると足を大きく開く。

ア「わっ、そんなに股開いて大丈夫!?」

ム「別に痛くないですよ」

ア「いや、膜のほうが」

ム「へつ？」

：もう何も言うまい。

生徒会室に戻ると、畠さんがいた。

ラ「今日は会長の1日を密着取材したいと思いまして」

シ「なるほど」

ハ「大丈夫ですか？」

シ「何言っている。カメラの前だろが臆することなく普段通りの自分でいて見せよ

う

：いや、俺たちの不安はそこじゃない。普段道理が一番不安なんだよな。ボケるか

ら。

しかし心配していたことはとくになかったようで、少しだけ見せてもらつた写真には、会長の授業風景や生徒会室の様子などが写されていた。これなら、別に問題は—

ラ「これだけ撮れたらかなりのもうけになるわね」

：取材は？

ラ「あ、そうだ。せつかくだからあなたにも取材していい？」

畠さんはタカトシに聞いた。

ラ「副会長であるあなたにとつて、会長はどんな存在？」

タ「そうですね。素敵な人ですよ。お世話になりっぱなしで」
うん。確かにお世話になつてゐるな。：ボケるけど。

ラ「会長は○○ペツトつと」

タ「どういうとらえ方しているんだ」

畠さんの頭の中がどうなつてゐるのか気になつてきたぞ。

話は変わるけど、七条先輩はいいトコのお嬢様で、それなりにお稽古をしてゐるらしい。現にいま七条先輩は花を活けていた。

ハ「先輩つて、華道やつていたんですね」

ア「うん」

タ「ほかには何を？」

ア「お茶にお琴に、あと書道も」

ハ「書道は書記にぴったりじゃないですか」

ア「そうだね。あ、作品あるけど、見る？」

タ「いいんですか」

そして見せてくれたのだが、それは…。

『愛人』

ア「人を愛するって、素敵な言葉だよね」

そうなんだけど、なんか意味が違う!!

目安箱。それは生徒からの不満や要望などを受ける投書箱である。しかし…。
タ「今日もあんまり利用されていないな」

まあ9月になつて、あまり不満などがなくなってきたのだろう。それとも目安箱の投書口に書かれているものが原因だらうか?

ハ「でも一つもないってのはなあ。横島先生、なにか不満があれば投書してください」
生徒会室にいた横島先生に、何か投書してくれるよう頼んでみる。

ナ「不満ねえ…」

紙を取りだし、さらさらと書き込むと、目安箱に入れようとする。

紙には『欲求』と書かれていた。

ハ「それはシユレツダーに入れてください」

そんなもん生徒会に頼むな!

今俺たちは廊下にいた。生徒会で、廊下の見回りをしているのだ。目的は…。

シ「走っている生徒がいたら、注意してくれ」

ハ「わかりました」

ア「でも、角でぶつかる出会いがなくなっちゃうよ。少子化が加速しそう」
 ブ「女子は食パン咥えているのだろうか?」

シ「ふむ。ならば、こうしよう」

そして『廊下は走らない』の文字が書かれたポスターに、何かを書き加える会長。そこには、『曲がり角付近は可』と追加されていた。

シ「これで少子化は止められそうだな!」

タ「いや、そこ一番スピード落とす場所です」

曲がり角で走り出す人はいないだろう。人より前に壁にぶつかるから。

シノ side

生徒会室で雑務をしていると、ブーンという音がした。みれば、ハエのような虫が飛んで……!!

シ「う、うわあ、虫だ!!た、助けて……」

ア「シノちゃん、虫苦手なんだね。毛を剃った後みたいな肌しているし」
 ス「鳥肌でよくないですか?」

シ「そ、そんなことどうでもいいから、なんとかしてくれ……!」

ア「私も現代っ子だから」

ス「大きさ1cm以上の虫は守備範囲外ですので」

どうしよう、誰も何もできない…。

シ「そ、そうだ！ 窓を開ければ、そのうち出ていくはず…！」

これで問題は解決！

ア「もう一匹入つてきちゃった」

シ「え？ うわーん」

パン

私たちが何もできず右往左往する中、何かを叩く音がした。

見れば、津田が雑誌を丸めたものをもっていた。

シノ side out

タカトシ side

生徒会室に入つてみれば、会長たちが虫だ虫だの大騒ぎをしていた。

とりあえず、手近にあつた雑誌を丸めて、その虫を叩いた。

タ「退治しましたよ」

すると、会長たちは笑みを浮かべ始めていた。会長なんか、目が潤んでいる。

シ「よくやつた、津田！！」

ス「お手柄ね、津田！！」

ア「さすが副会長！！」

みんなが褒める。褒められるのはうれしいことだ。

ただ、ここまで褒められたのは生徒会に入つて初めてのことだつた。虫退治して。
「俺、そこまで役に立つてませんでしたか!?」

タカトシ side out

ハ「：何やつているんです？」

俺が生徒会室に入ると、タカトシが祝福？されていた。

シ「おお、御堂。津田はよくやつてくれたぞ!!」

だから何を？

ふと机を見ると、丸められた雑誌があつた。そこには、虫の死骸がこびりついている。
雑誌の表紙を見た。見てみると、五日前に横島先生が没収した工口雑誌だつた。という
よりまだあつたの！？

ア「あ、それつて。津田君、やつぱり使つたんだ」

タ「：え？」

途端に、この場の空気が冷たくなる。

シ「津田、読むなと言つただろう：」

ス「変態：」

タ「ちょ、なんで俺こんな扱いなの！？」

ハ「…よくわからんが、なんかすまん
でも何があつたのだろうか？」

決戦、柔道部

生徒会室には、様々な人が訪れる。用事を頼みに来た先生方や、部活動や委員会の要望・意見を出しに来る生徒、相談にやつてくる生徒などだ。

そしてこの日も、生徒会室に訪れる人がいた。

コンコンコン

タ「はーい」

ノックにタカトシが答え、扉を開けると、誰もいなかつた。

タ「あれ?」

ハ「コンコンダツシユ?」

ス「なにそれ?」

タ「何にしろ、イタズラだつたのかな?」

しばらくして…。

コンコンコン

ア「はーい」

今度は七条先輩が答える。

七条先輩が扉を開けると、そこには三つ編みの女子生徒がいた。

「失礼します」

…もしかしてさつきノックしたのはこの人か？

その人はタカトシと俺に気が付くと、警戒するような目つきになる。

カエデ（以下力）「風紀委員長の、五十嵐カエデです」

シ「ああ、久しぶりだな」

ア「ほんとお久しぶりね」

風紀委員長だったのか、この人。

ス「椅子をどうぞ」

萩村が椅子をもつて五十嵐先輩に勧める。

力「あら、ありがとう」

タ「冷たいお茶をどうぞ」

今度はタカトシが麦茶をもつて勧めてくる。

力「あ、ありーなっ!! あ、ありがとう。きよ、今日はあ、あついものね…」

ハ「震えますよ」

暑いという割にはさつきから足とかが震えている。タカトシが来た瞬間から。
…もしかしてタカトシが苦手なのか？

力「えーっとですね。コホン。実は、風紀委員として、あなた方生徒会に査問にまいりました」

ス「査問?」

力「はい。実はあなた方生徒会に、ある嫌疑がかけられています」

シ「何!」

力「これを見てください」

そういうつて、持つていた封筒から紙の束を取り出す。それは写真だった。それも――

ハ「海行つた時のか」

力「あなた方が夏休み中に、異性がいながら同じ部屋で外泊したと、ある情報筋からありましたね」

そう、それは海に行って、事情があつて外泊になつたときの写真だつた。主に俺たちが旅館の中で歩いている写真などであつた。

ス「結構あるわね」

タ「こんな写真、だれが提供したんですか?」

力「この人です」

そういうつて指差した先には、畠さんがいた。

タ「言わない、記事にしないという約束だつたじゃないですか」

ラ「別に記事にもしてませんし、誰にも告げていませんよ。ただ写真を見せただけで」

ハ「それはとんちじやね」

というより揚げ足取りか?

カ「風紀委員としては、生徒会がこのような不埒な行動をとったことを、見過ごすわけにはいきません」

シ「それはつまり?」

カ「場合によつては、風紀委員会から不信任決議案を全校会議で出すことを検討します。最悪の場合、解任という可能性もあります」

解任…。

シ「ふむ…」

まさかあの件がここまで大きな規模になるとは思つてもみなかつた。これにはさすがの会長も少し考え—

シ「別に懷妊なんてしていないぞ」

全然考えてなかつたな。というよりどういう流れでそういう話になつた。

タ「日本語つて難しいね」

いや、この流れでそれに結びつくのはおかしいと思うぞ!

シ「しかし五十嵐。これには大きな誤解がある。酒癖の悪い横島先生がかくかくしこ

しこ

ス「しかじかでしょ」

ア「そうだよ！不埒なんて言いがかりだよ!!」

カ「しかし、それを証明できますか？」

証明は難しいな。扉を閉めればそこは密室だし。

ア「もちろんできるよ!!」

どうやつてだ?

ア「ちやんと全員膜あるからトイレに行こう!!」

ハ「それ証明にならないと思います」

結局それか?:

カ「そんなことせずとも、私は洞察力に自信があります。話の真偽は、相手の目を見ればわかります」

タ「望むところです。会長たちのおっしゃる通り、俺たちは無実です！」

ハ「そうです！俺たちは一つてなんで顔そらすんですか？」

ア「あ、五十嵐さんって、男性恐怖症なの」

タ「さつきからさけられていたりしたのはそれか」

ア「そういえば、五十嵐さんの的には、御堂君のような女の子みたいな男の子ってどう

なの?」

：結局俺つてそう見られるのね。

力「え、あの、えーっと…」

五十嵐先輩は俺の方に手を伸ばす。だが震えているし、近づくことにそれは大きくな
る。

力「やつぱり無理——!!」

：俺つてどう反応すればいいの？男子と見られたことを喜ぶべき？悲しむべき？

力「ま、まあいいでしよう。今回は引率の不手際ということらしいので、この件にか
んしては不問にしましよう」

どうやら事情を察してくれたようだ。

力「ただし津田副会長と御堂総務は、女子生徒に手をだしたら覚悟してくださいね」

タ「しませんよ」

シ「そうだな。御堂はともかく、津田は攻めるより攻められる方が好きだからな」

力「不届き者——!!」

：すっごく変わった人だな。素直にそう思つた。まあいいや。

ハ「まあ、ああいう性格をした人からしたら、男子と外泊なんて不埒以外何でもない
んでしようね」

ス「そうね」

ア「そうかしら?」

タ「いや、あなたの意見は聞いてません」
ばつさり切つたな。

い
ま
す
ね

シ「そうか?」

ハ「そういうえば、男子校ではジャージ下ろしが流行つてゐるというもんなんあ」
男子校に行つた友達からの情報である。

ス「ずいぶんと子供じみしたことするわね……」

萩村が呆れたような声を出す。

シ「そうなのか。しかし、男子が入つてきたことで、今度は筆おろしが流行るかもし
れん」

ハ「俺が話題を出してあれですが、もう終わりません?」

また変なこと言つてゐる。

そ
う
思
つ
て
天
井
を
仰
ぐ
と、
ある
こと
に
気
が
付
いた。

ハ「あれ、蛍光灯切れかかつてますね」

シ「ん？あ、ホントだ」

ア「取り替えなきやね」

ナ「おーっす、生徒会役員共」

横島先生が乱入してきた。

ナ「どうしたんだ？」

ア「蛍光灯が切れているので、交換しようと思つてしているのですが

ス「でも、脚立がない以上、できなくないですかね」

この中で天井に背が届く人はいらない。まあいたらすぐいけど。

ナ「じゃあ津田が肩車して交換すればよくねえ？」

ス「となると、体重が軽い人がいいですね」

ア「軽い人…」

シ「軽い女…。横島先生お願ひします」

ナ「つて、意味合い変わつてね!?」

そしていろいろ言い始める横島先生。

タ（いつも思うんだけどさ）

タカトシが小声で俺に話しかけてきた。

ハ（何？）

タ（なんであの人生徒会の顧問になつたんだろうな?）

ハ（と/or うと?）

タ（自治組織の生徒会と言えど、顧問というのは指導員的なものだろう。なんでこの人が……）

ハ（…それはおそらく）

生徒会に所属する人たちを見る。

天草会長＝完璧人間

七条先輩＝優秀なお嬢様

萩村＝IQ180の帰国子女

タ（ああ、なるほど）

ハ（そういうことだ）

タ・ハ（必要ないからだ…）

ナ「なんだよ、その残念な人を見るような視線は。…興奮するだろう」

顔赤らめるな！

今日は柔道場に異様な緊張感が漂つっていた。柔道部のみんなは気合を入れて練習に臨んでいる。

それもそうだ。何しろ今日は、柔道部設立以来初となる他校との練習試合だ。そして

俺たち生徒会は応援に来ていた。

シ「三葉、応援に来たぞ」

ム「あ、会長。それにみんなも。ありがとうございます！」

ス「これ必勝のお守り。今日のために用意してきたの」

萩村がお守りを渡す。

ム「うわあ、感激!! ありがとう、スズちゃん!!」

ア「私も、今日のためにテルテル坊主たくさんつるしてきたよ」

ハ「それはいらないと思います」

というより、屋内なんだから関係ないと思う。

「いたつ！」

柔道部員から、悲鳴に近い声がした。

ム「どうしたの!?」

「ナナコが練習中に受け身を失敗して、手首がコキつて…」

ム「手がコキ!?」

シ「手〇キか!?」

シ「なら大丈夫だろう」

大丈夫じゃないよ。

タ「GO TO 保険室」

そして手をねん挫した柔道部員は、保健委員の手によつて保健室へと搬送された。た
だ困つたのは…。

ム「て、どうしよう!? ナナコがドクターストップじゃ欠員だー!! どうしよう!?」

それは困つた。今更相手に帰つてもらうのもあれだし、一人だけ試合をしないのもあ
れだろう。

ム「そうだ、ハルカ君、柔道着を着て!!」

ハ「え、なんで!?」

ム「ハルカ君つて、それなりに鍛えているらしいし、それに、私たちと同じ格好す
ば、男子だとわからない!!」

ハ「ほー。表へ出やがれ」

喧嘩売つてるのか、こいつ。

シ「仕方があるまい」

会長の、決断したような声がした。

シ「私が代わりに出よう!!」

ス「つて、着替え早つ!!」

ハ「というよりいつの間に!?」

全然わからなかつたぞ!!

タ「大丈夫ですか、会長。受け身も知らないのに」
シ「君は何を言つている」

もしかして、経験者?

シ「小説では受け身のキャラに共感をしているぞ」

ハ「何の小説だ!」

まあいろいろ言つたつて、もう相手校の人が来ちゃつたし、今更引けないか。

ちなみに相手校は一応県大会にも出場したことがあるほどの実力だ。∴本当に会長
大丈夫かな?

そして順番は、三葉が先鋒、会長が大将である。

「それでは、礼!」

「…………よろしくお願ひしまーす!!」

審判役の先生の号令で、お互に挨拶する。

ハ「あれ、畑さん」

周りを見渡した時、畑さんがいた。そばにカメラを持った人がいるところを見ると、
新聞部の取材だろう。

タ「新聞部も来てたんですね」

ラ「ええ。こういうのはネタになるからね」

やつぱり、校内新聞でもこういう話は盛り上がるのだろうか?

ラ「女子高生同士のくんずほぐれつ。マニアにはたまらないのよ」

ハ(ズ○ネタ!?)

もしかして、売るのか?!

「始め!!」

1回戦が始まる。三葉は相手に撲まれるも、そこから一本背負いを決め込む。

「一本!!」

ム「次!!」

ス「ねえ。点取り試合って何?」

ハ「5人の代表が順番に出て、3勝した方が勝ちつてルールだな」

ス「:じやあ次つて?」

タ「勝ち抜き戦だと思つてゐるのかな?」

ちなみに勝ち抜き戦は、勝つた方がそのまま残り、チーム全員が負けたらそのチームは負けつてルールである。

しばらくして。

ハ「現在は2勝2敗のイーブンです」

ス「…誰に説明しているの？」

ハ「いや、なんとなく」

ム「面白ない…」

いや、相手は県大会出場校だ。ここまで踏ん張つただけでもすごいと思うぞ。
シ「みんなよく頑張った。後は私に任せてくれ」

そういうて、会長が出場していく。…本当に大丈夫だろうか？
タ「俺たちは信じるしかないよ」

：「そうだな。今は会長を信じるしかない。

「始め！」

審判役の先生の合図で、試合が始まる。会長が組みかかり、押さえ込みをしようとす
るが、相手にかわされる。

今度は相手が投げた。これは…！

「有効！」

ダメだ。負けてしまう。

シ「ぬおー!!」

あ、会長が抜けた。今度こそ、相手を押さえ込む！！

「押さえ込み!!」

相手は必死に抜けようとする。だが会長はまだ抑えたままだ。これならば…!!

「一本、それまで!!」

30秒後、会長が一本を取った。

「「「勝つたあ!!」」」

柔道部全員で喜ぶ。もちろん、俺たち生徒会も。

ハ「よかつたですね。：押さえ込み方に疑問が残りますが」

ア「ほんとよかつたわ。この間貸した小説が役に立つて」

タ「黒幕あんたか!!」

何はどうあれ、試合終了!!

生徒会新聞

今日から衣替え。俺も夏服から冬服にしたが、10月になつてもまだ暑い日があつた
りする。ぶつちやけ、もうしばらく夏服でいたい。

ハ「おーい、タカトシー！」

俺は津田家の玄関からタカトシを呼ぶ。

タ「いやあ、ごめんごめん」

タカトシが玄関にやつてくる。ちゃんと冬服だつた。

コ「タカ兄、おはよー。あ、ハル兄もおはよー」

コトミが挨拶してきた。ところで…。

タ「お前それ夏服じやん。寝ぼけているのか？」

コ「え!？」

自分の格好を見るコトミ。

コ「や、やだなあ、ワザとだよ!! キヤラもドジつ娘に衣替えしたんだよ!!」

今日もコトミは愉快だな。

登校後、横島先生に捕まり、荷物運びを手伝わされる。

ナ「あー、眠たい。これから朝礼会議だつていうのにいかんな」
どうやら寝不足のようだ。

ナ「気合入れるか！」

そして頬をパンパンと少し強めに叩く。

ハ「目覚めました？」

ナ「うん。新しい快感に」

ハ「逃げよう」

俺は横島先生を置いていくと、事前に言っていた場所に荷物を置き、逃げるよう¹
その場を去つた。

生徒会室に入ると、会長たちがいた。七条先輩は掃除をしているようだ。

シ「アリアはきれい好きだな。埃一つなく、きれいなものだ」

ア「ありがとう。でも、あまりやりすぎると潔癖症って言われそうね」

シ「まあ、人間だらしがない部分があつてもいいだろう。私が得た情報だと、下着が
汚れている方が喜ばれるらしいぞ」

全然ろくな情報じやねーな。というよりどこからの情報だ？

ス「ふぐ…ん…」

萩村の力む声に首をそちらに向けると、棚にあるものを取ろうとして精一杯体を伸ば

しているのがわかつた。

ハ「手伝うか?」

ス「全然平氣!」

：あまり平氣そうに見えない。

とりあえず、なんとかとれたようだ。

ス「ふう。まつたく、この体じやいいことないわね」

まあ小さいいろいろ困ることもあるだろう。

放課後

ス「この体でも、結構いいところはあるわね!」

ハ「はあ?」

なんでも、タカトシと外を歩いていたら、ボールが萩村の頭上を通過して、タカトシに当たつたらしい。

ハ「…それは、まあよかつたな」

ちなみに俺の方は全くいいことがない。

電車に乗つたら痴漢をされるし、男に告白されるし、女装を強要されるし、男子トイレや更衣室に入つたら大騒ぎになるし…。

ス「…あんたってかなり苦労しているのね」

ハ 「いや、お前もだろう」

ス 「ええ。身長制限で引っかかるし、物は取れないし、補導されそうになるし……」

ハ・ス 「仲間だ!!」

俺たちは手を取り合っていた。

シ 「何やつているんだ、あの二人は」

ア 「さあ……」

タ 「よくわかりません」

どうせ部外者にはわからないことさ!!

翌日

七条先輩が泣いていた。どうやら小説を読んでいて、それに感動したようだ。

シ 「アリアは何を読んで感動したんだ?」

ア 「恋愛小説だよ。運命の赤い糸とか、あこがれるよね」

シ 「赤い糸か。そのようなものがあつたら、あそこから糸引いているつて、日常的に

言われるんだろうなあ」

タ 「ああ、そうですね」

ス・ハ 「(突っ込み放棄!?)」

ア「そういえば、津田君つて恋人いないの?」

タ「俺ですか? あいにくそういう人はいませんね」

ア「じゃあ、右手が恋人?」

ナ「左手かもしけないぞ」

タ「ねーよ」

つか、いつの間に横島先生いたんだ?

シ「な、ならば、口が恋人か!」

タ「一番ありえねーよ」

ハ「あのー、そろそろ本題入りません?」

このままじや終わりそうにないので、ここでストップをかける。

ナ「じゃあがんばつてね」

何しに来た!?

シ「実は、生徒会新聞を作ろうという話になつてな」

生徒会の活動内容やイベントの告知などといったことを伝えやすくするためらしい。

シ「もちろん、我々だけでは難しいので、新聞部にも協力を頼んでいる」

ラ「こんにちは」

本格的なだな。

ラ「写真でしたら、こんなこともあるうかとあなた方はたくさん撮つてありますので大丈夫です。ちなみにいくらで買います?」

ハ「何撮つた!?

というより、金をとるのか!?

ラ「今のは冗談よ」

⋮本当か?

ラ「おすすめなのは、ドアをくぐろうとしたとき上に頭をぶつけた津田君をうらやましそうに見つめる萩村さん」

ス「ちよつと!これじゃ私が身長にコンプレックスを抱いているみたいじゃないですか!?

⋮一応事実だと思うぞ。まあ記事にするのはだめだろうけど。

ラ「大丈夫。そういうと思って、コラツといたから」

この画像は、18禁です。

タ・ス「コラ——!!」

ハ「ま、まあとりあえず、レイアウトとかどうします?」
シ「なるべくみんなの興味をひかれるようなものがいいな」
タ「じゃあ、袋とじはどうです?」

ア 「袋とじって?」

ハ 「ページとページがくっついて、見られないようになつていてる雑誌です」

ア 「それつて、○○臭い○な本のこと?」

ハ 「それは違う理由でくつづいています」

ス 「まあとりあえず作つてみましよう」

そういうつて、パソコンを立ち上げる萩村。しばらく待つていると、骨格はできてきた
ようだ。さすが天才。

ス 「レイアウトは、これでどうです?」

シ 「んー。これがずれているな」

ス 「これですね」

シ 「あとこれも」

ス 「こうですか?」

シ 「あ、これもだな」

ス 「あんまり細かいと、ハゲますよ」

シ 「下の毛なら大歓迎だ」

ス 「あ、そうですか」

俺は新聞部から提供された写真を、七条先輩と選別する。

ハ「これはいいんじゃないですかね」

ア「そうね。あ、これなんかどう?」

ハ「え?」

それは、随分前に柔道部をお邪魔した時の画像だった。会長が柔道部員と組んでいる。見ると、会長は制服だから、下着がちらつと見えていた。

ア「これを乗せたら、シノちゃんのことがもつとよくわかつてもらえるかも」

ハ「いや、何をわからせる気ですか?」

下着を見せる気か!?

シ「アリア、それはやめてくれ!!」

そうだ、会長もガツンと言わないでー

シ「下の毛の処理が疎かになつてているだろうからな!!」

え、そつち?

ちなみにタカトシは短編小説を任されている。

ハ「浮かばない?」

タ「うん。まあそう簡単に浮かばないよ」

それもそうだな。

タ「まあ、ゆつくり考えていくよ」

ハ「でも明日までには一応書いておいた方がいいぞ」
発行予定日を考えると、下書きは明日か明後日ぐらいがいいだろう。

タ「わかった」

翌日

シ「津田、どうだ?」

タ「あんまり自信がないんですけど…」

シ「まあこういうのはあんまり気を張らずに書いた方がいいぞ。初めてだし、気持ちで書いてくればいいと思うぞ」
そういうつて読み始めた会長。

だが、5分もすると。

シ「うううううううう（泣）」

タ・ハ「「ええ!?」」

突然泣き出したぞ!!

シ「胸を打つ、いい話じやないか」

ア「どれどれ」

5分後

ア「ううううううう（泣）」

またか!?

ス「二人とも大げさですよ…」

3分後

ス「うううううううう（泣）」

ハ「つて、萩村もか!?」

そんなに感動できるのか!?

ハ「どういうやつなんだ?」

タ「ああ、これだよ」

その話は、簡単に言うと、街で捨てられた子猫と、それを拾ったOLの話だった。

ハ「うん、なかなか感動できるな」

タ「そうかなあ」

ハ「結構文才があるんじやないか?」

タ「いや、まさか…」

タカトシはそういうが、実際にあると思うぞ。

最終的な調整や校正などの作業を行い、やつと発行されることになった。最初は数枚しか持つて行ってくれなかつたが、その後一気になくなつた。それほど好評だつたのだ。

タ「しかし、俺に文才があつたなんて、思つてもみなかつたな」

ハ「そうだな。というより、長年一緒にいたけど全然気が付かなかつたぜ」

周りを見ると、生徒たち（主に女子）が、生徒会新聞をもつて号泣していた。

タ「でも、周りがあんな人たちだつたから、少しは自信につながつたかも」

ハ「それはいいことだな」

周りの人たちの個性が強すぎるせいで圧倒されっぱなしだつたからなあ。

力「津田副会長：」

前を見ると、微妙に間合いを開けて、五十嵐先輩がこちらを、というよりタカトシを見ていた。

力「あなたが女を泣かせまくつているという噂が立っています」

タ「ええ!?」

俺は周りを見る。うん、確かに。

ハ「泣かせまくつて いるな」

タ「ちよつと待て！ ハルカもそういうか!?」

力「津田副会長は、私の半径3m以内には近づかないでください」

タ「ええ!?」

体育祭

校庭にはたくさんの生徒が作業をしていた。

ラインを引く生徒、杭を打つ生徒、さまざまである。それもそうだ。何しろ今は…。
シ「体育祭の準備は忙しいな」

明日行われる体育祭の準備日なのだから。

シ「さて、運び出すぞ」

俺たち生徒会を含めた準備に携わる人々は、体育倉庫の前に立っていた。ここから、
体育祭に使う備品を運び出すのだ。

「すいません、これはどこに運べば?」

タ「ああ、ロープは運営本部横に置いてください」

いろいろな生徒が入り混じって大変なことになつていた。

ア「それでもいろいろな旗があるわね」

会長たちが万国旗をもつて話している。確かにいろいろあるな。見たことがあるものから、見ないものまで。

シ「これはどこのだ?」

ス「ベネズエラ」

ア「じゃあこれはどこ?」

ス「ノルウェー」

タ「じゃ、これは?」

ス「ガテマラ」

タ「詳しいな、萩村」

ス「これくらい常識よ」

すると変なものまでぶら下げられていた。

ア「ナップキンね、これは」

シ「この様子からして3日目だな」

ハ「なんであるの?」

というより誰がぶら下げた?

各員に指示を出しながら準備を進めていく。

ア「あ～れ～!!」

シ「そうしたんだ、アリア!?」

見てみると、七条先輩に綱引きで使うロープが絡まっていた。

ナ「これじや縛り方緩いわよ」

…どうやつてそうなつたんだ?

とりあえず、七条先輩を解放し、さらに準備を進めていく。

ハ「会長、玉ころがしの玉はどうします?」

ナ「玉ころがしだつて!? それつて、18禁じやないの!?」

…あんた出てけ!!

準備はいろいろあつたが、なんとか終わらせ、翌日、無事に開幕を迎えることができた。

シ「宣誓、我々はスポーツマンシップに乗つ取り、正々堂々戦うことを誓います!!」

ア「今思つたんだけど、正々堂々じやないスポーツマンシップつてなんだろうね?」

タ「ドーピングとかじやないですか?」

ア「そうだね。○な気分でスポーツに臨むのは不純だもんね!」

ハ「いや、そういう薬じやないと思います」

こうして体育祭は始まつた。

最初は徒競走だ。ちなみにスタートは生徒会のメンバーがいるテントの前である。

「位置について、ヨーイ…」

パン!

一斉に駆け出す生徒たち。その真剣な表情は、応援したくなるな。

「あ、あの、まだ私鳴らしてないんだけど…！」

「「えつ!?」」

え、でも今確かに…。

ナ「ごめんごめん。私がスパンキングの練習していただけ」

シ「つまみ出す」

どつかへ放り出してください。

玉入れになつた。今回は1年生のみで2クラス1チームを組み、3チームで競わせる。これは男子の数のばらつきを少なくさせるためだ。

俺たちは萩村のいるクラスと一緒にになつた。

ハ「とりや」

ス「せい」

地面に落ちている玉を拾つては、それをカゴに入れていく。

「「あつ：」」

声のした方を見てみると、タカトシと三葉が同じ玉を拾おうとしていたようだ。

ム「ご、ごめん、タカトシ君」

タ「あ、いや」

：そこだけ空間がピンクに見える。

ス「：玉入れで何やつているんだ、こいつら」

ハ「ラブコメする暇あるなら投げろ」

ふと見ると、周りの視線（主に男子）がきつくなっているように見える。

タカトシ side

借り物競争になつた。俺はクラス席から応援している。

ス「津田、ちょっと来て」

タ「え、俺？」

そういうつて萩村に連れて行かれる俺たち。

タ「なあ、俺なんて書いてあつたんだ？」

ス「目標にしている人つて書いてあつた」

タ「目標？」

ス「あんたこの間自販機であんこ茶買つてたでしょ。あれ、自力で買うのが私の目標」

タ「俺つて安いな」

ちなみにこれを今回の審査員であるハルカに見せたとき、納得したような目で見られ
た。

ア「津田君、ちょっと来てくれる」

タ「え、また?」

今度は七条先輩に連れて行かれる。

ス「なんて書いてあつたんです?」

ア「え、ペットにしたい動物」

ダツ

ア「待て待て!」

ハ「なんで逆走しているんだ?」

周りが何か言つているが、その前に逃げなきや!!
だがすぐに捕まり、それをハルカに見せたところ、同情するような眼で見られた。

シ「津田、ちよつと来い」

タ「またか?」

ム「人気者だね」

三葉に見送られながら会長に引きずられていく俺。そして—

【トップは生徒会長の天草シノさんです!】

会長がトップでゴールした。

タ「なんて書いてあつたんですか?」

シ「えつ!?」

：なんだかあわてている。きっとあまり知られたくないのだろう。

タ「別にいいんですけど」

シ「な、なら教えて？」

：会長はハルカのもとへ行つてしまつた。というよりなんで不機嫌そうだつたんだ

？

ラ「フラグなのか？」

畠さんが俺に向かつて何か言うか、意味が分からなかつた。

ちなみにこの後、ハルカが俺のことを生暖かい目で見ていた。本当によくわからない

借り物競争だつた。

関係ない話だが、このとき会長と一緒にだつたはずの五十嵐さんは棄権した。理由は、借り物が男子生徒だつたかららしい。

タカトシ side out

コ「タカ兄、ハル兄、応援に来たよー」

コトミが顔を出してきた。

ハ「おい、来たのか」

タ「おいおい、受験生だろう」

コ「受験勉強の合間の息抜きだよ」

タ「お前息抜きの間に勉強しているだろう」

コ「あ、抜くといつても別に○○○○のことじやないよ」

ハ「そんなもん当たり前だろう」

コトミは通常運転だった。

ア「あれ、津田君、御堂君、その子は？」

七条先輩がコトミについて聞いてくる。そういえば七条先輩はまだコトミに会ったことがなかつたな。

タ「ああ、妹のコトミです」

コ「兄がいつもお世話になつています」

ここで礼儀正しく挨拶するコトミ。

ア「へー、そうなの。兄妹だけあつて似ているわね」

コ「そうですね。まだ性体験もまだですし」

ア「そういう意味じやないよ。第一、処女と童貞は同列にはできないよ」

タ「何この羞恥プレイ」

俺入つていなくてよかつた。

ケ「次の100m走でタカトシが、その次の200mハードルでハルカが1位を取れば、ウチのクラスがトップだ」

ム「頑張れ!!」

ハ「プレッシャーかけるなあ」

とはいえ、本気を出してみる気になれた。

コ「クラウチングスタートでスタートダッシュを狙えばできると思うよ」

タ「どうやるの?」

これつて、確かにオリンピック選手とかがやつてているやつだっけ?

コ「まず、服従のポーズをとります」

…ん?

コ「次に、お尻を突き出す」

…ちょっと待て。

コ「そして、たまりにたまつたエネルギーを…!!」

ハ「あーもう説明いいや」

真面目な話かと思つたらこれだよ。…まあもとから当てにしてなかつたけど。

コ「何か失礼なことを思われたような」

ハ「気のせいさ!!」

シ「さて、次は最後の競技であるサークル対抗リレーだ」

会長は俺たちを前にしてそう口にする。

シ「私たちも生徒会チームとして参加するぞ」

「「「おー!!」」」

ア「そうなると、作戦を考えなきやね」

タ「リレーで重要なのは位置取りですかね」

すると会長と七条先輩はタカトシの股のあたりを見始めた。

シ「そうなのか…」

ア「ブリーフなら固定できそうだね」

ハ「あんたちはもう少ししつかり考えてほしい」

なんの位置だよ。

【最後はサークル対抗リレーです。みなさん頑張ってください。それでは出場チームの紹介です】

【まずは、風紀委員会】

わー!!

【続いて生物部】

わー!!

【続いて新聞部】

わー!!

【そしてせ…学園の種馬】

タ「ちよつとまでえ!!」

なんだよ、生徒会の紹介!! ちなみにトップバッターはタカトシだ。

「よーい…」

パン!!

スターターの合図とともに一斉に駆け出す。

【トップに出たのは風紀委員と種馬…もとい生徒会だ!!】

だから生徒会の紹介はなんなんだよ!!

ラ「シャツターチャンス!!」

タ「おい!!」

そしてなぜか新聞部のトップバッターである畠さんがリレーそっちのけでタカトシを撮り始める。何やつているんだ?

第2走者は天草会長だ。すでにバトンを渡す位置に第2走者は並んでいた。

あれ、会長の隣にいるのは五十嵐先輩じやないか。また会長と一緒にになるのか。

タ「会長!!」

あ、タカトシが会長にバトンを渡そうと一

カ「いや——!!」

「委員長、どこへ!?」

タ「あ、どうぞ」

シ「おお、ありがとう」

：もしかしてタカトシから逃げたのか？その後、五十嵐先輩は戻ってきたが、大きく離されてしまった。まあそつちはいいや。それにしても会長つて運動神経がいいとは聞いていたけど、本当に速いな。

ドサツ

ハ「ん？」

音のした方を見ると、畠さんが手を地につけて泣いていた。

ハ「どうしましたか？」

ラ「…あつちの方が売れた」

そういうつて畠さんが指をさす。そこには、会長が走っていた。

ハ「泣くことかよ」

ほつとこう。

会長は七条先輩にバトンを渡す。いいトコのお嬢様だから大丈夫か心配だつたけど、走りを見ているとそれほど心配にはならなかつた。ただほかの選手が速いので追い抜かされそうになつてゐるが。

ラ「…乳搗れもあつたかあ」

ハ「いちいち泣くな!!」

うつとおしいわ!!

タ「萩村、頼むぞ」

ス「ええ。適當にやるわ」

タ「適當はないだろう。アンカーのハルカにつなげなきやいけないんだから」

ス「適當でいいわよ」

だが、萩村は速かつた。ほかの選手をぐいぐい抜いていく。

ス「あとは任せたわ!!」

ハ「任せとけ!!」

ここまで頑張つてくれたんだ。ここで負けるわけにはいかない!!そして—
タ「痛たたたつ」

タカトシがいたそうである。筋肉痛だろうか?

タ「一日中動いていたから、足がパンパンですよ」

シ「そうだな」

ナ「痛たたたつ」

見ると横島先生も痛そだ。

ハ 「横島先生も、どこか痛めたんですか？」

ナ 「ああ、下半身を。やつぱり自分に合ったサイズでやらないとダメね」

タ 「あんた今日何してた」

この人はもうほつとこう。

シ 「しかし、ハルカがあそこでさうに引き離すとは思わなかつたな」

そう、俺は一気に最高速度までもつて行つて、抜くどころか逆に離して1位になつた
のだ。

ハ 「あはは。どうも：あれ？」

なんだろう。七条先輩が万国旗で縛られているように見える。

ア 「うわーん。片づけしていたら、こうなつちやつた」

どうやつたらそうなるの？

シ 「さすがアリア！ここまで上手にやるとは!!」

もうこの人もほつとこう。

リアルメイド

体育祭から一夜明けた今日は、普通に授業である。というより、なんで体育祭を日曜日にするかな？体のあちこちが痛いぞ。

体中が悲鳴を上げる中、なんとか学校に登校し、授業や生徒会の仕事をこなしていくのであった。

ス「津田、御堂、何ちゃんたら歩いているのよ」

タ「いや、昨日の体育祭のせいで筋肉痛ひどくて」

ハ「俺も同じく。それにしても萩村つてそういうのないの？」

ス「え、私？鍛えているからそういうのないわ」

ハ「へー。どうやつて？」

ス「普段からつま先立ちしている」

タ「気づかなかつた!!」

俺もだ!!

3人で生徒会室に向かうと、七条先輩と出くわした。

タ「あれ、その花どうしたんです？」

ア「あ、これ。緑化委員会のコからもらつたの。飾ろうと思つて」
ス「でも花瓶がないですよ」

生徒会室には花瓶がない。まあ当たり前かもしれないが。

ア「じゃあ、あれで代用しましょう」

ハ「あれ？」

ハ「なぜ花瓶はないのにオ○○○ルはあるんだ？」

素直にそう思つた。

ラ「どうも。あら、素敵ですね」

畠さんが入つてきたと思ったら、花が活けてあるそれを見て感想を述べた。

シ「その感想、本氣で思つています？」

シ「ところで、どういう用件で来たんだ？」

会長が畠さんにたずねた。

ラ「今日は、今月号の桜才新聞を届けに参りました。注目の記事は、天草会長の支持

率が98%という記事ですね」

タ「おお」

ス「会長、すごいですね」

ア「さすがシノちゃん」

シ「いや、これはみんなの協力のおかげだ」
いや、これは本当に大したものだと思う。

ラ「いえ、これはすごい結果ですよ。ちなみに主な理由は「自分でなければだれでもいい」ですが」

…え？

ラ「空気読んでそのあたりのことは書いてませんね」

ハ「あんたが空気読め」

というより今の感動を返せ！

ある日のこと

シ「津田、その指どうしたんだ？」

会長がタカトシの指に巻かれた包帯をみて聞く。ちなみにその件については俺も知っている。

タ「これは昨日割った皿で指を切っちゃって」

ハ「そのあと血が勢いよく出て大変だつたよな」

シ「ひー」

あれ、会長？

シ「痛い話は苦手だ!!」

まあ痛い話が好きだという人はあまりいないだろう。

シ「あれ、横島先生にあるそのミミズ腫れはどうしたんですか？」

横島先生の手の甲あたりにはミミズ腫れができていた。

ナ「ああ。これは鞭のあと」

シ「そ、それって、痛いんですか!?」

興味津々で横島先生に聞く会長。

ナ「うん。まあ（以下強制的に自主規制）」

聞きっぱなしだった。：いたよ、痛い話が好きな人。

今日は生徒会のメンバーが七条先輩の家に招待された。

キンコーン

チャイムを鳴らすと、七条先輩が出迎えてくれた。

ア「いらっしゃい、待つてたよ」

シ「今日はお招きありがとう、アリア」

ア「いえいえ。でも随分遅かつたね。ここまで迷つた？」

ハ「ええ。七条先輩の家の場所はわかつたんですが、敷地に入つてから迷いました」

広い家の中に、いくつか道が分かれていたから、気が付くと変な場所に出ていたりした（県立公園にあるような大きな池まであった）。

とりあえず、中にお邪魔させてもらうことにした。

家の中はとても広かつた。まずそいつた感想が出てきた。広いロビー（？）の中には様々な調度品があるが、それが趣味の悪くないよう配してある。

ロビーからは大きな階段があり、それが途中で分かれるようになつていて。漫画とかに出てくる豪邸のイメージそのままだ。

上を見上げたら、シャンデリアがつるされていて。：シャンデリアなんて初めて見な。

タ「うわあ：」

タカトシが思わずため息をつく。

ス「広いわね：」

でもここまで広いと掃除とか大変だろうな。掃除婦とか、家政婦とかがいるのだろうか？いや、この屋敷の雰囲気からしてメイドだな。

ア「出島さん」

「はい、お嬢様」

俺たちの後ろには女人がいた。メイド服を着ているから、メイドなんだろう。：本当にいたとは。

タ「リアルメイド：」

シ「いるところにはいるんだなあ」

ア「じゃあ、私の部屋に案内して」

サヤカ（以下サ）「はい、お嬢様」

ア「私はお花摘みに」

サ「お気をつけて」

：その力ギは何？

俺たちは出島さんの案内で屋敷の中を歩いていく。しかし本当にひろいな。広い廊下からは、いくつもの部屋のドアが見える。用途別なんだろうか？また、廊下にもいくつか調度品が飾られていた。どれも高いんだろうなあ…。

そんな廊下を出島さんについていく。それにしても先輩の部屋つてこんなに遠く—

サ「迷いました」

ええ…。

サ「広いですね、このお屋敷」

いや、まあ広いけどさ。

サ「すみません。実はこの屋敷に来たのはゞく最近で。正確にはこの仕事も最近始め

たばかりなんです」

タ「そうなんですか」

ア「おーい、こつちだよ」

七条先輩が俺たちに気づいて呼んでくれる。助かつたけど、本当にこの辺りだったのか。

サ「以前は開発関係の仕事をしておりましたので」

開発関係…。技術者だったのか？

ハ「なんの開発をしていたんですか？」

サ「○門とか」

⋮⋮⋮⋮⋮

ハ「学校ですか？」

サ「いえ、別のほうです」

⋮主も主なら、従者も従者だった。

その主に案内され、やつと七条先輩の部屋に到着した。

ア「ここが私の部屋だよ」

ス「でかっ!!」

個人の部屋にしては広すぎる部屋。ここがこの屋敷のホールですと言われてもうなずいてしまうかもしれない。

そんな広い部屋の中に、応接間とかで使うようなテーブルとイスがある。

シ「お、こここの窓から大きな木が見えるな」

ア「あの木は、両親にとつて思い出の木なんだって」「思い出の木か…。

ス「察するに、あそこでプロポーズされたんですね」

なるほど。それは思い出深いな。そして自分たちの子供にもそんな思い出があるこの場所を見る事ができるようにと、この場所にしたのかもしれない。

ア「惜しいね」

え、惜しいの?

ア「正解は、あそこで○○○されて、私が生まれました」

惜しいの、それ!?

サ「皆様、お茶をご用意しました」

ア「ありがとう」

出島さんがカートを押して部屋に入ってきた。

七条先輩の部屋にあつたイスに座り、お茶とお菓子をいただく。うまい!

サ「あ!!」

ポツトをもつて歩いていた出島さんがいきなり驚いたような声をだした。

サ「すみませんお嬢様。コンタクトを落としてしまいました、ドジっ子のことく」

：最後何か変な言葉があつた気がする。

ア「あらあら」

シ「みんなで探そう」

そして俺たちは床を這つてコンタクトを探す。小さくて透明なのでなかなか見つからない。

ア「あつた？」

シ「いや、ちぢれ毛は3本ほど見つけたが」

ア「あつ!?」

タ「必死で探せよ」

コンタクトはどこだろう…。

その後、コンタクトは萩村が見つけた。

ボーンボーン

ア「あら、もうこんな時間なのね」

ゲームをしていたのだが、時計の鐘の音で見てみると、もう6時だった。

シ「なら、私たちはお暇しようか」

ア「あら、ご飯食べていいのに」

シ「いや、そこまでお世話になるのは…」

ア「いいのよ。今日はみんなのためにめつたに食べられないごちそうを用意したんだから」

そこまで言われると帰りにくくなる。せっかく用意してくれたのにそれを断るのはまずいだろう。

めつたに食べられないごちそうって…なんだろう?

見ればほかの3人も妄想に浸っていた。

サ「お嬢様、お食事をお持ちしました」

ア「ありがとうございます」

そして出されたのは…カップめん。すでに出来上がっていたのでもう食べられる状態だつた。七条先輩はとてもおいしそうな顔でラーメンをすすつっている。

タ「金持ちつて、次元違うな」

「「「うん」「」」

シ「今日はごちそうさまだつた。お邪魔したな」

ア「いいの。また来てね」

夕飯をごちそうになつた後、帰宅する俺たち。玄関まで七条先輩と出島さんが送りに来てくれた。

ア「出島さん、皆を門まで送つてあげて」

サ「はい、お嬢様」

ハ「大丈夫なんですか?」

さつきのこと不安しかない。

サ「失礼な。自分が仕える屋敷で迷子になるとでも?」
いや、あんたさつき迷つてたから!!

タ「うん」

ス「実際迷つてた」

それはみんなも同意見のようだ。

サ「自分の住む家の庭ぐらい目隠しで歩けます」

ならば家の中もそれくらいできるようにしてほしい。

サ「毎晩目隠しで散歩プレイしてますから」

ハ「自力で帰らせていただきます」

翌日

ハ「今日は会議があるから、準備しないとな」

今さらであるが、俺は総務である。総務は、ぶつちやけ行つてしまえば総務全般だ。
雑務はいつも会長たちと一緒にやるので、とくに仕事がないように見えるが、じつは結構ある。

会議に使う書類をコピーしたりまとめたりするのは主に俺の仕事だ。だが別に俺は苦痛だと思つていらない。逆に、こういう縁の下からやるような仕事が好きだつたりする。

ス「あ、もう来てたんだ」

萩村が生徒会室に入つてきた。

ハ「まあね。今日の会議の準備とか、いろいろ」

ス「へー。手伝う?」

ハ「いや、別に。それより萩村。これ4時半からじやなかつたか?」

ホワイトボードには『本日16時より会議室で部活動予算会議』と書かれていた。

ス「あ、いけない。うつかりしてたわ」

あわてて書き直す萩村。

ス「それについても、よく私が書いたつてわかつたわね」

：言えない。文字の位置が低いから、この辺りに書くのは萩村だろうと思つていたな
んて。

ス「なんか失礼なこと考えていたよなあ」

ハ「き、気のせいだよ。アハハハハ：」

ガチャ

ア「あ、二人とももう来てたんだ」

七条先輩が入ってきた。正直助かつた。

ス「会長はどうされました?」

ア「横島先生に用があるみたい。それより」

七条先輩が鞄から容器を取り出した。

ア「今日調理実習で、わさび入りクツキーっていうの作ってみたんだけど、食べてみる?」

わさび入りか。意外とおいしいかもしれない。

ハ「じゃあ一つ」

食べてみると、クツキーの甘さとわさびのつんとした辛さが意外と相性があつた。

ハ「結構おいしいですね」

ア「そう、ありがとうございます」

ガチャ

タ「今来ました」

ア「あ、津田君。このわさび入りクツキー食べてみない?」

七条先輩がタカトシにも進める。

タ「大丈夫ですか?」

ちよつと警戒しているようだ。

ア「いいから食べてみて。幼馴染のヒロインが、非処女だった感覚で」
その感覚はよくわかりません。

文化祭

秋も深まってきたころ。桜才学園最大の行事が、もうすぐ行われようとしていた。

シ「明日はいよいよ桜才祭だな!!」

そう、文化祭である。

ア「秋の一大行事だから、皆胸が躍るね!!」

シ「踊るわけがない!!」

え、会長って楽しみじゃないの？てつきりもうすでに夜も眠れないかと…つて、そつちの意味か。

生徒会として校内を見回る生徒会。周りを見るとみんな文化祭の準備に明け暮れていた。

ハ「こうしてみると高校の文化祭つて、中学の時より活発だよなあ」
中学校はそれほど大したことしなかったからなあ。

タ「そうだな」

ス「でも文化祭つて子供だましのイベントじゃない」

：萩村、そんなこと言うのか。

ム「あ、生徒会の皆さん!!」

聞き覚えのある声に見てみると、三葉がポスターを貼っていた。柔道部のポスターらしい。

ム「今度の文化祭で、柔道部は招待試合することになったので、応援よろしくお願ひします」

シ「ああ、応援しているぞ」

ア「頑張つてね」

ス「お守り持つてこようか?」

招待試合か。…本当に部設立1年たつていないのでどうか?

タ「ところで、どこと試合するの?」

ム「異種格闘技です!!」

ポスターには、『桜才柔道部 vs 英陵空手部』と書かれていた。

ム「盛り上げて、部員増加だよ!!」

ハ「：無事帰つてこいよ」

死闘にならなければいいけど…。

七条先輩と津田は先に生徒会室に戻り、会長と俺と萩村で見回つていた。

ス「にわかに活氣づいてきたわね」

ハ「明日だしな。文化祭」

シ「みんな期待に胸が膨らむのだ：ハツ!!」

突然会長はキヨロキヨロしだした。どうしたのだろうか？

シ「そうだよなあ。胸が膨らむわけないもんなんア。アハハハハ…」

：会長、気分がハイになつておかしくなつたのだろうか？

ス「そうですね…」

ハ「つて萩村まで!?」

本当にどうしたんだ、この人たち!!

ハ「ま、まあ一度生徒会室に戻りましょう」

俺の一声に、生徒会室に戻る俺たち。すると中から声がした。

ア『お手』

タ『ワンワン』

ア『ちんちん』

タ『ワンワンワン』

シ「…津田は何やつているんだ？」

ス「…もしかして、七条先輩と」

ハ「…それはない。…と思いたい」

でもなんで犬の泣き声がやけくそ気味なのだろうか？

結局、タカトシが、七条先輩が出演する劇の練習に付き合っているだけだった。…よ
かつた。

シ「そういえば、津田とかのクラスは何をやるんだ？」

突然会長が聞いてきた。

タ「喫茶店ですよ」

ス「私のクラスは休憩所をやります」

ア「そうなんだ。遊びに行つてもいい？」

ハ「断固拒否します」

俺は来ないよう釘を刺す。

シ「なんでだ御堂。行つてはいけない理由もあるのか？」

ハ「……強いて言うなら、男の尊厳の問題です」

シ「何言つてるんだ？」

翌日・文化祭当日

シ「そういうことか…」

ハ「来ないでつて言つたのに……」

俺はウエイトレスの格好で会長たちの接客をしていた。…屈辱的だ、海の時以上に。

ス「…氣の毒ね」

ハ「…俺だつて嫌だつたんだよ」

どうして女装しなければいけなかつたんだ…。しかも…

「なあ。かわいくないか、あの娘」

「早く接客してくれないかなあ」

「…このように男子に人気だつたりする。

「…御堂君つて、本当に男の子？」

「…男の子に負けるなんて、なんか悔しい」

そして同じクラスの女子からは羨望やら嫉妬やらの視線を浴び続ける。

タ「あはは…。ドンマイ」

タカトシが苦笑いしながら慰めてくれるが、いつそ殺してほしい…。

ア「でも、似合うわねえ」

シ「ああ。十分女子で通じる」

ス「そうですね。違和感ないですし」

3人カラノ、追加攻撃ガヤツテキタ。 ハルカハ300ノダメージヲ負ツタ。

ハ「…orz」

…どうか知り合いに遭遇しませんように!!

だがその願いはかなわず、コトミにまづ見つかってしまった。やつと（生き地獄から）解放された。とりあえず気持ちを切り替え、俺たちは風紀に反した催しがないか見回りをすることになつていて。それは風紀委員の仕事じやないのか？という質問はあるだろうが、風紀委員もクラスや部活の催しがあるため、風紀委員だけでは限界なのだ。

サ「失礼します」

生徒会室で待つていると、七条家のメイド、出島さんが入つてきた。

サ「演劇に使うメイド服をお持ちしました」

ア「ありがとうございます」

ハ「でも出島さん、着ているじゃないですか」

そう、出島さんはいつのもメイド服を着ていた。見たところ、持つてきている様子はない。

サ「大丈夫です。全裸で帰りますから」

タ「全然大丈夫じゃないでーす」

ハ「というより、服貸します」

いそいで演劇部に行つて、使わないシャツとズボンを調達することで何とか事なきを得たのであつた。

ナ「よお生徒会役員共。ん？」

いきなり入ってきた横島先生が、出島さんに気が付いた。

ア「うちの顧問の横島先生よ」

サ「そうでしたか。いつもお嬢様がお世話になつております」

ナ「いえいえ」

出島さんの模範的な挨拶に、軽く答える横島先生。⋮というより。

タ「え？」

ハ「お世話？」

ア「まあ：お世話になつています」

ナ「なんだよ、その不満そうな顔は」

いや、普段何もしていないうなもんじやん。というよりしてないか。

シ「みんな、忙しい中ご苦労だな」

タ「あ、会長」

シ「これから、津田、萩村、御堂の3人で班を作つて見回つてくれ。私はアリアと行くから」

ハ「わかりました」

そして二手に分かれる俺たち。

タ 「最初はどこだっけ?」

ハ 「えーと…3—Aのお化け屋敷…あ、ここだ」
いつの間にかついていた。

タ 「あれ、萩村、行きすぎだよ」

みると萩村がそのまま過ぎ去ろうとしていた。

ス 「あ、ああ!! 私、身長が低いから見えなかつたわ」

ハ 「…そんなにいやなの? その話題に触れるほど」

もういろいろ投げ出してないか?

しかし仕事なので逃げるわけにも、逃がすわけにもいかず、結局みんなで入った。

タ 「じゃあ非常口の確保とかは…」

タカトシが質問しているので、ぶつちやけ俺と萩村は暇だ。しかし萩村は怖がつているようだ。

ハ (…まあ、ここで何か言つてもダメだろうな)

ペリペリペリ

何かはがすような音が聞こえた。何の音かと思つてみてみると、そこには、ガムティーで口をふさいだ萩村が。

タ 「じゃあ二人とも行こうかー」

そしてタカトシが俺たちに声をかけたとき萩村を見た。
思わず絶句した。

ス「ん————!!」

ハ「頑張っているなあ」

というより、そこまでするほどなのだろうか?
お化け屋敷を抜け、次の見回りに向かう。

ハ「えーっと、今度は3—Cの喫茶店…お?」

そこでは、五十嵐先輩がテーブル（男子が座っている）の上にあるカップに向けて、離れたところから注いでいる様子だつた。というより見たところ5メートルぐらい離れているぞ!!

ハ「…ここ、芸を見せるところだっけ?」

ス「…違うと思うけど、すごいわね」

タ「…頑張っているなあ」

ちなみにこれのおかげか、3—Bの喫茶店はたくさん人が集まつたとか。

七条先輩の出演する劇がもうすぐだと言うので、体育館に向かつた。楽屋となつているステージ裏では、七条先輩は出島さんが持つてきたメイド服を着ている。
シ「もうすぐ本番だな」

ア「もう胸がドキドキするよー」

やつぱりこういう場は緊張するのだろうか?

シ「ふむ……」

すると会長はなぜか七条先輩の胸のあたりに手をもつていく。

シ「胸が邪魔で鼓動が聞こえないじゃないか！」

ア「あらあら、ごめんなさい」

⋮泣ける!!

ア「いってらっしゃいませ、奥様」

ア「お嬢様、よろしければわたくしが相手になりますよ」

ア「ではこちらをどうぞ」

七条先輩の出演する劇は、お金持ちの家の中の話らしい。

タ「七条先輩、演技上手だな」

ハ「演劇でも嗜んでいたのかな？」

七条先輩はその家のメイドになりきっていた。

シ「DVDで研究したらしいぞ」

タ「あ、なるほど」

結構努力家なんだな。

シ「登場人物が○○○○をいれて接客をするものだつたらしい」

ハ「実際にやつてねーだろうな」

生徒会室では、出島さんが迎えてくれた。

サ「素晴らしい演技でした、お嬢様」

ア「ありがとう。それとはい、メイド服」

そういうつて、さつきまで來ていたメイド服を返す七条先輩。

サ「では早速着替えます」

タ「なんでここで?」

ア「一度クリーニングした方がいいと思うけど…」

とりあえず、ここで着替えるのはやめてほしい。…下手に誰かに見られたら、今度こそ女にされてしまう!!

サ「メイドの私服はメイド服ですから」

そういう意識みたいなものがあるのだろうか?…というより予備持つて来いよ。

サ「それに」

タ「それに?」

サ「お嬢様の使用済みはそそります」

そういうつてクンクンかぎ始める…て!?

ハ「やっぱりあんたそつち系!?」
なんとなく想像していたけどさ!!

また生徒会のメンバーで見回る。今度は各自で行動している。

するとチョコバナナの屋台があつた。そこで横島先生がチョコバナナを買つていた。
ナ「む!？」

ハ「どうしたんですか?」

思つた以上においしかつたのだろうか?

ナ「おかしい!!久しぶりに食べたはずなのに、最近口にしたような…!!」

ハ「じゃ、口にしたんじやね」

というより、そのチョコバナナを前後に振る動きをまずやめてください。

次にアイスキンディの屋台があつた。そこで出島さんがアイスキンディを買つ
ていた。

サ「む」

咥えた途端、泣き出す出島さん。

ハ「そんなにおいしいんですか?」

サ「いえ、最近ごぶさたしていまして」

ハ「触れなければよかつた」

あとその前後に振る動きを止めてください。

タ「あ、ハルカ」

呼ばれて前を見ると、タカトシと会長がいた。

ハ「よ、タカトシ。会長もお疲れ様です」

シ「うむ。そつちはどうだつた?」

ハ「特にありませんでしたね」

さつきの二人のことは話さなくともいいだろう。

ラ「天草会長。現在ミスコンの参加者を募集しているんですが、いかがでしょうか?」
へえ、ミスコンなんてあるんだ。

タ「水着でやるみたいですね」

⋮今11月だぞ。

シ「わ、私にそういうのは無理だ!!」

ラ「大丈夫ですよ。会長にポロリとか期待していませんから」

⋮そつちの期待は誰もしていないと思うぞ。

ラ「あ、御堂君やつてみる?」

ハ「俺男なんですが」

ラ「ははは、大丈夫よ。それに御堂君ならポロリが期待できるし」

ハ「え!?」

なに、ポロリって!?

ラ「だつてほら」

そう言つて、俺の股を見てくる畠さん。

タ「ここは怒つていいと思うぞ」

そんなこんなもあつたが、やつと文化祭も終わつた。あとは後夜祭だけである。

ハ「…疲れた」

高校の文化祭がここまで疲れるとは思わなかつた。

ハ（でも、まあいい思い出にはなつたか）

音楽が流れ始めた。これからフオークダンスが始まる。まあ相手がいない俺には全く関係は…。

「おい、あの彼女誘おうぜ」

「バカ言うな。相手がいるに決まつているだろう」

「でもほら。手持無沙汰つて感じだぜ」

「あの生徒会副会長だつて会長と踊つているんだ。俺たちだつてそういうことがあつてもいいだろう」

…どうやら静かに休める時はまだ来ないらしい。なんだか男子から狙われているの

は気のせいではないだろう。つーか制服でわかつてほしい。

とりあえず逃げなければ!!

：それにしてもタカトシの奴、いつの間に会長を誘ったんだ？

教師との背徳恋愛

タ「あつはつはつはつはつはつは!!今更このネタはないよ」

ハ「確かに。アハハハハ」

俺は隣の津田家に遊びに来ていた。今はタカトシが買った漫画を読んでいる。

ガチャ

コ「タカ兄、ハル兄」

コトミが入ってきた。何かあつたのだろうか?

コ「お願ひ、勉強しているところ見てて」

手を合わせてお願ひしてきた。

タ「見るだけでいいのか?」

ハ「教えなくて平氣か?」

コ「うん、なんというか：人に見られた方が興奮するから」

ハ「今何の勉強してるの!?」

とりあえず勉強しているところを見ている俺たち。というより2人で見る必要はあるのだろうか？

タ「受験勉強大変だなあ」

コ「うん。でも、今は何とかなつてゐるから」

ハ「でも勉強だけじやまざいぞ。桜才は面接もあるから」

桜才学園の受験は、マークシート式のテストと、面接がある。

コ「あ、そうだね」

タ「じゃあ面接の練習でもするか」

こうして、面接対策をすることになった。ちなみに質問役はタカトシだ。

タ「じゃあまず、我が校に入学したら何をしたいですか?」

いきなりオードソックスな質問で攻めてきた。まあこれくらいなら用意してー

コ「あー、その質問考えてなかつた」

考えてなかつたのかよ。

ハ「まあ、自分がやりたいことを言えばいいんだよ」

ちなみに俺は役に立つことがしたいと面接で答えておいた。…無難な回答を選んだ
はずだけど、まさか実現してしまうとは。

コ「あ、やりたいことあつた!」

タ「何?」

コ「教師との背徳恋愛?」

ハ「…なんでそれが真っ先に出るの？」

というより、お前は何をしに桜才に入る気だ。

タ「じゃ、じゃあ次に、得意な教科は？」

コ「保健体育の…保健のほうです！」

タ「ギリギリアウト!!」

：「一つ言おう。この答えは予想できた。コトミだから。

タ「えーっと、これだけは人に負けないと言えるものは？」

コ「もちろん、性的妄想です」

ハ「真面目にやれ!!」

コ「えー、十分真面目だよ」

ハ「なお悪いわ!!」

まさかここまでとは…。

だよね
タ「へー、そなんだ」
：俺たちは家に近いから、だしな。
コ「制服がかわいいからって、志望する人もいるよ。私のクラスにもいるし」

ハ 「じゃあコトミもそれが動機?」

コ 「私は家が近いから」

ハ 「さすが仲良し兄妹」

まあ人のこと言えないけど。

ハ 「あんたの妹つて、桜才受けるのよね。確か：コトミちゃんだけ翌日、生徒会室で仕事をしていると、萩村がタカトシにたずねてきた。

タ 「ああ。だから俺が勉強見てるんだ」

まあ兄だしな。

ス 「へー。でも大丈夫なの?」

タ 「おいおい」

ハ 「心配するなよ萩村」

俺が萩村に諭すように言う。

ス 「そうよね。お兄さんだもんね」

ハ 「いや、タカトシもわからないことがあると俺に聞いてくる」

ス 「やつぱり駄目じやない」

タ 「アハハハハハ…」

こらタカトシ、目をそらすな。

ス「よかつたら私が教えてあげようか?」

タ「マジ? 助かるよ」

ス「御堂だけに負担かけるのが見てられなくてね」

タ「うつ!!」

ハ「いつも思うんだけど、俺はいつまで津田兄妹の目覚ましや家庭教師を務めなればいけないんだ?」

⋮そしてまた目をそらすタカトシ。

ス「ちなみにどんなコなの?」

ハ「この間面接練習したときは、保健体育の保健が得意で、性的妄想は誰にも負けない自信があつて、教師との背徳恋愛をしたいとか言つていたな」

ス「⋮どんなコよ」

ハ「会長たち並みかそれ以上」

そのおかげで、会長たちのエロボケとかに対応できるんだよなあ。⋮なんか悲しくなってきた。

タ「あのー。なんで実の兄を放つておいて話を進めるの?」

生徒会室での仕事を終わらせ、外へ出る俺たち。中庭のベンチでは、横島先生が携帯をいじっていた。

ナ「ゲツ!!」

タ「どうしたんですか?」

何かあつたのだろうか?

ナ「こんなところに誰かガム捨てやがった」

見ると、横島先生のズボンにガムがこびりついている。脚の付け根のほうについている。

る。

ナ「なんかエロイじやん!!」

ハ「?:何に怒っているんですか?」

翌日

ハ「タカトシー、早く起きろー」

今日は生徒会の仕事が朝からあるので、早めに朝ごはんを食べ、タカトシを迎えて津田家へ向かつたが、タカトシがまだ寝ていたので、部屋の前でタカトシを呼ぶ。

タ「もうちょっと待つてー」

やがて部屋から出てきた。

タ「?:おはよう」

ハ「どこ向いて言つてるんだ」

タカトシは首を横に向けたまま挨拶してきた。

タ「いやあ、寝違えちやつて」

ハ「あー…」

無理な体勢で寝ていたのだろう。

コ「タカ兄、おはよう。あれ、どうしたの？」

コトミが挨拶してくるが、兄の異変に気づき首をかしげる。

タ「いや、じつはー（以下略）ー」

コ「そつか。その様子だと、床○○中に寝落ちしたんだね」

タ「全然違うぞ」

なんだろう。なぜかこのことで疲れる出来事が起こりそうな気がする…。
とりあえず学校へ行く俺たち。生徒会室に入ると、会長がいた。

ハ「おはようございます」

タ「…おはようございます」

シ「ああ、おはようって、津田はどこを向いて言っているんだ？」

タ「いや、じつはかくかくしかじか」

シ「そうなのか。その様子から察するに、床○○中に寝落ちしたか

ハ「全然察していませんね」

本日2回目…。

そして朝休みも終わり、朝のS H Rをしている時。このとき、担任不在のため、横島先生が代わりに挨拶することになった。

「起立、礼！」

ナ「ちよつと待て。津田はどこを向いているんだ？」

タ「いや、実は——」

ナ「なんだそういうことか。ということは、床——」

タ「ちなみにしてもせん」

⋮⋮⋮⋮⋮

ナ「なんだよ一空氣読めない奴だなあ。人がせつかく和まそそうと思つたのに——」

ハ「⋮3回も聞かされるこつちの身にもなつてみろよ」

タカトシの首は昼休みまでに治つた。

放課後、俺たちは生徒会室で書類を片づけている。

タ「ああ、インクついちやつた」

ハ「ドジだなあ」

関係ない話だが、萩村は寝ている。

タカトシはインクの付いた手をふくと、それを丸めて机の上に置いておいた。

シ「やあ、遅れてすまない」

遅れていた会長が入ってきた。

シ「む。誰だ、紙くずをここに置いたのは」

ア「津田君よ。それは、津田君の使用済みティッシュ」

シ「なんと!!」

タ「ただけどなんか違う!!」

タ：無視しよう。

タ「ふあ…ふあ…」

奇声がしたのでそつちを向いてみると、タカトシがくしゃみをしそうになっていた。

タ「あー、出なかつた」

ハ「そりや氣の毒に」

タ「出そうで出ないときつて、なんかすつきりしないよな」

ハ「確かにね。こう、落ち着かないというか、なんというか…」

シ「へー」

ア「そうなんだ」

タカトシの股のあたりを凝視する会長と七条先輩。

ハ「目線あげなさい」

何が出ないと思つたんだ、この人たちは?

コンコン

ハ「はーい」

扉をノックする音に答えてから外に出ると、五十嵐先輩がいた。

ハ「どうしたんですか？」

力「今日は、風紀活動の提案書を出しに来ました」
そういうと、俺から離れる五十嵐先輩。提案書は?と思つていると、どこからか釣竿を取り出し、提案書を先につけてあるクリップにとめる。するとそれを俺の方へ垂らしてきました。

力「では、どうぞ」

ハ「…そこまでしないと、ダメですか?」

まあこの先輩に関してはいろいろと諦めているけど。

ハ「とりあえず、天草会長に渡しておきます」

力「よろしくお願いします。しかし私も成長したわ」

ハ「は?」

力「こうして男子と自然に会話できるんだから」

ハ「…え、これで自然?」

まあいいや。

会長に風紀委員からの提案書を提出する。ちなみに七条先輩は俺が五十嵐先輩と話して?いる間にどこかへ行つてしまつた。

会長は提案書に目を通すと、メモ帳を取り出した。
シ「明日の文化委員の集会で、このことについて検討することにしよう。会議の場所は――」

タ「それなら、俺がとつておきました」

ハ「いつの間にやつたんだ?」

それくらいなら俺がやるのに。

シ「しかし津田も御堂も、生徒会の仕事が板についてきたな。一皮むけたんじやないか?」

タ「いやあ……」

ハ「それほどでも」

翌日

ア「津田君、御堂君」

七条先輩に呼び止められる俺たち。

ア「昨日シノちゃんに聞いたんだけど、二人とも、皮むけたんだって」

ハ「どういう風に聞いたの!?」

タ「それ何人に言つた!?」
この人の思考が少し読めない!!

泥沼現場

朝。

俺とタカトシ、そして萩村は学校に向かつて歩いていた。

ス「さぶい！」

季節はもう冬。冬の朝はホント寒い。

タ「冬の朝はしんどいよなあ」

ハ「だろうな。お前起こしに来たとき掛布団離さなかつたし」

タ「ちよ、それを使うな!!」

朝の格闘で、少しは体が温まつたが、それもすぐに冷えた。

シ「なつ!!」

ハ「あ、おはようございます」

タ「おはようございます、会長」

なぜか驚愕の表情をしている会長。どうしたんだろうか？

シ「ま、まさか…!?」

ハ「え？」

シ「こんな生理現象見たことない!!」

タカトシの股を見る会長。会長の視点から見てみると、タカトシの股から白い煙のようなものが出ているように見える。

タ・ス「…………」

ちなみに言うまでもないが萩村の吐息だ。

シ「どういう生理現象なんだ!?」

ハ「そんなわけあるか!!」

ス「この間、子供にナンパされたんだけど」

ハ「…ドンマイ」

萩村と生徒会室に向かっている時だつた。ちなみに今、お互の愚痴の語り合いになつてゐる。

ハ「でも俺なんかアイドルにならないかとスカウトされたことがあるんだぞ。：男なのに」

ス「まだそれならいいじゃない。私なんか…」

シ『いいや、私のだ』

ア『私のよ、シノちゃん』

生徒会室の前まで来たとき、会長と七条先輩の言い争う声が聞こえた。何かトラブル

だろうか？

ス「何やつているんだろう」

ハ「とりあえず入るか」

ガチャ

そこには、タカトシの腕を引っ張り合う会長と七条先輩がいた。タカトシは大岡裁きのようになっていた。

ハ・ス「…泥沼現場？」

タ「全然違うから」

ハ「なんだ、そういうことか」

タカトシと萩村とで校内を見回っている。ちなみに、今タカトシから、さつきのことについて聞いているところだ。

ス「それについても、津田って女に流されるタイプよね」

ハ「あるいは尻に敷かれるタイプか」

タ「ちよ、二人とも好き勝手に何言つてるんだよ！」

生徒会室まで来た時だつた。

ア『いやいやシノちゃんこそ』

シ『いや、アリアのほうが』

ハ「何が行われてるんだろう?」

タ「さあ?」

ス「とりあえずあけましよう」

ガチャ

生徒会室の扉を開けると、そこにはお互いのお腹を撫であう会長と七条先輩がいた。

ハ・タ・ス「「まさかのどんでん返し!?」」

シ「違う!!」

タ「.....」

タカトシは窓を向いたまま呆けていた。

ス「津田が呆けているわね」

ハ「じゃ、ちょっとしたイタズラするか」

そしてタカトシの背後に忍び寄り、手で目を覆つた。

ス「だーれだ?」

タ「：いや、萩村は無理だろ」

速攻でバレた!!

その夜

コ「寒い：」

コトミがまた勉強しているところを見ていてくれと頼むので、見ていた俺とタカト
シ。

ハ 「冬だからなあ」

コ 「凍え死んじやう。勉強集中できない」

タ 「オーバーだろ」

まあ、凍え死ぬのは大げさだろう。

コ 「じゃあ、タカ兄は私が眠くなつても、『寝たら死ぬぞー』ってやつてくれないの!?」

タ 「お前は眞面目に勉強しろ」

ふざけて寒いと言つたのか、それとも元気なのか…。

ハ 「でも確かに寒いな。炬燵用意するか」

コ 「やつたー!!」

タ 「仕方ないな」

そして炬燵が出来上がつた。さつそくコトミは炬燵に入つて勉強する。これで寒くて勉強できないということは言わな…。

タ 「状況悪化した」

わずか5秒で眠つてしまつたコトミ。俺はコトミの耳元によると、コトミにしか聞こ
えないような声で語りかける。

ハ「ちよつと、頭、冷やそうか？」

コ「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…あれ、ハル兄？」

ハ「寝るな」

コ「ありやー。ごめんなさい♪」

反省しているのだろうか？

まあこれで寝ることはないだろう。

タ「ハルカがいてくれて助かるよ」

ハ「俺としては、俺がいなくても何とかなつてくれる助かるんだが」

タ「うつ…！」

タカトシは言葉に詰まつた。

コ「タカ兄もしつかりしないと」

ハ「まずお前もしつかりしろ！」

コ「すいませーん。あ、ちよつと炬燵暑いや」

タ「設定温度下げようか？」

コ「大丈夫」

ハ「大丈夫つたつて…」

思わず絶句した。動いていると思つていたらスカートを取り出して投げ捨てたのだ。

ハ「ちょっと待てえ！」

その後、温度を下げたことにより、再びスカートをはいてくれたのであつた。年末も差し迫つてきたころ。

シ「今日は、生徒会室の大掃除を行う!!」

会長の一言で、生徒会室の大掃除が始まつた。ちなみに年末恒例行事らしい。

ハ「三角巾つけなきやな」

ス「髪の毛とか落ちるしね」

ア「あ、じゃあさ」

七条先輩が俺たちに声をかける。

ア「下着もつけた方がいいかな？」

タ「それはいつもつけているべきでしよう」

ハ「もしかして、七条先輩つて…」

ア「ふふふ…」

まさか本当に…。

窓のさんのような細かいところは、雑巾よりも軍手を使つたほうがきれいに拭くことができる。

ス「これが掃除のコツよ」

ハ「へー」

それは知らなかつた。

ス「あ」

ハ「どうしたの?」

ス「ささくれに引っかかつて痛い!!」

だからつて投げ捨てるなよ。

シ「そういえば」

突然会長が発言した。

ア「どうしたの、シノちゃん」

シ「昔、魔女つ娘のアニメとかあつただろう」

ハ「ありましたねえ」

タ「そうだなあ」

コトミが見ていたのを憶えている。

ス「なんで男が知つてているの?」

そこは気にしてはいけない。

ア「それがどうしたの?」

シ「ほうきを見ていると、それを思い出すんだ。ほうきにまたがつてしているシーン」

ア「ああ、あれね」

魔女がほうきにまたがつて空を飛ぶというのは昔からよくあつたことだ。
シ「今でも覚えている。あれは気持ちよさそだつた」

ア「わかるよ」

ハ「わかつちやダメだろ!!」

結局そういう話か!!

今度は棚の裏をほうきで掃く。

ハ「結構出できますね。あ、これ俺のシャーペン」

タ「これは俺の消しゴムだ」

棚の裏にはいろいろなものが紛れ込んでいたらしく、10円玉とかが出てくることもあつた。ちなみにギザ10。

ア「あ！」

七条先輩も何か発見したようだ。

ア「これ、〇〇〇〇のリモコン。こんなところにあつたんだ」

なんであるんだろうか。

タ「というより平然とできる自分たちつて…」

慣れだろうな。

ア「やつと止められるよ」

ハ「入れっぱなし!?」

まあ、なんだかんだで結構いらないものもでてきた。

ナ「おつ！」

横島先生が入つてきた。

ナ「これはごみとか?」

タ「はい、そうです」

ハ「でもこういうものつて、捨てにくいですよね」

なんだかもつたいたいような気がして。

ナ「ダメよ、それじや。そう言つて残しても結局使わないんだから、思い切つて捨てる覚悟を決めなきゃいけないわ」

こうしてみると横島先生は教師なんだと思う。：いつもがあれだけに。

ナ「ちなみに私は最近ー」

部屋の掃除でもしたのだろうか?

ナ「羞恥心も捨てたわ」

タ「え、最近」

ハ「今までもつていたんですか?」

どう考へても、随分前に捨てていると思う。

まあいろいろあつたが（萩村の、タカトシが尻に敷かれる発言に会長たちが妄想を繰り広げたり）、何とか掃除は終わつた。

シ「うむ。なかなかだな」

タ「そこは俺が拭いたんですよ」

シ「そうか。曇り一つなく、きれいだぞ」

キユツキユツと窓をこすりながら会長。

タ「そうですか。でも、会長のほうがきれいですよ」

……今なんて言つた？

シ「え……？」

タカトシの発言に顔を赤らめる会長。それもそうだ。突然そんなことを言われたならば。というよりタカトシ。お前まさか……！

タ「ほら、会長の拭いた方がきれいですよ」

シ「へ!？」

もしかしてそつち？

シ「あ、うん……」

さつきより顔を赤くさせて顔をそむける会長。

しかしタカトシ。お前ここにきてジゴロの道に進んでいないか？中学の時はここまでなつていただろうか？

ハ「ん？」

先ほどから静かな七条先輩や萩村のほうを見てみると、それぞれ違う反応をしていた。

七条先輩は、どこかわくわくしたような眼でタカトシと会長を見ている。：何を期待しているのでしょうか？

萩村のほうはタカトシに対して厳しい目をしていた。そういうえば萩村って、よくタクトシとかといつしょに仕事をしたりしようとしているよな。
：もしかして萩村も？

ハ「で、畑さんは何をしているんです？」

いつの間にか生徒会室に入り込んでいた畑さんに、俺はたずねた。ちなみに録音機器などを持つている。

ラ「ははは。こういうのはネタになるので」
相変わらずな人だった。

クリスマスパーティ

俺たちは、桜才学園の前で呆然としていた。その理由は、目の前に停まっている車にある。

ア「みんな、おはよう」

いや、あんな豪邸に住んでいるお嬢様だから、リムジンの1台や2台あってもおかしくはないと思うけどさ。

ハ「こんなクルマ、現実で見たのは初めてだ」

俺の言葉に、ほかの4人も頷く。

俺たちの目の前には、漫画でしか見られないような、長いリムジンが停まっていた。事の始まりは、終業式の日にさかのぼる。

ア「今度、私の別荘でクリスマスパーティやらない?」

シ「いいのか?」

ア「もちろん」

というわけで、七条家所有の別荘でクリスマスを過ごすことになつた俺たち生徒会メンバー。

コ 「へー、そうなんだ。いつから?」

タ 「22日から2泊3日の予定」

コ 「その日はあの日が近いから生理用品忘れないようにしなきや」

ハ 「ついてくるんだ、受験生!」

それにプラスして、本来なら高校受験で忙しいはずのコトミを加えて行くことになるのであつた。まあ、いいか。

⋮冬休み明け、風紀委員からまた何か言われそุดけど。

時間は元に戻り

サ 「皆様、到着いたしました」

ここまで運転してくれた出島さんの案内で、俺たちは車を降りる。ちなみに物語とは関係ないが、道中は緊張しつばなしで全然落着けなかつた。⋮コトミだけはしやいでいたが。

ア 「ここがうちの別荘だよ」

七条先輩が手で指し示すその先には、立派な作りの別荘があつた。結構大きい。

シ 「立派な別荘だな」

コ 「りっぱー」

会長とコトミは別荘を見てはしやいでいる。

ス「立派だわ」

萩村も思わず感想を述べていた。

シ「萩村、その位置でその台詞は津田の○○○のことを言つて いるように見えるぞ!!」
：大きな声で言わないでください。というより、そう見えるのは会長ぐらいで—

コ「タカ兄のは実際に立派ですよ」

シ「本当か？」

いたよここに。というより、非常に突つ込みたいことが。

タ「いつ見たんだよ」

まつたくだ。

とりあえず中に入る俺たち。中も広くて、調度品の趣味も悪くないよう に飾られて いる。：というより、この広さは個人の家にしても広いんじゃないだろうか？

コ「すごーい」

タ「さすが金持ち」

あんな豪邸を持つていて、さらにこんな別荘があるなんて、次元が違うなあ。

サ「津田さん、御堂さん、ひとつよろしいでしようか？」

ハ「はい？」

サ「くれぐれも、お嬢様に手を出すことの無いように」

タ・ハ 「出しません」

この人は俺たちのことをどう思つて いるのだろうか?

サ 「気を悪くされたのでしたら申し訳ございません。しかし、主の身を守るのも、メイドの務め」

タ 「へえ?」

大変だなあ。

サ 「だから貞操帯の鍵もわたくしが持つております」

⋮え?

ア 「おトイレ行きたいんだけど」

サ 「いってらっしゃいませ」

この間七条先輩の家にお邪魔した時渡して いたのもそれなのだろう。

ハ 「なんだ、この主従関係」

もしかして、これは普通なのか?

タ 「いや、普通じやないとと思うけど」

そうか。俺はまだ正常か。

コ 「わあ、すごーい」

コトミはさつきからはしやぎっぱなし だ。

タ「あまりうろうろするなよ」

コ「ちょっと探検してくるね！」

タ「おいおい……」

タカトシが何か言う前にどこかへ行ってしまうコトミ。

タ「すみません会長。落ち着きのない奴で……あれ？」

ハ「会長はコトミと一緒に探検に出かけたぞ」

タ「えー……」

やつぱり思う。会長も子供っぽいと。

ハ「それにしてもたくさんあるなあ」

俺はテーブルの上にあるプレゼントの山を見ながら言う。これらは明日のクリスマスパーティ用だ。

シ「こうしてみると、いろいろあるな。津田と御堂は何を持ってきたんだ？」

タ「俺はですね」

ハ「それは明日のお楽しみでいいんじゃないですか？」

シ「それもそうだな」

タ「そうですね。あれ？」

タカトシはプレゼントの山を見ながら、妙な声を上げる。

ハ「どうしたんだ？」

タ「いや、これ誰のだろうって」

サ「あ、これは私のです」

ハ「へえ、出島さんの」

タ「なんだろう」

ヴィイイイイイン

ハ「……え？」

サ「まあ男の人でも、違う穴に入れたりするなど、使い道はありますから」

タ・ハ（絶対当たりませんように!!）

その後、タカトシが女子の入浴中の風呂に突っ込んだり（コトミが仕掛けた）、出島さんが暴れそうになつたり（俺が止めた）したけど、もう夜遅くなつたので寝ることにした。

ハ「あれに関しては、お前は勇者だった。間違いなく」

タ「あれはコトミが仕掛けたことで!!」

いや、だからってバカ正直に突っ込むのがすごいぞ。

ハ「まあそれはともかく、もう寝るか」

タ「ともかくつて、まあいいけど」

コンコン

タ「はーい」

ガチャリ

シ「今夜は寝かせないぞ」

ハ「え、な、何?」

女子全員が入ってきたけど、なんか目を光らせていてるし、怖いよ!

その後、徹夜で人生ゲームをやりました。というよりコトミよ。勉強しろ。

翌日

ア「じゃあ、クリスマスパーティを始めまーす」

「「「いえーい」」

ア「その前に、シノちゃんから一言」

シ「おほん。みんな、今年1年ご苦労だつた。だから今夜は存分に楽しんでくれ。今

日は無礼講だから、M男の下剋上もありだぞ」

ハ「M男つて…」

俺の言葉にみんな一斉にタカトシを見る。

タ「なんでお前ら俺を見るんだ!!」

いや、なんとなく…。

ス「ま、まあともかく、パーティですから、盛り上がりましょう」

ア「そうだね。出島さんの料理が冷めちゃう前に食べちゃおう」
テーブルの上には、唐揚げやピザなどのパーティの定番料理や、七面鳥ではないから
鶏かな? の丸焼き、さらにはクリスマスケーキもあつた。

タ「これぜんぶ出島さんが作つたんですか?」

サ「はい」

ハ「おおー、すげー」

シ「どれもおいしい!」

ア「さすが出島さんね。家事はみんなお手の物だし」

へえ。まああんな大きなお屋敷の世話をしているんだから、かなりの家事スキルだろ
うな。

サ「ほめすぎですよ、お嬢様。さすがのわたくしにも苦手なものはござります」

ハ「へえ、そうなんですか?」

サ「はい。とくに洗濯は苦手です」

タ「なんでですか?」

サ「洗うのもつたいないので」

ハ「?: それは洗剤ですよね?」

サ「いえ、洗濯物です」

：なんでこの人雇われたんだろう？

シ「それにしても、靴下をみると懐かしいな」

パーティに使われている室内は、クリスマスらしく、クリスマツリーを飾つたり、壁に靴下がぶら下がっている。会長が、その靴下を見ながら語りだした。

シ「よく、靴下をぶら下げて、サンタが来るのを待つていたな」

ア「そうだねえ」

会長の場合はサンタが来るかどうか心配で眠れなかつたんじやないだろうか？（笑）

タ「それにしても靴下か…」

ハ「ん、どうした？」

コ「どうしたの、タカ兄？」

タ「いや、昔靴下ぶら下げていたなつて」

コ「ああ、そうだね」

そう言つてコトミは離れていつた。

ハ「で、本当は何を考えていたんだ？」

タ「いや、10年前のクリスマスに、コトミが言つたことを思い出してな」

ハ「えっと、何言つてたつけ…」

10年前

コ「タカ兄、ハル兄」

舌足らずな口調でコトミが俺たちのもとにやつてくる。ちなみに当時俺たちは小学1年生。コトミは幼稚園年中組。

タ「どうしたんだい?」

コ「あのね、サンタさんことで聞きたいことがあるの」

ハ「どんなこと?」

コ「えっとね、サンタさんの性癖」

ハ「：そういうこと言つてたな、コトミ」

タ「しかもサンタさんあての手紙の内容がまたー」

『くつしたよりも、ニーソやパンストのほうが、サンタさんのおじー』とはかどるとおもう。コトミ5さい』

ハ「今思えば、コトミは当時からコトミだつたな」

まつたく変わつてねえ。

タ「そうだね」

というより、なんで5歳児がニーソやパンストなんて単語知つているんだよ。

コ「それではみんなお楽しみのプレゼント交換です!!」

パーティもそろそろ終わろうかという頃、それぞれがプレゼントを持つている。

コ「音楽を流しながら部屋を真っ暗にして、プレゼントを回すルールです」

出島さんは当たりませんように!!

コ「じゃ、明かり消します」

部屋が真っ暗になる。本当に何も見えないな。

ア「なんか、興奮するね」

よっぽどプレゼントが楽しみなのだろうか?

「ハア、ハア」

「ハアハア」

ハ「ちよいちよいちょーい!!」

どういう意味で興奮しているんだ、あんたらは!!

⋮まさか脱いでいたりしないよな。いや、この人たちならあり得そう。
とりあえずプレゼント交換が終了した。みんなでプレゼントを見る。

シ「これは誰からのだ?」↑ペンドント

タ「あ、それはおれのプレゼントです」

シ「そうなのか」

ス「あんたにしてはいいセンスしているわね」

タ「俺にしてはつて…」

まあ、タカトシにしては、な。

ア「…ところでこれ誰からのかしら?」→口○○一

コ「あ、それ私です。気に入りました?」

ア「ええ、とつても。後で使うね」

⋮この会話は無視しよう。それが身のため。

ス「これは誰からのだろう?」↑イヤリング

ハ「あ、それ俺だ」

タ「ハルカって、こういうの買う時はいいよな」

ハ「なんで?」

タ「だつて、男が買う時いろいろ見られるけど、お前なら女の子として見てくれるだ
ろうから」

ハ「ほおー、表へ出ろ」

こいつはたつぱりしめてやる!

コ「まあまあ。ハル兄が女の子みたいなのは今に始まつたことじやないですかから」

ス「それ、慰めていないと思うけど」

こ、コトミまで…。

サ「これは誰からのでしよう?」

出島さんはプレゼントを見て不思議に思つていた…つて、それは!!

ア「あ、それ私のプレゼントよ」

サ「お嬢様…。ありがたく使わせていただきます」

…え、使うの?

出島さんに贈られたのは疑似○○だった。：記憶から抹消しよう。

ハ「俺のは…あ、よかつた」（ボソツ）

俺に充てられたプレゼントは音楽プレーヤーだった。

シ「それは私のだな」

ハ「いいんですか？高かつたんじや…」

シ「これはプレゼントなのだから気にすることはない。それとも嫌だつたか？」

ハ「いえ、ありがたく使わせていただきます」

実は使つている音楽プレーヤーがぼろくなつていたので、ちょうどいいと思つていたりする。

タ「……」

ハ「タカトシ。現実から目を背けるな」

タカトシは…出島さんが当たつてしまつた。おそらく、本人からしたら一番当たり

たくさんかつたものだろう。

サ「男性でしたら、別の穴に入れたりとかできますから」

出島さん：使い方はいろいろと 思います。

コ「じゃ、カラオケ大会を行おー!!」

コトミの掛け声で、カラオケを始める俺たち。周りは木や山しかないから、騒いでも大丈夫だろう。

コ「じゃ、さつそくハル兄から!!」

ハ「え、俺？」

コ「うん、じゃ、行つてみよう!!」

そういうつて、勝手に選曲するコトミ。つて、この音楽は…!!

コ「♪♪♪♪♪♪♪♪」

俺は熱唱した。トリプルブツキングの歌を…。

コ「ふう…」

あー、のど痛い。かなり熱唱したから…ハツ!!

ス「結構熱入つてたわねえ（ニヤニヤ）」

シ「かなりうまかつたぞ。声とかもよかつたし（ニヤニヤ）」

タ「よかつたぞ、ハルカ（ニヤニヤ）」

ハ「全員ニヤニヤしているんじやねえ!!!
まあ、何はともあれ、楽しいクリスマスを送つたのであつた。

新年一発

今年もあと少しで終わるころ。

俺は津田家で年越しそばを作っていた。ちなみにこの家の住人であるタカトシとコトミはテレビを見ている。

ハ「年越しそば出来たぞー」

俺は二人に声をかける。そばをもつて。

ちなみに我が御堂家の両親は海外に旅立つていった。息子を残して…。

そしてお隣の津田家は国内へ旅行に出ている。：手間のかかる二人を残して。

コ「おー、ご苦労」

タ「ああ、ありがとう」

ハ「…そういうのはこつちを見て言うものじゃないのか？あと手伝え!!」

テレビを見ながら氣怠そうに礼を言う二人に、少し、いやかなり怒り始める。：ぶつちやけ今こいつらの顔にそばを投げつけようかとを考えた。

コ「そういうえ…」

コトミがそばを食べながら顔を上げる。

タ 「どうしたんだ?」

コ 「タカ兄とハル兄の来年の目標って何?」

タ 「俺は、Noと言える人間になりたいかな」

コ 「流されたくないってこと? それとも、行きずりでエツー」

タ 「前者に決まっているだろう!!」

タ 「年越しとはいえ、いつも通りだつた。」

タ 「ハルカは?」

ハ 「俺、俺は…」

そんなもん毎年決まつている。

ハ 「男らしく見られること」

タ・コ 「「無理無理」」

ハ 「おいお前ら」

こいつらにはいろいろやつた方がいいのだろうか?

ハ 「というより、そういうコトミは?」

コ 「私? 私は1日1エロ」

ハ 「…え?」

コ 「ちなみに今は10エロぐらいね」

ハ「：いろいろ突つ込みたいが、数が減つてないか？」

タ「それより思春期過ぎることを突つ込めよ」

それはもうあきらめている。

ゴーンゴーンゴーン

タ「あ」

コ「除夜の鐘だ」

ハ「てことは、もう今年も終わりか？」

いろいろあつた今年も、もうおしまい。来年はもつと静かに：過ごせるわけないか。

というわけで正月です。

シ「あけましておめでとう」

普段着の会長が新年のあいさつをする。

ア「今年もよろしくね」

晴れ着を着こなした七条先輩が、続けて挨拶をする。

ス「では正月の恒例行事を行いましょう」

普段着の萩村が、皆を誘う。

シ「姫はじめ？」

ア「正月から大胆ね」

ハ「初詣だろ」

タ「正月から絶好調ですね」

流れからわかるかもしないが、生徒会のメンバーで初詣に行くことになつておりま
す。なんでも、毎年の恒例行事らしい。

俺たちは神社に向かつて歩いていた。

シ「そういえば、もう年賀状が届いていたぞ」

タ「へえ、速いですね」

ハ「郵便局がそういう風に届けているんだろう?」

わからぬいけど。

シ「アリア、豪華な年賀状ありがとう」

ア「いえいえ」

七条先輩の年賀状つて、どんな奴なんだろう。

ア「ハルカ君の家にも届けているよ」

⋮もしかして顔に出ていた?

ア「なんかどんなものだろうつて顔してたから」

本当に出ていたようだ。

シ「萩村、かわいい年賀状ありがとう」

ハ「いえ、お構いなく」

：萩村の年賀状つて、もしかしてくまさんとかの絵柄が入ったものとか？

ス「なんか失礼なこと考えてないか？」

ハ「い、いえ、気のせいです」

本当に顔に出ているようだ。

シ「津田。その：積極的だつたな」

タ「はつ？」

どんな年賀状だつたんだ？

シ「『新年明け〇〇』にお年玉』つてメールが来てな」

ハ「それspamだろ」

タ「spamと俺の年賀状を一緒にしないでください！」

新年早々、あまりいい目に合わないタカトシ。

シ「御堂のは普通だつたな」

ハ「いろいろ考えたんですけどね」

結局、普段通りの書き方になつてしまつた。

ア「なんだ。じゃあ、この『初詣が終わつたら〇〇〇しましよう』というメール

は…？」

ハ「それはスパムです!!」

この人もかよ!!

ハ「それにもしても七条先輩の晴れ着つて似合つてますね」
晴れ着を着た人なんて、身近じやいなかつたけど。

ア「ありがとう。でも、着付けが大変でね」

タ「へえ」

ア「出島さんも、着付けは心得ていなかつたらしくて」

ハ「そうなんですか」

ア「脱がすのは得意らしいんだけど」

ハ「それは危機でしたね」

ア「那人も新年早々絶好調のようだ。

なんだかんだで目的地の神社に着いた。

ハ「人いっぱいいるなあ」

ア「スズちゃんは、手をつないでいた方がいいかもね」

ス「子供扱いしないでください」

シ「でも、はぐれると面倒だぞ」

タ「どうしようか?」

何しろ萩村の身長じやあ、見つけるのは絶望的だからなあ‥。

ス「あ、そうだ。津田」

タ「ん、何?」

そして萩村の案とは‥。

ス「これなら問題ないわね」

それは、萩村の髪をタカトシが持つというものだつた。長い髪をツインテールにしている萩村だからできるのかも知れないが、しかし‥。

ア「お散歩プレイみたいだね」

シ「萩村はメ〇犬か」

ハ「神社でそんな会話しないでくれません?‥ほかでもやめてほしいですが」
だが先輩たちの言うとおり、少し犯罪臭がしないでもないぞ、この姿。周囲も変な目で見ているし。

‥まあ本人がいいならいいだろう。

ハ「タカトシ。会長たちはどこだ?」

タ「あれ? はぐれたかなあ」

ス「まつたくどんくさいわねえ」

‥まあ萩村に聞くのはよそう。別に見えなさそうとか、そういうわけではないぞ‥。

ドン

タ「あ、すいません」

「あ、いえ、こちら…」

相手がいきなり絶句してしまった。

ハ「あれ、五十嵐先輩？」

なんとタカトシがぶつかつた相手は五十嵐先輩だつた。みるとムンクの叫びのような顔をしている。

カ「あ、明けましておめでとう。きよ、今日は寒いわねえ」

ハ「やせ我慢しなくていいですよ」

ス「明らかに寒さとちがう震え方ですし」

男性恐怖症は共学化から1年近くたつ今になつても治らなかつたようだ。
カ「あ、あなたたちは、どど、どうしてここに？」

ハ「萩村、お前が相手して」

タ「そうだね」

ス「しようがないわねえ」

下手すれば会話が進まない。

ス「実は、会長たちと来たんですけど、はぐれちゃつたんですよね」

カ「そうなんですか」

シ「おーい」

どうやら会長たちが俺たちを見つけたようだ。

シ「む、五十嵐じやないか」

カ「あら会長と副会長。あけましておめでとうございます」

俺たちの時とは打つて変わつて普通にあいさつをする五十嵐先輩。……しかしながら、

この不公平感はなんだろう。

シ「五十嵐、ずいぶん汗をかいているようだが……」

カ「あ、これは……」

おそらくタカトシとぶつかつた後の冷や汗とかだろう。

シ「人ごみにやられたのか？」

ア「シノちゃん、ちがうよ」

シ「そうなのか？」

七条先輩は気が付いたようだ。

ア「五十嵐さんは、津田君たちとピ○○ン運動をしていたんだよ」

シ「なるほど!! 新年早々大胆だな。またよ、てことは萩村も参加したのか!?」

ハ「あんたらいい加減黙つてろ!!!」

ちなみにこの会話を聞いて、五十嵐先輩は気絶してしまったので、社務所に運ばれていった。

長い列の先にある箱にお金を投げ込み、今年最初のお願いをする。

シ「みんなは何をお願いしたんだ」

ハ「：男らしく見られますように」

4人「「「無理だな（ね）」」」

ハ「全員で突っ込まないでください!!!」

どーセ今までそういうお願いして何にもならなかつたよ!!

ハ「そういえば萩村は？」

ス「：聞きたい？」

ハ「：いや、いい。想像つくし」

シ「まあ、津田の場合は脱童貞だろうな。津田の場合は選び放題だし」

ア「まあ：」

タ「あの、本人無視して話を進めないでくれませんか!?」

タカトシは去年と相変わらずの扱いのようだ。

ア「初夢つてあるわよね」

タ「えーっと、一富士二鷹三茄でしたつけ？それをみると縁起がいいとか」

ス「ほかにも、四扇五煙草六座頭というのもあるわよ」

ハ「へえー…」

シ「そうなのかな。しかしあれだ。何を見たか思い出せない」

ア「まあ…」

タ「よくありますよね」

確かに、夢つて見たことを憶えていても何を見たか覚えていないことはよくある。

すると会長は突然、手を股のところに持つて行つた。

シ「ここまででは出ているんだが…」

ハ「それはどこから出る予定ですか？」

というより、何が出てくるんだ!?

シ「あ、そうだ。みんな、2月に新行事が行われる予定だからな。心してかかれよ」

「「「はーい」」」

こうして、俺たちは解散した。

新年早々から騒がしいメンバーだけど、今年も楽しくできるかもしない…。

タ「あれ、オチは?」

ハ 「作者が思いつかなかつたらしい」
コ 「長い間空けてこれじやあがつかりだよねえ」